HISTORY

1979 - 2013



HIROHIKO ARAKI

HISTORY

1979 - 2013

HIROHIKO ARAKI

荒木飛呂彦 HISTORY

1960年

◎**6月7日、宮城県仙台市若林区に生まれる。**

1961年～1979年

◎小学生の頃にやっていたスポーツは軟式野球。小学生時代に仙台市若林区から青葉区に転居。以降、24歳頃に上京するまでを仙台市で過ごす。

◎中学時代のクラブ活動は剣道部。合唱団にも入っていた。

◎高校時代はキリスト教系の学校だったこともあり聖歌隊に入る。

◎高校卒業後、美術の基礎を勉強するため（漫画に活かすため）デザイン専門学校に入学。専門学校に通いながら夜間や休日を使って漫画を執筆、投稿する。

1980年

◎デビュー作となる短編『武装ポーカー』を集英社に持ち込み、第20回手塚賞に準入選。

1981年

◎**デビュー作『武装ポーカー』**、「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）1981年1号に掲載。

◎短編『バージニアによろしく』、WJ1981年8月1日増刊号に掲載。

1982年

◎短編『アウトロー・マン』、WJ1982年1月10日増刊号に掲載。

◎読切版『魔少年ビーティー』、「フレッシュジャンプ」1982年3号に掲載。

1983年

◎初の連載作『**魔少年ビーティー**』、WJ1983年42号～51号まで掲載。

1984年

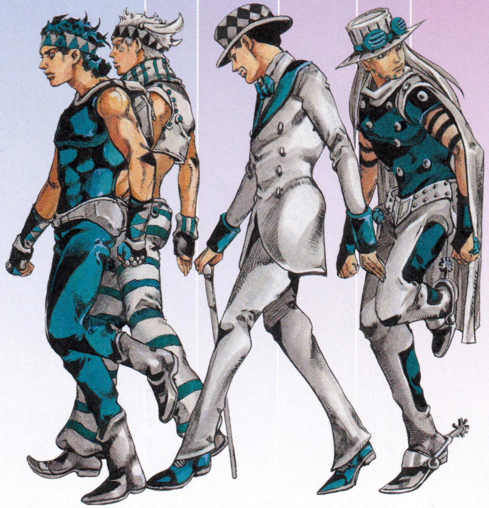
◎宮城県仙台市から、東京都内に転居。

◎連載第2弾『**バオー来訪者**』、WJ1984年45号より連載スタート。

◎この年の10月、**初の単行本となる『魔少年ビーティー』**発売。



魔少年ビーティー



1985年

◎『バオー来訪者』、1985年11号まで掲載。
◎読切『ゴージャス☆アイリン 大女の館の巻』、WJ特別編集 1985年Autumn Specialに掲載。
◎単行本『バオー来訪者』第1巻、第2巻発売。



バオー来訪者　第1巻

1986年

◎読切『ゴージャス☆アイリン スラム街に来た少女の巻』、WJ特別編集 スーパージャンプ1986年12月20日増刊号に掲載。

1987年



週刊少年ジャンプ
1987年1・2合併号表紙

◎『ジョジョの奇妙な冒険』、**WJ 1987年1・2合併号より連載スタート。**第1部は同年46号まで掲載。
◎単行本『荒木飛呂彦短編集 ゴージャス☆アイリン』発売。



ゴージャス☆アイリン



ジョジョの奇妙な冒険
第1巻(第1部)

◎**単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第1巻、発売。**
◎**『ジョジョの奇妙な冒険』第2部、WJ 1987年47号よりスタート。**

1988年

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第2～7巻、発売。

1989年

◎『ジョジョの奇妙な冒険』第2部、WJ 1989年15号まで掲載。
◎**『ジョジョの奇妙な冒険』第3部、WJ 1989年16号よりスタート。**
◎『変人偏屈列伝 エジソンを震えあがらせた大天才 ニコラ・テスラ』(原作・構成／荒木飛呂彦、作画／鬼窪浩久・藤井伸幸)、「スーパージャンプ」1989年6月号に掲載。
◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第8～13巻、発売。



ジョジョの奇妙な冒険
第6巻(第2部)

1990年

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第14～19巻、発売。

1991年

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第20～24巻、発売。



ジョジョの奇妙な冒険
第12巻(第3部)



1992年

◎『ジョジョの奇妙な冒険』第3部、WJ 1992年19号まで掲載。

◎**『ジョジョの奇妙な冒険』第4部、WJ 1992年20号よりスタート。**

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第25～29巻、発売。


ジョジョの奇妙な冒険
第29巻（第4部）

1993年

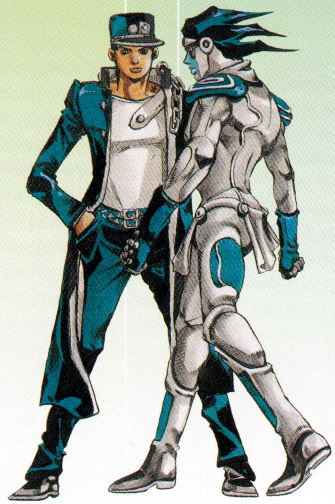

JOJO6251 荒木飛呂彦の世界

◎初の画集「**JOJO6251 荒木飛呂彦の世界**」、12月に発売。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第30～35巻、発売。

1994年

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第36～39巻、発売。



1995年

◎短編『死刑執行中 脱獄進行中』、「スーパージャンプ」1995年2号に掲載。

◎『ジョジョの奇妙な冒険』第4部、WJ 1995年51号まで掲載。

◎**『ジョジョの奇妙な冒険』第5部、WJ 1995年52号よりスタート。**

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第40～44巻、発売。

1996年

◎『ドルチ～ダイ・ハード・ザ・キャット～』、「MANGAオールマン」1996年11号～12号に掲載。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第45～50巻、発売。

1997年

◎『ジョジョ』シリーズ初のスピンオフ作品である『**岸辺露伴は動かない～エピソード16：懺悔室～**』、WJ 1997年30号に掲載。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第51～55巻、発売。


ジョジョの奇妙な冒険
第47巻（第5部）

1998年

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第56～60巻、発売。

1999年

◎『ジョジョの奇妙な冒険』第5部、1999年17号まで掲載。

◎『デッドマンズQ』、「MANGAオールマン」1999年12号～14号に掲載。

◎愛蔵版単行本『死刑執行中 脱獄進行中』、11月に発売。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険』第61～63巻、発売。



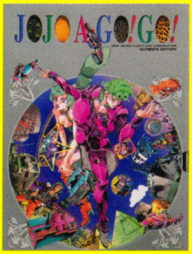
死刑執行中 脱獄進行中

2000年

◎**『ジョジョの奇妙な冒険 第6部 ストーンオーシャン』、WJ 2000年1号よりスタート。**

◎豪華画集「**JOJO A-GO!GO!**」、2月に発売。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険 PART6 ストーンオーシャン』第1(64)～4(67)巻、発売。※



JOJO A-GO! GO!

2001年

◎『変人偏屈列伝 史上最高!強打製造機タイ・カッブ』
(原作・構成/荒木飛呂彦、作画/鬼窪浩久)、
「MANGAオールマン」2001年10号～11号に掲載。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険 PART6 ストーンオーシャン』第5(68)～9(72)巻、発売。



ジョジョの奇妙な冒険
第64巻(第6部)

2002年

◎『変人偏屈列伝 誰も知らない兄弟 コリヤー兄弟』
(原作・構成/荒木飛呂彦、作画/鬼窪浩久)、
「MANGAオールマン」2002年2号に掲載。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険PART6 ストーンオーシャン』第10(73)～14(77)巻、発売。

2003年

◎『ジョジョの奇妙な冒険 第6部 ストーンオーシャン』、WJ 2003年19号まで掲載。

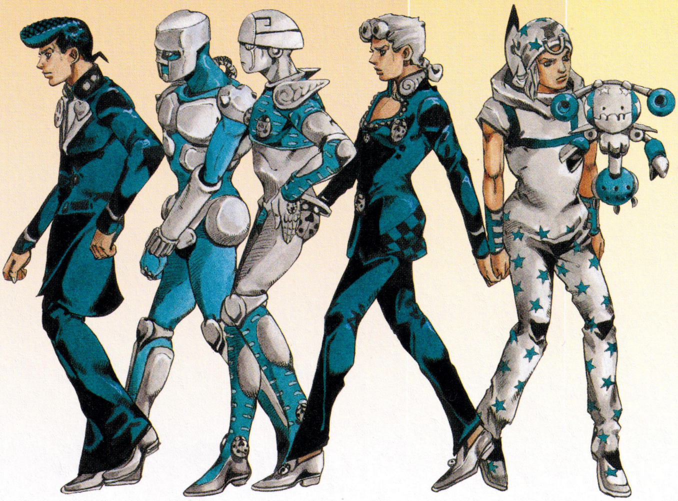
◎4月、フランス・パリにて**初の個展「JOJO in Paris」**を開催。

◎『変人偏屈列伝 オリバー君を仕掛けた世紀の興行師 康芳夫』
(原作・構成/荒木飛呂彦、作画/鬼窪浩久)、
「ウルトラジャンプ」(以下、UJ)2003年3月号に掲載。

◎『変人偏屈列伝 未亡人が増築しつづけた謎の館 ウィンチェスター・ミステリー・ハウス』
(原作・構成・作画/荒木飛呂彦)、UJ 2003年8月号に掲載。

◎『変人偏屈列伝 実在した究極の選択 腸チフスのメアリー』
(原作・構成・作画/荒木飛呂彦)、UJ 2003年9月号に掲載。

◎単行本『ジョジョの奇妙な冒険 PART6 ストーンオーシャン』第15(78)～17(80)巻、発売。



※( )内の巻数は通巻です。

2010年	2009年	2008年	2007年	2006年	2005年	2004年

2004年

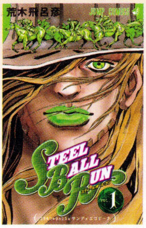
◎**『スティール・ボール・ラン』**、WJ2004年8号よりスタート。
WJ2004年8号～2004年17号、2004年29号～2004年39号、2004年46号と47号に掲載。
◎愛蔵版単行本『ゴージャス☆アイリン』、3月に発売。
◎愛蔵版単行本『変人偏屈列伝』、3月に発売。
◎単行本『スティール・ボール・ラン』第1(81)～4(84)巻、発売。



ゴージャス☆アイリン



変人偏屈列伝



スティール・ボール・ラン第1巻

2005年



ウルトラジャンプ 2005年4月号表紙

◎**『ジョジョの奇妙な冒険 第7部 スティール・ボール・ラン』、UJ 2005年4月号よりスタート。**
◎単行本『スティール・ボール・ラン』第5(85)～6(86)巻、発売。

2006年

◎単行本『スティール・ボール・ラン』第7(87)～10(90)巻、発売。

2007年

◎単行本『スティール・ボール・ラン』第11(91)～14(94)巻、発売。

2008年

◎読切『岸辺露伴は動かない －六壁坂－』、「ジャンプSQ.」2008年1月号に掲載。
◎単行本『スティール・ボール・ラン』第15(95)～16(96)巻、発売。

2009年

◎単行本『スティール・ボール・ラン』第17(97)～19(99)巻、発売。

2010年

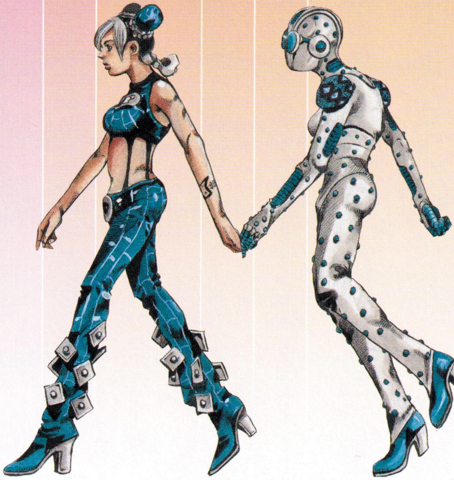
◎仏・ルーヴル美術館が企画したバンド・デシネプロジェクトの一環として、**フランス語版コミック『Rohan au Louvre(岸辺露伴 ルーヴルへ行く)』**、発売。
◎『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』、UJ 2010年4月号～6月号に掲載。
◎単行本『スティール・ボール・ラン』第20(100)～22(102)巻、発売。
◎『ジョジョの奇妙な冒険 第7部 スティール・ボール・ラン』、UJ 2011年5月号まで掲載。
◎愛蔵版フルカラーコミック『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』、5月に発売。



Rohan au Louvre



日本語版
岸辺露伴 ルーヴルへ行く



2011年

◎『ジョジョの奇妙な冒険 第8部 ジョジョリオン』、UJ 2011年6月号よりスタート。

◎GUCCIとのコラボレーション企画である『岸辺露伴 グッチへ行く』、『SPUR』2011年10月号に掲載。

◎東京・新宿のGUCCI新宿店にて9月中旬より「GUCCI×HIROHIKO ARAKI×SPUR 岸辺露伴 新宿へ行く展」を開催。

◎『ジョジョ』25周年を記念して、12月から東京・渋谷の商業ビル「QFRONT」壁面を描き下ろしイラストが飾る。

◎単行本『スティール・ボール・ラン』第23（103）～24（104）巻、発売。

◎単行本『ジョジョリオン』第1（105）巻、発売。

◎集英社新書『荒木飛呂彦の奇妙なホラー映画論』発売。


ジョジョリオン 第1巻

2012年

◎7月、故郷である宮城県仙台市にて「荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展 in S市杜王町」を開催。

◎10月、東京・六本木にて「荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展」を開催。

◎『岸辺露伴は動かない ～エピソード5：富豪村～』、WJ2012年45号に掲載。

◎単行本『ジョジョリオン』第2（106）～3（107）巻、発売。

◎集英社新書『ジョジョの奇妙な名言集part1～3〈ヴィジュアル版〉』発売。

◎集英社新書『ジョジョの奇妙な名言集part4～8〈ヴィジュアル版〉』発売。


ジョジョ展 in S市杜王町


ジョジョ展（東京）

2013年

◎短編『徐倫、GUCCIで飛ぶ』、『SPUR』2013年2月号に掲載。

◎GUCCIとのコラボレーション企画で、全世界のGUCCI直営ショップのウインドウ展示。

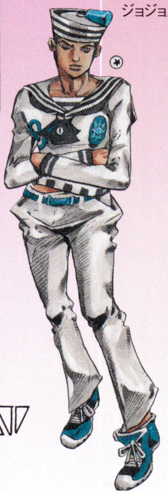
◎イタリア・フィレンツェにてGUCCI主催で原画展「HIROHIKO ARAKI AN EXCLUSIVE MANGA EXHIBITION」を開催。

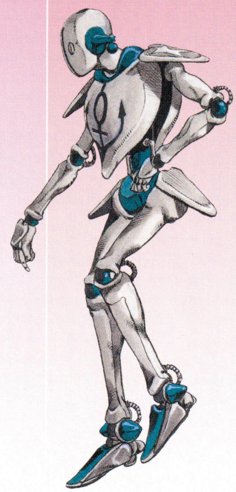
◎集英社新書『荒木飛呂彦の超偏愛！ 映画の掟』発売。

◎単行本『ジョジョリオン』第4（108）巻、発売。

◎豪華画集「JOJOVELLER」、9月に発売。


HIROHIKO ARAKI
AN EXCLUSIVE
MANGA EXHIBITION





To Be Continued

目次



ACT. 1

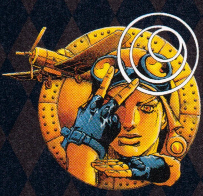
1979 ～ 1992

魔少年ビーティー

バオー来訪者

ゴージャス☆アイリン







ジョジョの奇妙な冒険

第1部
ファントムブラッド

第2部
戦闘潮流

第3部
スターダスト クルセイダース

運命対談

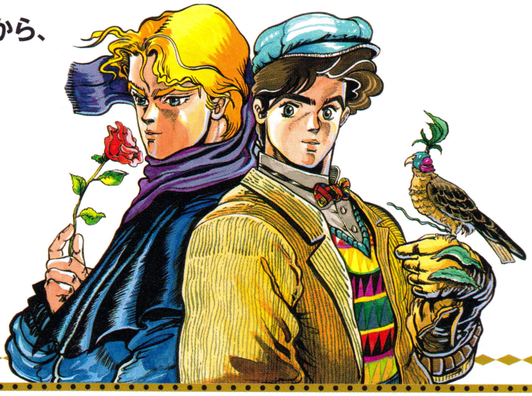
荒木飛呂彦×椛島良介（初代担当編集者）



漫画家・荒木飛呂彦と、その初代担当編集者・椛島良介。
10年という月日をともに歩み、
ともに作品を作り続けてきたふたりが
『ジョジョの奇妙な冒険』の秘話を明かす。
作家と編集者、それぞれの立場から、
出会い、作品作り、
思い出、互いのこと、
そして『ジョジョ』を語りあう——

題して「運命対談」。

1979年 ～1992年



PROFILE

荒木 飛呂彦　（あらき・ひろひこ）
漫画家。1960年6月7日、宮城県仙台市に生まれる。「週刊少年ジャンプ」1981年1号掲載の読切作『武装ポーカー』で漫画家デビュー。『魔少年ビーティー』（1983年）、『バオー来訪者』(1984年)の連載を経て、『ジョジョの奇妙な冒険』（1987年）で絶大な人気を獲得。同作は主人公や舞台を変えながらシリーズを重ね、2011年からは第8部『ジョジョリオン』を執筆。

椛島 良介　（かばしま・りょうすけ）
1979年に入社。荒木先生の初代担当編集者で、デビューから第3部のラストまでの約10年間を担当。「週刊少年ジャンプ」編集部を経て集英社新書編集部 部長（2013年9月現在）。好きなキャラクターとその理由は「ビーティー。クールでありながら友情に厚い…どことなく荒木さんのキャラにかぶるかも。最初の連載の主人公ですし」。



荒木飛呂彦！
椛島良介と会う

——30年以上にわたるお付き合いなので、あらたまっての対談というのは照れくさいかもしれませんがよろしくお願いします。

椛島　最初、「ウルトラジャンプ」（以下、ＵＪ）編集部から対談を依頼された時は、自分が表に出るのはちょっとどうかな、と思ったんですよ。編集者はあくまで黒子ですからね。

荒木　でも、あの当時のことは椛島さんしか知らないから。

椛島　漫画編集の現場から離れて10年以上経つので、時効じゃないけど、まあよいかなと。ドキュメントとして残しておくのは大事かなと思い直しました。いい機会かもしれませんね。

荒木　30年経って、こうやって対談できるのは、すごく嬉しいですよ。

椛島　でも正直、かなり忘れてるけどね（笑）。

——おふたりの最初の出会いは？

荒木　「週刊少年ジャンプ」（以下、ＷＪ）の編集部に僕が持ち込んだ時ですね。その時、椛島さんが見てくれたのが最初で、それが１９７９年くらいかな？

椛島　僕もまだ新入社員の頃ですね。

荒木　僕は当時、仙台に住んでてデザイン学校に通ってて、いろんな漫画賞に応募してたんだけど、最終選考止まりとかが多かったんで、これは

直接意見を聞かなきゃ

と思って集英社に持ち込みに行ったんですよ。

——事前にアポイントメントを取って？

荒木　いやもう、いきなり。そういうの知らなかったんですよね。当時は新幹線もなかったから特急に乗って、集英社に着いたのが午前11時くらいだったかな？

——編集者は夜型が多いから、ほとんど人がいない時間帯ですね。

荒木　その時にたまたまいて、持ち込みを見てくれたのが椛島さんで。

椛島　当時、新入社員だったから早く出社させられていたんですよ。それで編集部にいたんでしょうね。だからもう、まったくの偶然。

運命的なものを感じますよ。

荒木　それでも何かね、ちょっとその時いたのが椛島さんじゃなかったら、別の人が担当になっていたでしょうから。

——WJに持ち込んだのはどうしてですか？

荒木　最初ね、実は小学館に持ち込もうと思ってたんですよ（笑）。で、ビルの前まで行ったんだけど「でっかいなー」と思ってビビったの。その隣が集英社で、当時は小さなビルで入りやすくて、「こっちから行くか！」みたいな（笑）。それで集英社の受付の人に「持ち込みですけど」って。



★荒木先生が原稿を持って訪れた当時の集英社の社屋。写真は竣工時(1961年頃)のもので、現在は新しいビルに建て直されている。

椛島　その受付の電話に、たまたま出たのが僕だったんですよね。

荒木　あの時は本当にドキドキですよ！　編集者の方は持ち込みなんて毎日だろうけど、持ち込む方は命がけっていうか。

——その持ち込みがデビュー作の『武装ポーカー』だったんですか？

荒木　いや、別の作品ですね。何描いたんだっけな…、忘れてる（笑）。もう原稿も残ってないんですよ。

椛島　僕も見ているはずなんですけどね。どんなストーリーでしたっけ？

荒木　短編で…、あ！　砂嵐だ。たしかね、誰かが砂嵐で遭難するみたいな話だったと思う。ヒーローものとかじゃないんですよ。

完全にサスペンス

なんですよね。それでね、椛島さんにすごいことを言われるんですよ。こう、袋から原稿を取り出すや否や、

もう新人への洗礼が始まるんですよ。1ページ目で「はみ出した線を消すくらい小学生でもできるでしょ？」「絶対やめてね」みたいなことを言われて。あとはストーリーでも「どうしてここはこうなったの？」とか聞かれて。

椛島　そうだっけ？

荒木　そう。

椛島　憶えてないねぇ（笑）。

荒木　僕は憶えてますよ（笑）。言われて「ああ、そうかッ！」「ちゃんとやらなきゃいけねーんだな」と思いましたから。

――そういった指摘を受けて『武装ポーカー』が描かれたわけですね。

椛島　半年後ぐらいですかね。『武装ポーカー』を読んだ時は驚いた。最初の持ち込みの時、本当にそんなに厳しいこと言ったかな？　っていうぐらい、完成度が高くて。

荒木　言われたことをちゃんと反映できたからじゃないですかね。

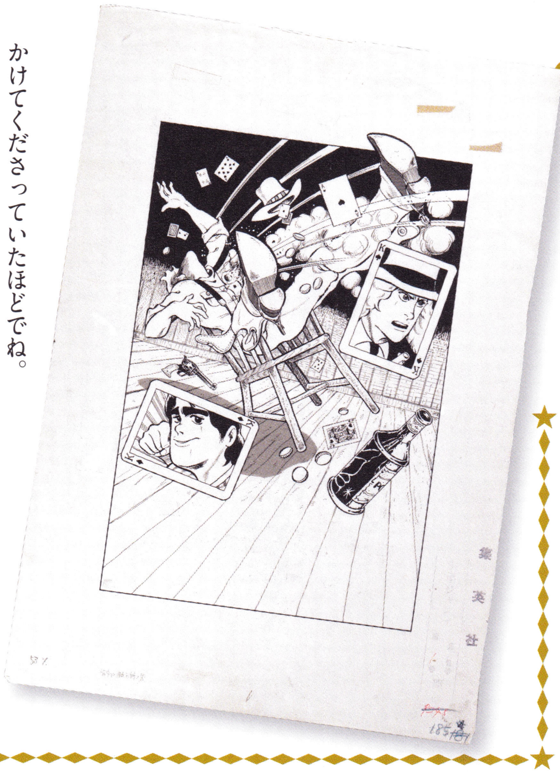
椛島　ぜひこれは手塚賞にということになって、あとはトントン拍子に準入選。手塚先生が大絶賛してくださったのを憶えてます。半年後のパーティーでお会いした時にも「荒木さん、どうしてますか？」って気にかけてくださっていたほどでね。

――実は『武装ポーカー』の生原稿をお持ちしました。椛島さんが見るのは30年ぶりくらいですか？

椛島　そうですね。手塚賞のあとWJに掲載されて。懐かしいね。

荒木　デビュー作をWJに載せてもらったのが、名誉なことっていうか。普通、新人がいきなり本誌ってあまりないんですよね。

――椛島さんから見て、新人時代の荒木先生はどんな印象でしたか？



★『武装ポーカー』のトビラ絵。対談にもあるように、通常の漫画用原稿用紙ではなくコピー紙のような薄い紙に描かれている。

椛島　独学でやってきたんだろうなというのは、この原稿を見るとすぐわかりましたよ。印刷がされない余白のところまで、きちっと枠線が引いてあったり。普通はここまで描かないから。

荒木　すっごいペラペラの紙ですよね。どんな紙に描いていいかもわかんなかったから。

椛島　あらためて見ると、もうこの当時から、描き文字とか擬音のおもしろさがありますね。「ドギュウウン」とか、「ガーン！」とかね。

荒木　でもさ、この目の前で読んでもらうのって、今もちょっと緊張するんですけど（笑）。新人の頃を思い出してしまって…。

椛島　持ち込み原稿を読む時は、お互い沈黙してる上に、それなりに時間がかかりますからね。

荒木　その「間（ま）」っていうの？　それが怖くてね。で、「ここ、ちょっとわかんないんだけど」とか聞かれるとさ、もうダメだ！　みたいな（笑）。だけど最後にちょっと「おもしろいね」とか言ってもらえると、おお！　って感じでね。

椛島　最初から、

誰かの真似ではない独特の雰囲気

はあったよね。それと、映画が好きなのかな、というのはすごく感じました。WJの漫画が好きで持ち込んだという感じではなく、最初から自分の世界を描いていた。だから正直、WJ向きじゃないな、と。

——『武装ポーカー』のあとが『バージニアによろしく』、そして『アウトロー・マン』と続きますが、椛島さんは編集者として荒木先生にどういった作品を描いてもらおうと思っていたか憶えていますか？

椛島　無理に当時のWJ風に描いてほしいとか、そういうのは一切考えなかったですね。僕自身もホラーやサスペンスが好きだったというのもあるんですけど。だから読切を描いていた頃は、『バージニア』にしても『アウトロー・マン』にしても、一言で言えば「好きにやってくれればいいよ」って感じでしたね。基本的に荒木さんの世界観というか、感性に任せていました。

——初期の短編群は、西部劇だったりSFだったり、いろんなことを試している感じが伝わって来ます。

荒木　椛島さんが喜ぶんですよ（笑）、そういう作品を描いていくと。

漫画界にないものを描け、

——喜ぶ？

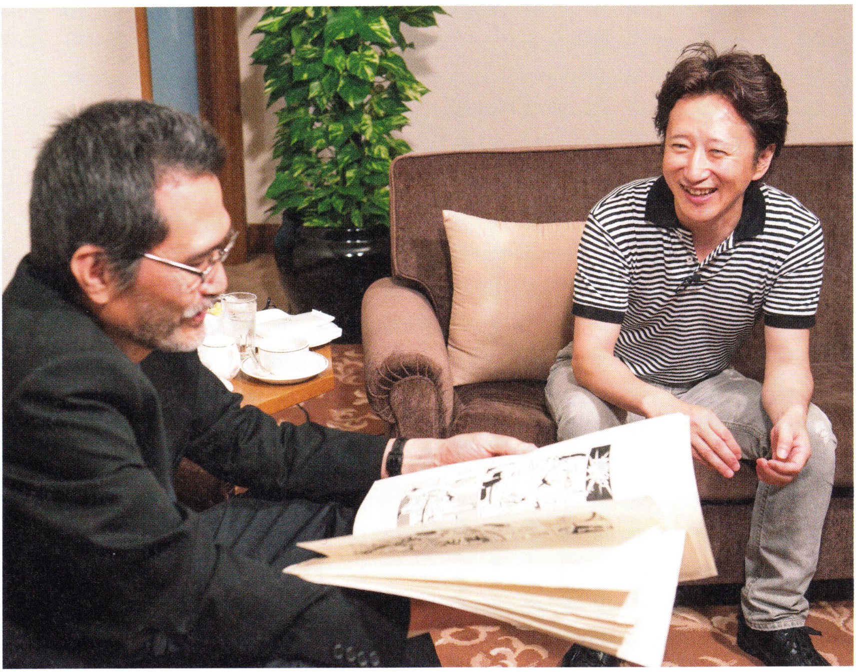
荒木　当時の他の作家が描いていないものを描けっていう雰囲気があって。そういう作品がWJにはある意味必要だったっていうか。

椛島　ただ、デビューしたからには人気も取らなきゃいけないっていうのがあるじゃないですか。そのハードルはやっぱり高かったですね。

——当時の編集部の中での、荒木先生の評価はどうだったんでしょうか。

椛島　初期の短編を読むだけでわかるように、すごいストーリーテラーでしょ？　当時のWJの他作品とはテイストが全然違ったので、「これはウチじゃないんじゃないか」って意見もあったんですけど、ストーリーテラーとしての才能は誰もが認めていたんじゃないかと思います。

荒木　でも読切はあんまり人気無かったんじゃないかと思いますね。いわゆるヒーローものでもないし、後味が良くないのもあるし（笑）。



★『武装ポーカー』生原稿を懐かしそうに見る荒木先生と椛島編集。

椛島　でも新しかったと思うんですよ。当時はスティーブン・キングとか、モダンホラーの好い作品がどんどん世に出た時代だったから、すごく刺激を受けてね。

荒木　そういう話、よくしていましたよね。あの頃、ホラー映画が新しくて。『バオー来訪者』の頃なんかも椛島さんが本とか映画とか、色々薦めてくれるんですよ。マニアックな本とか、まだ日本に入ってきてないホラービデオとか。そういうのを紹介してくれるのが刺激になって、嬉しかったですね。

椛島　荒木さんと話している時は、いつもそういう話が多い。打ち合わせはいつも30分くらいで終わって、あとはもう2~3時間くらい雑談でね（笑）。こんな面白い小説があったとか、すごい映画が見つかったとか、お互いに。趣味を語り合ってる時間でもあるんだけど、それがまた作品に繋がっていくようなね。

荒木　分析したりするんだよね。

椛島　だから楽しかったですね。

——その時間が『魔少年ビーティー』や『バオー来訪者』、そして『ジョジョの奇妙な冒険』へと繋がっていったわけですね。

椛島　そういう世界を描いていたから当時、WJ編集部では非常にマニアックな作家になると思われていたんですけど、僕はもっと多くの読者を期待できるんじゃないかと思っていて。

荒木　椛島さんがね、マイナーなところでマイナーな題材をやっても意味がない、

WJでやるから意味があるんだ

って言うんですよ。

椛島　マイナーって言ったら失礼かもしれないけど、そういう雑誌でね、そういう題材をやるのは普通じゃないですか。WJみたいな多くの読者がいる中で敢えて成功させたいな、と。それは価値があるだろうし、可能性はあるとは思っていましたよ。ただ、厳しい道のりでしたよね、やっぱり。

荒木　でも、すごく勇気づけられましたよ。おお、はいはい！　って感じ。なんかいいんですよ、そういうのが。

椛島　偉そうに色々話しましたけど、正直言えば僕も当時は駆け出しの編集者なわけです。振り返ると荒木さんは漫画家として、僕は漫画編集者として、試行錯誤しながら一緒に歩んでいったという感じですよね。

――話は少し戻りますが、おふたりが最初に出会った時の第一印象は憶えていますか？

荒木　まずね、当時のWJ編集部がものすごいイメージと違っている印象が（笑）。なんか本とか荷物が積んであったりとか「きったねーな」っていう（笑）。で、狭いんですよ。そこにいる編集さんがジーパンとかTシャツとかで仕事していたんで、なんかその…「スーツを着ているのが編集者」ってイメージと違うっていうか。あと、長髪なんですよね。ロッカーとかフォークソングのシンガーみたいな。編集部自体がものすごく怖かったです。

椛島　緊張感はすごくあったでしょうね。本当に狭かったし、毎週締切が来るのでテンションも上がっていただろうし。荒木さんは「年を取らない」ってのが都市伝説みたいに言われているけど（笑）、本当に変わってないよね。昔からルックスもファッションもあまり変わっていないし、語り口もこんな感じで穏やかだし。とはいえ、なんでも「ハイハイ」と言うことを聞く感じでもなかったですね。作品については、それなりの主張があった。

『ビーティー』登場!!
～仙台で描いた初連載作～

荒木　憶えてるのは、最初の頃は仙台で描いてて、宅配便で原稿を送るわけですよ。そうするとね、椛島さんが「ちょっと直しがあるから来て」って言うんですよ。それで4時間くらいかけて上京して、泊まり込みで集英社の会議室で直すんですよね。仙台から道具を持ってきて、ガラスの灰皿でインクを溶いたりなんかして描いたり。それで会議室で直して、また仙台に帰るっていう。隣の会議室では、連載作家さんが同じように何か描いてたりとか。そういうのを思い出しますけど。

椛島　何かの読切の時だっけ？

荒木　読切でもあったけど『ビーティー』の時もあったかな。

椛島　あれ？『ビーティー』の時はまだ東京に出てきてなかった？

荒木　仙台で描いてましたね。連載が決まる前から1話分を3週間くらいかけてひとりで描いてたんですよ。半年くらいは仙台で描いてましたよ。うん。

椛島　『ビーティー』の連載は、最初のネームを上げてもらってから実際に掲載されるまで1年半くらいかかってましたよね。その時に編集部の上司から言われたのが「少年誌で〝魔少年〟って何事だよ」と。当時は根性とかガッツで勝利していくっていうのが主流で、その中で

クールに頭脳戦

というスタイルの作品はあまり無かったし、連載作品の中でもすごい異質だった。それに対して当時の編集長が危惧したのもわからないわけではないけども、ただ僕も「すごく面白い！」っていうのは確信していたので、1年半くらいの間は編集部内で何度もやり合いましたね。当然、注文も色々返ってくるわけで、荒木さんと僕とで知恵を絞って何度も直しましたよね。

荒木　僕も、なんでダメって言われるのかまったく理解していなかったんですよ。むしろ「なんでこれがわからないんだ?」ってくらいで。『シャーロック・ホームズ』のスタイルを下敷きにして描いていたから、妙な自信があるんですよ（笑）。

椛島　麦刈公一くんがワトソンでね、ビーティーがホームズなんだよね。

荒木　それの悪者バージョンっていうか。

椛島　ピカレスクの主人公を持ってくるのはWJでは珍しかった。正直、人気は最初はかなり厳しかったんで10回連載で終わったんだけど、実は最後の「そばかすの不気味少年事件の巻」はアンケートの人気が上がったんですよ。



★『魔少年ビーティー』第1話のカラー扉。週刊少年ジャンプ1983年第42号に掲載された。

荒木 あの

最後の話、傑作ですよ。

自分で言うのもなんですけど（笑）。

椛島 連載作品が15～16本くらいだったと思うけど、その中でベスト10くらいに入ってきたんだよね。読者も『ビーティー』みたいな作品を受け入れてくれたという感触もあって、編集者としてホッとしたというか自信を持ったと同時に、「なぜ人気が上がったのか」という分析もしましたね。あれはね、そばかすの少年という敵役が良かったんですよ。それまでの敵はマッチョだったり変人だったりで、頭脳戦を仕掛けてくるタイプじゃなかった。でもそばかすの少年はある種、ビーティーと対になるようなシャープなところがあって対等に渡り合える敵です。だから頭脳戦の方向で押して連載が続いていれば、もっと面白い作品になったんじゃないかなと思いますよ。今回、あらためて作品を読んで、僕は続きを読みたくなった。『ビーティー』の舞台って、あれは仙台の雰囲気でしょ？

荒木 そうですね。あまり南の方に行ったことはなかったんで、日本は北の方しか知らないんですよ。

椛島 『ジョジョ』の第4部に似た雰囲気と、描かれる建物も外国っぽい雰囲気があったね。荒木さんに海外旅行を薦めたのもこの頃ですよね。『ビーティー』が残念ながら終了したあと、荒木さんにアドバイスしたのが「とにかく外国、特にヨーロッパには行ったほうがいいんじゃないか」って。作家さんによっては外国に行ってもただの旅行で終わる人もいるんだけど、荒木さんの場合は身になっていくんじゃないかという感じがあった。ただ、まだ荒木さんも新人だったんで編集者として僕が同行することもできなくて、ひとりで行ったんだよね？

荒木 最初はそうですね。ツアーに入って、ロンドンからパリって感じで。それが初めての海外旅行でした。

椛島 今はもう毎年のようにイタリアにも行かれてますけどね。最初にひとりで行った時、飛行機の中で具合が悪くなって乗務員さんに膝枕してもらったんだよね？（笑）

荒木 え～（笑）、まぁ、そういうのもありましたけど（笑）。

椛島 自転車で仙台から北海道まで行ったりもしてた

から、旅そのものは好きだったよね。

荒木　いや、それほどでもないですよ。海外は、まず飛行機代がすごく高かった時代なんですよね。

カルト的人気を得た『バオー来訪者』

椛島　『ビーティー』は仙台で描いて、『バオー』の連載前で上京でしたっけ？　僕と荒木さんとふたりで不動産屋を回りましたよね。

荒木　新井薬師（編集部注・東京都中野区）にワンルームを借りて、そこで『バオー』を執筆ですね。1年くらいしかいなかったですけど。そこが仕事場兼住居って感じで、東京に来ていちばん最初の頃ですね。

椛島　週刊連載は時間がないから、仙台と東京の行き来の時間ももったいなくてね。濃密な作業をするには、やはり東京でないと。

——『バオー』は、どんな打ち合わせから始まったんですか？

荒木　最初は、やっぱり肉体的なアクションにしようかっていう感じですよ。当時はシュワルツェネッガーやスタローンみたいな肉体派の映画が流行ってて、『ビーティー』が頭脳戦だったから「次はもうちょっと肉体を使おうか」みたいな発想だったと思いますよ。ある意味、ちょっとWJ的にしたっていうか。そういうのはありましたね。

椛島　『バオー』は典型的なストーリー漫画ですよね。キャラクター漫画というよりはストーリー性が強かった。だから「人気を取る」って言う意味では不利でし



★『バオー来訪者』第1話が掲載された週刊少年ジャンプ1984年第45号の表紙。

たね。荒木さんの頭の中で1本の映画のようにストーリーが構築されているものを、連載形式で週ごとに分けて読んでもらうわけですから。

荒木 そういうのはちょっとありましたね。ただ、人気を取ろうという意識は自分の中にはあんまり無かったですね。「これが受ける」とかって分析もあんまりしないし。制約がかかって描けないことが多くなりそうな感じで、嫌なんですよね。

椛島 人気の話は、あまりしなかったよね。もちろん僕は「人気を取らなきゃ」って思ってますけど、それは僕が打ち合わせの中で作品に反映させていけばいいことなので。打ち合わせでは、やっぱり

面白さを追求

していくっていう感じでしたね。でも、まぁコミックスが2巻で終わっていますから、人気は厳しかった(笑)。でも、当時の西村繁男編集長はすごく高く評価していました。今にして思うと、敵が巨大な猿とかマッチョ系が多かったけど、そこは「そばかすの少年」みたいな方向で追求したほうが良かったかもしれない。この辺は『ジョジョ』への課題として残ったと思ってますけど、荒木さんも『ビーティー』と『バオー』で得たものはすごく大きかったんじゃないですか?

荒木 そうですね。それと当時、車田正美先生が褒めてくださったことを憶えていますね。コミックスの巻末では寺沢武一先生にも褒めていただいて。嬉しかったですよ。力になりましたし、感謝してます。

椛島 ある種のカルト的な人気の反響はあったよね。アンケート以外のところでの反響が結構聞こえてきたり、連載が終わってから別の出版社の雑誌で特集が組まれたりもした。そういったことも荒木さんのある種の自信に繋がっていったと思います。

荒木 『バオー』にはドレスっていう組織が出るんだけど、椛島さんは「話の中で描かなくてもいいけど、組織はちゃんと構築しなきゃダメだ」みたいなことを言ってましたよね。架空の組織でも、現実の組織と同じようなちゃんとした背景とか目的を設定しないとリアリティが出ないってことで。それで椛島さんがよく「読んでね」って薦めてくれたのが世界中の組織・結社の本でしたね。すごく読みましたよ。「こんな世界が世の中にはあるのか」とあらためて思ったし、好きでしたよ、ああいうのは。

椛島 ああ、そういうこともよく話しましたね。漫画は何でも描こうと思えば描けてしまって、例えば簡単に地球を割っちゃったりもできるんだけど、その作品

なりのリアリティが大事なんじゃないか、とか。ひとつの大きなルールがあって、そのルールを作るためにはキャラクターや組織の背景をある程度考えておかないと、本当にリアルな感じには演出できない。

荒木　嘘の世界じゃなく、あたかも存在するようなものの中で話を進めるっていうか…。だからその手の本を紹介してくれるのがすごく良かった。最初は意味がわからなくて「趣味を押しつけられてんのかなー」とか思ったけど（笑）、ちゃんと読むと分かってきました。『エイリアン』で有名になる前のH・R・ギーガーのイラスト集やシド・ミードの画集とかも見せてくれましたね。

――この当時、椛島さんが編集者として最も注意していた点はどこですか？

椛島　それは編集者として最も基本的なことですが、まずスケジュール管理ですね。締切を守るために作家さんが徹夜を続けるのは良くないだろうと。週刊連載はマラソンと同じでペースを守っていかないと、どこかで破綻してしまうと思います。だから、

「まずスケジュールはきちんとしよう」

というのがあり、アイデアが出なくて大変な時もあったかもしれないけど、そこで時間を使うと翌週はもっと大変になる。荒木さんも、そこはブレなかったですね。締切は判で押したようにしっかりと守っていただけた。

――当時のスケジュールは、どんな感じだったんですか？



荒木飛呂彦の一週間
（1980年代後半バージョン）

月曜日	★夜、ネーム完成。
火曜日	★作画
水曜日	★作画
木曜日	★作画 ★夜には原稿が完成し、編集者への受け渡しと次週の打ち合わせ
金曜日	★オフ
土曜日	★オフ、もしくはネーム
日曜日	★ネーム

戦う女性主人公、『ゴージャス☆アイリン』

椛島　月曜日にネームチェックをして、木曜日には原稿が完成してましたね。で、その木曜日の晩には次回のだいたいの流れを打ち合わせで決めて、金曜はお休み。土曜からネームを始めて、また月曜にはネームチェックということの繰り返しでした。この「金曜から土曜にかけてのオフ」というのが大事でね、そこで色々な映画や本や、体験をしてインプットしてもらうんです。このオフを取るためにも、他の日をきちんと進めたんです。だからものすごく忙しいはずの週刊連載をしていても、荒木さんは毎週のように映画館に行ってましたよね。

荒木　ああ、そうですね。

椛島　僕もたまにご一緒したりしましたね。話題作から変な映画まで、とにかくそういうものを観に行ってました。で、そのインプットがあったから、打ち合わせの時にアイデアがどんどんと出てきたんです。





★『ゴージャス☆アイリン』が掲載された、1985年発売の週刊少年ジャンプ特別編集「Autumn Special」表紙とトビラ。

――『バオー』のあとに読切で『ゴージャス☆アイリン』を2本描いていますね。

椛島 実は『ゴージャス☆アイリン』を連載しようと考えていたんだよね、『ジョジョ』ではなくて。まあまあ人気もあったんですけど。

荒木 でもね、まず自分が男なんで、女の子を主人公にするっていうのが難しい。女の子は脇役というか助演なら描けても、バトルには向いていない時代だったんですよ。あの当時の漫画、特に少年誌には、かわいらしい女の子を描かなきゃダメっていう価値観みたいなのがあったんですよね。

椛島 僕はかわいく描いてという要求はしてなかったと思いますよ。

荒木 当時のWJっていうか、少年漫画界の雰囲気がそうでしたよ。

椛島 WJでも『きまぐれオレンジ☆ロード』がヒットしてましたね。ただ、WJ編集部そのものはそれほどラブコメやかわいい女性キャラクターという雰囲気ではなかったと思いますよ。まぁ、正直ね、私もラブコメのような作品はあまり得意じゃない（笑）。そういうセンスがないんでしょうね。

荒木 戦う女の子は本当に難しいです、

ええ。外国人を主人公にするよりも難しいと思いますね。2回くらい描いたんだけど、あれで吹っ切れた部分はあるかもしれないです。

――外国人が主人公といえば、いよいよ『ジョジョ』第1部ですね。

そして『ジョジョ』連載スタート！

――ジョナサン・ジョースターの名前は「ファミレスのジョナサンで打ち合わせをしたからジョナサン・ジョースター」なんですよね。

荒木 え、ジョナサン？（笑）

椛島 名前を「ジョジョ」にしたかったんでしょ？

荒木 頭文字がJ・Jとか、S・Sとか、韻を踏みたかったんですよ。スティーブン・スピルバーグみたいに。でも『ジョジョ』の打ち合わせを最初にやった

ファミレスはデニーズですよ。ジョナサンに行くようになったのは、そのあとなんで。

――いやいや、先生どこかで言ってますよ（笑）。「ジョナサンだったから」って。

荒木　ああ、それは「そーゆーことにしておくか」みたいな感じ？（笑）

椛島　話は面白いほうがいいよね（笑）。荒木さんは伝説好きだよね。事実よりも面白いほうがいいだろうっていう。それが根底にあるんだよね。

伝説はホラーの条件

荒木　ですから。

――じゃあ「ジョナサン」という名前は…。

荒木　J・Jって韻を踏んだっていう、ただそれだけ。特にどこかから引っ張ってきたわけではないです。

椛島　ジョナサンの由来が都市伝説みたいになっちゃってるけど、たしかに最初はデニーズで、連載途中からジョナサンでの打ち合わせになったんですよ。当時の荒木さんの仕事場に近くて便利だったし。

荒木　そのジョナサンがいいんだよね！　しかもなんかね、その店が牧場の跡だったんですよ。旧牧場の跡地にお店が建ってて、牛魂碑っていうのがあったりして。椛島さん、「そういうとこは縁起がいいんだよ」みたいなこと言ってましたよ。

椛島　そうだっけ？（笑）あのお店はまだあるのかな？

荒木　牛魂碑はあるみたいだけど、マンションか何かになっちゃってるらしいですよ。

――第1部のいちばん最初の打ち合わせで、もう波紋のアイデアはあったんですか？

荒木　要するに、何にでもルールを作りたかったんですよ。で、超能力もなんかこう、



★記念すべき『ジョジョ』第1話掲載号の表紙。
週刊少年ジャンプ1987年第1・2合併号に掲載。

「見えないものを絵にしたいね」

っていう感じで始まったんですよ。それで、波紋だったら絵に描けるから、パワーの大きさとかどれだけの強さかっていうのを見せられる。とにかく、「超能力を絵で描く」。

椛島　それはスタンドも同じだよね。ただ、波紋はその意味では不十分だったけど、スタンドは超能力を見えるものにしてキャラクターにまで持っていった。その発想は画期的ですね。スタンドという発想があったから、その後の20年も続けられたんじゃないかな。これは荒木さんに初めて言うことかもしれないけど、『ジョジョ』も最初の頃はあまり人気は無かったんですよ。第1部は、『バオー』と同じく典型的なストーリー漫画。今読んでも面白いし傑作だけど、やはりあれを毎週20ページずつ読むというのは、読者にはハードルが高かったと思うんですよ。「人気がないと打ち切り」という徹底した容赦ない厳しさがあるWJの中で、僕は打ち切りもある程度は覚悟していた。ただ、西村編集長が、ストーリーテラーとしての荒木さんの才能を非常に高く評価していた。だから人気のわりに、続けることができたんです。第1部は1年間くらいだっけ？

荒木　それくらいですね。

椛島　第1部はなにしろイギリス人じゃないですか。しかも１００年前の話（笑）。すごいよね。

荒木　やばいですよね（笑）。椛島さんも結構反対されてましたよね。「外国人が主人公なのはダメだ」って最初におっしゃってた。

椛島　厳しいとは思いました…というか普通はみんな思いますよ（笑）。世代交代ってのは、最初から決めてたの？

荒木　うん。これは椛島さんにも言ってなかったんですけど、世代交代したかったんですよ。主人公を殺しちゃうのって、それはすごい冒険でしたけど。『エデンの東』みたいな、ああいう話にしたかった。因縁があるっていうか…。もともと『ジョジョ』は第3部で完結させる構想が第1部の頃からあって、ＤＩＯが第3部でよみがえってくる話にしたかったんですよ。

椛島　それは初耳ですね。

荒木　打ち切られたら「まぁ、そこまでかな」っていうのもあったけど（笑）。

椛島　私は私で「第1部の展開で人気の獲得は難しい」って思っていたから、「打ち切りになる前に第1部にピリオドを打って、第2部の展開を考えよう」という作戦もあった。

荒木　だから第1部と第2部の間に連載の休みは入ってないですよね。

椛島　第2部、そして第3部と主人公像はかなりパワーアップしてますよね。ジョナサンはお坊ちゃんで純粋だけど人間的な魅力にまだ乏しいところがあって、ジョセフはお調子者という色が出て、第3部の承太郎になるとキャラクターにかなり陰影が出てきている。

荒木　ああ、その進化もすごいですね。

ジョナサンはディオを描くためだから。

椛島　第1部はディオがいちばん描きたかったんだよね（笑）。

荒木　そう（笑）。ディオを描くためのジョナサンなんです。

椛島　その意味でも、ジョナサンだけだとヒーローとして厳しかった。スピードワゴンやツェペリのような









TRAVEL JOJO!!

トラベルジョジョ!!

荒木先生と椛島氏の取材旅行時のスナップを掲載。
右上と左上がイタリアで、この旅で先生はイタリア好きに。
右下がエジプトでの会食。左下がフランス。
いずれも1987年～1988年頃の写真で、椛島氏が個人的に所有していたもの。こういった取材旅行が『ジョジョ』を描く糧となったのだ。

キャラクターが出てきて「主人公と仲間」という形が見え始めて、そこから読者の反響も大きくなってきたんです。こういった話は荒木さんには全然伝えていなかったんだけど、そこは阿吽の呼吸で汲んでくれたよね（笑）。第2部になると、アンケート結果もかなり良い回もありましたね。だから結構続いたはずですよ。

エジプト旅行に行こう！

荒木　椛島さんと一緒にエジプトに行ったのって、この頃でしたっけ？　あの頃の椛島さんって古代エジプトにはまっていて、それで誘ってくれて。でも

椛島　え、でも楽しかったじゃない？

荒木　楽しかったけど、好きな国ってあるじゃないですか。エジプトはあんまりそういうイメージじゃなかったわけですよ。だって椛島さん、「エジプトはコーラ瓶の底に砂が溜まってんだよね」とか「前の旅行で○○さんが食中毒になっちゃってさ」とか言うから、こっちは「行きたくないなあ」みたいな感じだったんですよ。でもその旅行でナイル川のクルーズツアーに参加したりとかして。その経験があったんで第3部の時に「じゃあ、DIOはエジプトにいることにするか！」みたいな感じになりました。

椛島　すぐ作品に取り込まれるわけじゃないんだけど、のちにそれが活きてくるというか。エジプトに行っていなければ、第3部はまた違っていたかもしれないね。

荒木　たしか飛行機で24時間くらいかかりましたよね、当時は。ロシアの上空が飛べなかったんだと思う。……あっ！　その旅行で思い出した！　あの頃の椛島さんが「読め」って薦めてくれた『現代殺人百科』を「飛行機の中で読むかー」って持っていったら、もう殺人のオンパレード（笑）。24時間ずっと（笑）。

椛島　あれ、僕が薦めたんだっけ？

荒木　そうですよッ!!　コリン・ウィルソンの『現代殺人百科』。

椛島　でもそれ、飛行機に持ってこなくていいよね、普通。

僕は特にエジプトとか行きたくなかったんですよね（笑）。

荒木 あれ読んでて、なんか機内でおかしくなりましたよ。気分が悪くなった。

椛島 24時間、ずっと読んでたんだ（笑）。

荒木 でも、その殺人鬼ってのが謎だったんですよね。「世の中にこんな人がいるのかッ?」って。明確な動機とかがないんですよね。あの辺も、ある意味で浪漫って言うと変だけど謎ですよね。

椛島 人間とは何だろうっていうね。荒木作品は〝人間讃歌〟なんだけど、影の部分をちゃんと押さえているから光である〝人間讃歌〟が描けるわけでね。でも、もともとそういうシリアルキラーとかに興味はあったでしょ？

荒木 それはやっぱり興味はあったけれど。

椛島 それはもう初期の短編を見ればねえ（笑）。

荒木 だから、あのエジプト旅行はものすごかったんですよ。行きの24時間でどれだけの衝撃を受けたかっていう（笑）。

椛島 10日間くらいの旅行だったよね？ 連載中だったから、たしかスケジュールを10週前くらいから少しずつ詰めていって。

荒木 体力ありましたよね。でも、あの旅行でいろんなものを見ましたよ。欧米のツアーの団体が、「アジア人とは一緒のバスに乗りたくない！」って言い出したりとか、何百年も前の時代の恨み言を現地の人が語っていたりとか。「世の中って、こういうこともあるんだ、スゲー」と思いましたよ。

椛島 イタリアにも一緒に行ったよね。当時の編集長と僕と、荒木さんとデザイナーさんだったかな。これ、なかなかの珍道中でしたよね（笑）。

荒木 たしか第2部を連載している頃でしたよね。

椛島 第2部でヴェネツィアが舞台で出るけど、そのちょっと前くらいでしたっけ。あれでイタリア好きに本格的に火が付いた感じだよね。あの時はたしか、ヴェネツィアから入ってフィレンツェ、ローマを回った。

荒木 美術とかもそうですし、見るものがすべてよかった。レストランにある塩の入れ物からして、何か全部すごかった。もう、何を見ていいのか判らないくらいで、「おお！」「おお、おおッ!!」って感じで（笑）。ホテルにしても建物のデザインっていうか佇まいからしてすごかったし。食べ物も黒かったりして、ビックリしました。

椛島 ああ、イカスミ？

荒木 衝撃だよね。「なんでこんな黒いものが!?」って。

椛島 当時、イカスミのパスタなんて日本で知られていなかったんですよね。やっぱり普通の人と見ている

ところが違うんでしょうね。で、どこかに行くと必ず面白いネタを見つけるっていうか出会うっていうか。いろんな刺激が向こうから来るんだよね。

確かな手ごたえを感じた第3部

——第3部ではスタンドが出ますよね。これはもう、「発明」といっていいくらいの画期的なアイデアだと思うんですが。

椛島　波紋という超能力がまだまだ抽象的で、セリフで説明しなくちゃいけなかった。それを「何とかしたいな」という時に、荒木さんから出てきたんですよ。

荒木　そうですね。「うしろから背後霊みたいなのが出てきて、そこの茶碗を割るんですよ」っていう説明をしたと思うんですよね。ただ、WJのデザイナーさんに話しても「ワケわかんない」みたいな反応だったんで、「えーっ！　キツいかなあ?」と思って。承太郎が留置場にいてスタープラチナが出てきたりするところとか、「このスタンドって何?」って編集部のみんなが言ってるよという話もありましたよね。

椛島　でも読者の反響は最初から良かったですよ。第3部で、WJ的な世界と荒木さんの世界が完全に調和できたっていう手ごたえはありましたね。あと、承太郎というキャラクターも良かった。真面目なジョナサン、お調子者のジョセフ、そして不良の承太郎でこれが日本人。それまで外国人ばかりだったから、ホッとしますよね（笑）。

荒木　親しみやすいように作り込んだんですよね、その辺は。承太郎は僕も手ごたえはありましたよ。あと



★第2部より。イタリアで初めて見た「黒い食べ物(イカスミのパスタ)」に驚いた荒木先生。その体験が、ジョセフの台詞に反映されている。

「トーナメント戦はやめよう」

って言ったのは椛島さんでしたよね。どんどん強い敵が出てくるっていう漫画の作り方があるんだけど、それはやめようって。「えっ、どーすんの？」って思ったけど（笑）。

椛島 同じようなことをやっても面白くないし、真似をしたような作品の連載は長続きしないっていうのも実際に見てますしね。

荒木 それでトーナメントをやめて、一緒に考えたのがスゴロクっていうかロードムービー的な戦い方。

——そしてエジプトへの旅行があったので、DIOはエジプトにいる設定にしたわけですね。

椛島 エジプト取材がうまく活かされた展開だよね。「DIOはエジプトにいる」というのは最初から荒木さんが、まだ漠然とした形でしたが言ってましたね。その時に僕が話したのは、「DIOはシルエットだけにした方がいいのでは？」ということ。何故かっていうと、最初からDIOの顔を見せて台詞をしゃべらせると、読者の気持ちがラスボスのDIOに行っちゃって、DIOとの戦い以外は単なる前哨戦になっちゃう。



★第3部のスタートからクライマックスまで一貫して、DIOは顔がはっきりと分からない描き方で統一されていた。

読者にはその時に描いている戦いとドラマがいちばんだと毎回思ってもらいたかったし、荒木さんや僕も先のことを考えすぎると気持ちがそっちに行ってしまう。だから、あまり先のことは考えないようにして、アイデアも出し惜しみせずにとにかく

毎週が全力投球でした。

第3部はスタンドのアイデアもいっぱい出し合いましたね。荒木さんもスケッチブックにいっぱいアイデアを書き込んでてね。アレ、今もやってるの？

荒木　今もスケッチブックにアイデアを描いてますよ。

椛島　今だと何十冊もあるんでしょ？　そのスケッチブック。とにかくそんな感じでアイデアを出し合って。でも、実際30分くらいだよね、打ち合わせをやってたのって。

荒木　うん。でも出ない時は2時間くらい話してたと思うよ。第3部あたりになってくると流れは決まっているから、打ち合わせにそんなに時間はかかってないと思うけど。

――打ち合わせの中で、例えば言い合いになったりとかはなかったんですか？

荒木　あんまりないけど。でも、意見の違いみたいなのは、まぁあったかな？

椛島　人気がない頃には僕は「人気を出すためにこうしたい」、荒木さんは「描きたいのはそれじゃない」っていうところの調整はありましたけど。人気が出てからは、そういう調整もなくなりましたね。それと漫画の打ち合わせは30分くらいで、あとは雑談だったから。

荒木　雑談の中で、「これがいいんだよ！」って薦めてきてくれるのがいいんです。それが自分がまったく知らないようなやつだと特に。あと、僕がちょうど何かを描いてる時に、偶然ぴったりな資料を見せてくれたりとか。椛島さんには、そういう超能力みたいなのがあるんじゃないですかね。

椛島　普段から自分が読んだり見たりして面白いものを薦めているだけで、荒木さんに会うからネタを仕込んでいこうとかそういうのではないし、あまり無理して薦めているというわけではないんですよ。だから嗜好性が似ているところがあるんでしょうね。お互いホラー好きだったりとか。

荒木　人に何か薦めるのが巧いですよね。資料じゃないんだけど、僕にウォーターベッドを薦めたの憶えてます？　「母親の胎内にいるような感じでいいよ」って薦めてましたよね（笑）。僕は「すっげー！」と思って買ったんだけど、3日くらいで駄目だと思った（笑）。自分には合わなかったんで、すぐ売ったもんね。





進化する荒木飛呂彦

――荒木先生の絵柄に関しては、椛島さんから何かオーダーしたことはありましたか？

椛島 絵に関しては基本的にお任せしていましたね。パースが良くないとか、そういうことは言ったかもしれないけど、絵柄は荒木さんが自分でどんどん探求しているし。だから毎回、進化していくんじゃない？

荒木 うーん。わからないですけど。

椛島 僕はすごく進化していると思いますよ。絵に関しては、『ビーティー』から『バオー』というように作品が進むたびに進化してましたね。『ジョジョ』になってからも、例えば第2部と第3部って絵柄がかなり変わってるけど、でも連載は休んでないんだから、荒木さんが意図的に変えていったんじゃないかな。

荒木 ちょっと反省して、何か新しいことをやったりするんですよ。

踏み込んでいない部分をやろう

とか、何かを追求してみようとか。絵については今でもたまに言ってくれますよね。「ちょっと下手になったんじゃないか」って。そう言われて「うそッ⁉」って。で、言われると気を引き締めますよ。

――コマの演出について、椛島さんから何かアドバイスしたことは？

椛島 それは時々ありましたね。

荒木 ちょっと分かりにくかったり、デッサンが狂っていたりすると描き直しになるんですよ。

椛島 波紋にしてもスタンドにしても、普通の日常を描いているわけではないので、そりゃ描くのも難しいでしょうね。とはいえ読者がパッと見た時に分かりやすくないとまずいので、修正をお願いしたことはありました。修正を嫌がる作家さんも中にはいらっしゃいますが、荒木さんは全然そういうことはありませんでした。

荒木 人から、19ページ全部が描き直しになった作家さんがいるらしいとか、そういう伝説を色々と聞いていたんで、コマの修正くらいですむなら有り難いと

思ってた（笑）。

椛島　ジョナサンでの打ち合わせで次の号の大きな流れは見えているわけです。もちろんネーム段階の演出で印象が変わりますが、そんなに大きく外すことは無いですね。逆にいうと、打ち合わせをきちんとやっていないとどっちに転ぶか分からないので、ジョナサンでの打ち合わせがいちばん重要だったんです。だから僕にとって木曜日は非常に重要な日だったんですよ。まず原稿が上がって、それをきちんと読んで、そして次の展開の打ち合わせ。木曜日は密度がすごく濃かったですね。

荒木　構築してから描くんですよ。そういう作り方でしたね。

椛島　だから全ページ描き直しなんて一度もなかったよね。

荒木　でも6ページ描き直しみたいなのはありましたよ。

椛島　よく憶えてるなあ（笑）。それ、6コマじゃなかった?

荒木　…6コマかもしんないけど（笑）。演出が雑だったりとか、そういう理由で「この後半が分かりにくいね」って指摘されて、僕のほうも「じゃあ最初から描き直すか」みたいな感じで。連載はページ数が短いんで、結構やりくりしなきゃ入りきらないじゃない? 1コマを描き直すだけだと、うまくそこに入れられなかったりするんですよね。だから自分から何ページか描き直したりしてた。

椛島　でも、納得してないとやらないでしょ?

荒木　もちろん。

椛島　第3部になると読者の人気も安定していた印象がありますね。もちろん多少の上下はありましたけど、アンケート結果が危険水域に入っていったという記憶はないですね。

荒木　「人気漫画になるとは思わなかったなー」っていう台詞もありましたよ。

椛島　誰の?

荒木　椛島さん。

椛島　ああ、私ね（笑）。だってイギリス貴族で100年前の話でって、ねえ…。やっぱりねえ（笑）。第3部の当時でWJは500万部を突破して躍進していく時代ですから。人気競争はレベルが高いし、新人の新連載はほとんど残らないと言っていい。その中で英国貴族のね、深紅の秘伝説ね…って誰も続くと思わないでしょう（笑）。それが、もう25年。

荒木　たしかに奇跡かもしんない（笑）。よく続いてますよね。見捨てないでくれて嬉しいです、ほんと。

故郷が無くなるような感じで。

椛島さんはその当時、3本くらい連載を抱えてたんでしたっけ。

椛島 第1部が始まった頃に『魁!!男塾』や『県立海空高校野球部員山下たろーくん』を担当してたかな? 少しあとになると『まじかる☆タルるートくん』もやってましたね。週刊連載で3本は結構忙しいですよ。

荒木 しかも新連載を立ち上げたりしてましたよね。そんな中でも『ジョジョ』を捨てないでくれてて、すごい有り難かったです。

椛島 僕が直接担当していたのは第3部の終わりまでだけど、第4部の話もなんとなくしてたよね。で、「次は日本を舞台にしよう」って言った気がする。第3部が完結する頃に僕は「スーパージャンプ」に異動が決まって、そのあとは佐々木が担当してくれたんだけど、そこでまた盛り上がっていくのもすごいね。

荒木 でも担当さんが替わるって、僕は他の担当さんについたことがないからやっぱ不安でしたよー。なんていうか、こう…、それと、椛島さんじゃない編集さんとちゃんと話したことがなくて。だから「知らない人とどうやって?」「できるのか?」ってまず思いましたね。あと、椛島さんみたいな「ここはこうしたら」っていうアドバイスとか言ってくれるのかなとか。知り合いの作家さんから、原稿をちょっと見ただけで「これダメ。見たくない」なんて言う編集者もいるぞって言われていたから。「もしそういうことを言われたらどうしよう!?」って思いましたよ。

椛島 荒木さんは他の作家さんのアシスタントを経験してなかったから。アシスタントの経験があると、いろんな編集者を見られると思うんだけど、そういうのもなかったですからね。でも実際に佐々木でホッとしたんじゃない?

荒木 そうですね。佐々木さんは優しかったですね。

——椛島さん自身は、担当を外れた時の気持ちはどうだったんですか?

椛島 人気的にも安定していたし、作品も流れに乗っている感じもあったので大丈夫だろうとは思っていましたが、残念ではありました。私は別の青年漫画誌に

パートナーとして 友として

行くわけでしたし。でもスパッと担当が替わるというのも、それはそれで良いんじゃないでしょうか。多くの担当編集の刺激があったからこそというのもあるし、歴代担当にも恵まれているんじゃないですか？

荒木 皆さん、素晴らしいです。個性豊かな人ばかりでＷＪの伝統かなーって思うし。会社の中でも出世してるし（笑）。

――第3部のコミックスの最後には、椛島さんへの謝辞が載っていますよね。

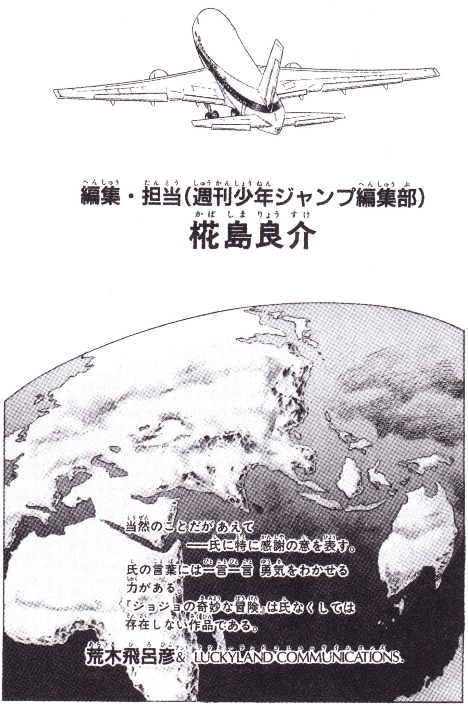
荒木 まぁ、ちょっと感謝のつもりだったんですけど、「死んだみたいだからやめろよ」って言われましたけど（笑）。

椛島 そうね（笑）。でも有り難いですね。

――椛島さんは担当を離れてからは、一歩引いた視点で作品をご覧になっていたわけですか？

椛島 あまり熱心に読まないようにしていました。担当が変われば、新しい担当者との関係の中で作品は出来上がっていくものじゃないですか。でも自分が読むとね、どうしても言いたくなるじゃない？ だから基本的には先生と新しい担当にお任せしていました。

荒木 でも『ドルチ～ダイ・ハード・ザ・キャット～』とかの短編は椛島さんが担当してくれましたね。椛島さんがチョー猫好きなんで、そこから出来た短編



★コミックスの第３部ラストページ（第28巻）に掲載された、荒木先生から椛島氏への謝辞。ふたりの信頼関係が表れている。

プロデューサーとミュージシャン

ですね。

椛島　昔から猫は描いてるよね、悪役だけど（笑）。『死刑執行中　脱獄進行中』とか『変人偏屈列伝』とかも僕が担当だね。あの頃は僕が「スーパージャンプ」に移ったので、荒木さんに助けてもらったっていうかね。でも、基本はそんなにお願いはしてないですよね。人気のある作家さんだけど、「スーパージャンプ」で連載して欲しいとか、そういうことは一切言っていないし、短編をお願いしたのも僕が異動してからずいぶん経ってからじゃなかったかな？　やはり基本的に『ジョジョ』を大切にしてほしいんで、あまり「スーパージャンプ」に引っ張っちゃいけないっていう気持ちはありました。

荒木　椛島さんはそういうところがなんか良いんですよ。短編は岸辺露伴のシリーズみたいなスピンオフ的なものも描けるのがいいですね。

椛島　青年誌だと、普段と違うテイストも描けるというのはありますよね。

――言いにくいかもしれませんが、ふたりの関係を分かりやすく喩えるなら、どんな関係なんでしょうか。

荒木　作詞家と作曲家かな？　というかとかかな。意見を聞いて作品を作っていくっていう。

椛島　僕が現場の頃はそんな感じだったね。今は年に何回か、一緒に食事をしたりとか、どっちかっていうと友人に近い、そんな感じです。

荒木　30年、あっという間でしたね。最初に会ったのって、ついこの間のようですよね（笑）。

椛島　今は会っても仕事の話はあまりしないよね？　僕も「『ジョジョ』を邪魔しちゃいけない」っていうのが大前提にあるから。だけども関係性は変わっていない。連載当時の打ち合わせという仕事の部分が抜け落ちて、今は残りの雑談だけって感じですね。

荒木　でも、たまに会うと、いろんな情報を教えてくれるんですが、それが嬉しいんですよ。あと、椛島さんはものすごいマニアックなんですよ。ちょっと言えないような変なものを集めたりしてるじゃないですか。僕、まったくないんですよ、そういう「集める」っていうのが。コレクションしないっていうか、どんどん捨てていくって感じ。

椛島　荒木さんの場合は集めるっていうか、どんどん頭に入れるんじゃない？　だってホラー映画はものすごく沢山観ているじゃないですか。

荒木　ああいう映画を観ていると、

「殺人鬼は何を考えてるんだ!?」

みたいなのがあって、そういう作品を描きたいなっていうのもあるんですよ。読者に

「荒木飛呂彦は何を描こうとしているんだ!?」

みたいな驚きを与えたいっていうか。ホラー映画にはそういう刺激があって、そこがいいんですよ。「ワケわかんないけどスゲー」って。

――椛島さんから見て、荒木先生のいちばん大きな才能とはどこだと感じていますか?

椛島　月並みだけどストーリーテリングじゃないですかね。『ビーティー』にしても初期の短編にしても現在でも通じるような展開だと思いますし、ラストにもっていく巧さや伏線の張り方は天性のものだと思います。WJでやる時は、それは諸刃だったところはあると思いますけど。あとは発想ですね。今の『ジョジョリオン』もそうですが、「思いっきりやろう」という挑戦を感じます。だから仕事もね、楽しんでやっていると思うんですよ。実は担当が変わってからの20年間で、途中で何度か荒木さんから弱音を聞いたりしたこともあったけど、基本的にはすごく楽しんでやっている。これは強みなんじゃないですか? 仕事だから描く、締切だから描くっていうのではなく、漫画を描いていくのが楽しいんじゃないですか?

荒木　まぁ…はい（笑）。たしかにね、椛島さんから「思いっきりやれ!」って言われたのも憶えています。WJは少年誌だから、描いちゃまずいこともあるんですよ。例えば喫煙シーンとかそうだけど、「そんなの、あとでちょっと修正すりゃいい」「とにかく描きたい時に描きたいことを描け」みたいなことを言われたことはあります。そういうのは嬉しいし、有り難いですね。制約を付けられると、気持ちがそこだけに行くじゃないですか。あとね、人気を取ると、それを分析してどうすればまた人気を取れるかみたいな話になりがちだと思うんだけど、椛島さんはそういうことを言わないのがいいです。

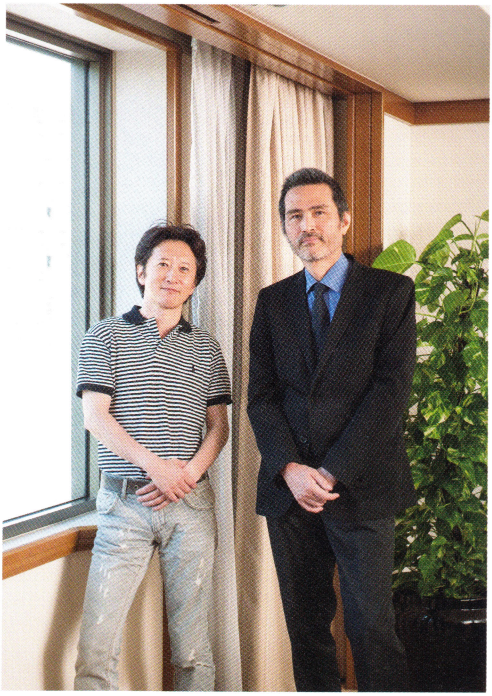
椛島　人気を取ると自己模倣というか自分の真似をしていくようになりがちで、それはよろしくないですから。荒木さんは自分の中で、常にチャレンジしているんじゃないですか？　そうでなかったら『ジョジョ』は25年も続けられない。それと『ジョジョ』ってひとつの作品なんだけど、それぞれの部で違うと言えば違う。だから今の『ジョジョリオン』も面白いけど、第9部もあれば第10部もあるような気がしますね。それと希望としては、まったく違う作品もまた読んでみたい。

——『バオー』や『ビーティー』の新作を読みたいファンも多いはずですよ。

荒木　いやぁ、『バオー』はあの終わり方がいいんで、それはないかなー。『ビーティー』はあるかもしれないですけど。わからないですけど、うん（笑）。

椛島　『ビーティー』の頭脳戦をね、またやってもらいたい。謎めいたお婆さんとかいたじゃない？　あの辺のキャラが活きてきたら、もっとすごい展開もあるんじゃないかな。『ビーティー』をやるんだったら担当してもいいね（笑）。ノーギャラでもいいよ（笑）。

荒木　『魔少年ビーティー２０１３』とか？（笑）機会とアイデアがあれば、是非やりたいですね。

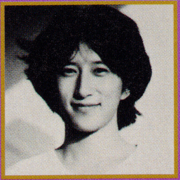




荒木飛呂彦 カバーコメント集 ACT.1

単行本カバーに掲載されている荒木先生コメントを一挙収録。ここでは「ACT．1」として、先生の初コミックス『魔少年ビーティー』に始まり、『ジョジョ』第3部が完結する第28巻までを収める。

24歳(1984)

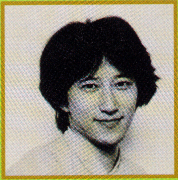


『魔少年ビーティー』

ぼくはよく人に「ビーティーにそっくりだ!」…と言われます。そのとおりだと思います。でも、あえて言わせてもらえるなら、ハンサムな主人公を描けば、みんな似てしまうのです。

ビーティーが本になるまで、多くの人の応援とご苦労があるのを知った。その人たちへの感謝と友情を一生忘れないようにしたいと思います。では、ビーティーと公一くんの冒険譚をどうぞ。

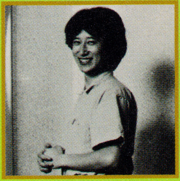
25歳(1985)



『バオー来訪者』第1巻

超能力を持てるとしたら何? と聞かれ、ぼくは即「変身!」と答えました。何にでもなれるからです。

予知とか念力とかは、ある程度やると飽きてしまうと思います。でも変身はきっと楽しいよ。他人をからかったり、いろいろな所へ行ったり……。きっと一生飽きずに遊べると思うな。そんなわけで『バオー来訪者』をどうぞ。カッコイイけど悲しいお話なんです。



『バオー来訪者』第2巻

ぼくは吊りあがった目が大好きで、謎と熱い妖気と孤独を感じます。

スティング(ミュージシャン)、マドンナ、ナスターシャ・キンスキー、ガッチャマンのジョー、カムイらの目は特に謎めいていて、大好きです。みんなカッコイイ!

……と、あこがれて『バオー来訪者』第2巻をお楽しみください。育朗の目も孤独でいっぱいです……。

26歳(1987)

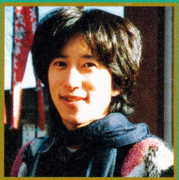


『ゴージャス☆アイリン』

50歳をこす父と母は、ぼくのマンガを読みません。絵を見てはいるのですが、理解はしていないようです。というより、なんと! マンガの読みかたを知らないらしいのです。

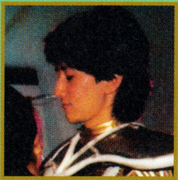
ふたりに「おもしろい!」と言わせる作品をかくのがぼくの目標ですが……それはいったいどんな作品なのだろうか? ――デビュー作「武装ポーカー」も愛をこめて併録!!

27歳(1987~1988)



『ジョジョの奇妙な冒険』第1巻

はっきり言うと、この作品のテーマはありふれたテーマ――「生きること」です。
対照的なふたりの主人公を通して、ふたつの生き方を見つめたいと思います。
「人間」と「人間以外のもの」との闘いを通して、人間讃歌をうたっていきたいと思います。
この作品がみなさんに喜びを与え、気に入ってもらえますように。
――それでは、どうぞ。



第2巻

20年くらい前のお正月。祖父と2人で墓地へ竹の花さしを盗みに行った。
祖父はそれを細長く割って、組立て、紙を貼って60㎝ぐらいの凧を作ってくれました。凧の表には「飛」という字を墨で書いてくれました。素朴だけどスゴイ凧で、圧倒的な風圧でグングン昇って行きました。ぼくは祖父をすごく尊敬しました。
おじいちゃん、いつまでも元気でね。



第3巻

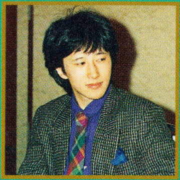
ふだん友人とかに、よくきかれる質問「火事の時ひとつだけ持ち出せるとしたら、それはなぁーに?」。ポケーっと考えてみた……(間)。ない! ぼくにはなぁにもないのである。貴重品とか高価なものとか、こせき先生のサインとか、おしいものは、ぜーんぜんない。すごくさみしくなった。
ぼくは必死にさがしてみた。すると…あった! たったひとつだけ! それは…!? (4巻につづく)

28歳(1988~1989)



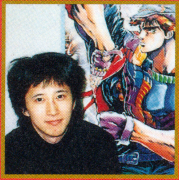
第4巻

ぼくの一番大切なもの――
それは、'79年の6月から8ヵ月間だけつけた、900円のノートの日記帳です。
ある作家の出版した日記を読んで「いいなあ」と思って、つけはじめました。
今、自分の日記を読みかえすと…これが、おもしろくって、感動して、涙まで出てくるのです。
過去の自分がいる…過去の友人たちがそこにいる…。その感動なのでしょう…。



第5巻

ファンレターを読むのは、とても楽しい。たいていは『ジョジョ』を読んだ感想が書いてあるのだけれど、中には『ジョジョ』に、まったく関係のない自分のプロフィールや学校での生活、趣味のことなどを書いてある手紙がある。
そんな手紙をまっさきに探してしまう自分に気がついた。読者が『ジョジョ』の運命を知りたいように、ぼくも読者が、どんな人か知りたいからだろうと思う。



第6巻

この仕事にかぎらず「いつまでも新人のような気持ちでいる」そう思うことが大切なような気がします。新人は、出会うものすべて新鮮で、先輩を尊敬し、目標に向かって突き進んでいけばいい。実に理想的精神状態です。
ところが、最近、気づいてみるとジャンプ連載陣には、自分より年下が、6〜7人もいるのだ!
もう、ぼくは、新人ではない! (7巻につづく)



第7巻

人間とは、自分より年下の人をなかなか尊敬できないものです。もし総理大臣が、20代の若僧だったら、その人が、どんなに優秀でも国民はバカにするでしょう。

それと同じに、ぼくは若いマンガ家がえらそーにしていると「コイツゥ、殴ってヤロカ」とか思ってしまう。過激ですが。そんな自分をイケナイヤツと反省します。

これからは年下の人も尊敬して学んでいく精神を身につけようと考えています。



第8巻

もう6年も使っているペン軸をうっかり、大掃除の時、捨ててしまったらしい。『たっ大変だ!! しっくりなじんだ、そのペン軸でなければ絵がかけないッ！　仕事にならないッ！　苦しい時も楽しい時もいっしょだった、あのペン軸！　どっどうしよう!?』と探し回ったが、かわりに新品のペン軸をみつけ、今では『新品はいいな…』としっかりなじんでしまった。ぼくは、いいかげんなヤツでしょうか？



第9巻

突然ですけど、ぼくは宇宙人なんて『いるわけない説』の人なの。以前、UFOを見たことがあるけど、絶対に目の錯覚だったと思ってるし、「だから、どうなの?」って感じだし。でも、最近、「南山宏（みなみやま ひろし）」という人の本を読んで、その超リアルなデータの数々に「ひょっとしたらいるのかな?」と思いはじめました。なにはともあれ、想像力を刺激されるのって楽しいなと思ったのでした。

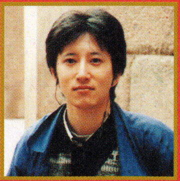
29歳(1989~1990)



第10巻

漫画というものは、たった一人の力でできるものではありません。特に最近のうちの仕事場は、結構、大所帯になってしまい、トラブルもたくさん。画材屋さんや家政婦さんには、わがままいうし、取材に行けば、旅行社の人に迷惑かけるし、大家には部屋を出てけといわれるし、「ＪＯＪＯ」にかかわった人は数知れず。

でも、全員に友情と尊敬の念を忘れてはいけないと思うのです。深い感謝です。



第11巻

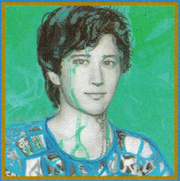
政治とかには、ほとんど関心を示さないぼくも、さすがに最近の日本の将来には、不安を少なからずおぼえます。

だれもが、お金や物質的な利益だけを求めているのは、危険だと思う。

もっと、精神的な豊かさが、必要だ！

だから、自分もマンガを通じて、もっと人のためになることをかかなくては！　と反省するのです。

（12巻につづく）



第12巻

ＪＯＪＯは、「生命讃歌」というか「人間って、すばらしいなぁ」ということをテーマにかいています。主人公にも、機械やテクノロジーにたよらずに、自分の肉体を使って、危機をきりぬけていくというこだわりが、あります。どうも自分には、理科系は、人間をかならずしも幸せには、してないなという意見が、あるからです。

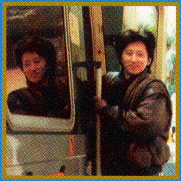
学生時代は、数学と物理は、きらいだったし（うらんじゃいないけど）。

29歳（1989〜1990）



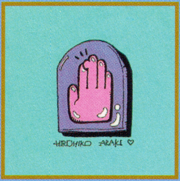
『ジョジョの奇妙な冒険』
第13巻

この巻から『スタンド』と呼ばれる新しい能力が出てきますが、それは超能力を絵でイメージ化したものです。
従来の超能力はビルを崩したり光や電気のようなものでパワーの強さを表現していました。目に見えない超能力、それ自体を表現できないかなあと思って考え出したのが『スタンド』です。
さあ！ 承太郎たちといっしょに新しい冒険の旅にでかけましょう。



第14巻

旅行に行くと、けっこうさびしくなって、人の親切を心にしみるぐらいありがたく感じる。
しかし、一方では、この親切な人は本当は悪い人で、なにかたくらんでいるのではないかとも思ってしまう。
だれが味方で、どいつが敵なのか？
ニコニコ顔で「お金出しておくんなまし」。ヒェ——。これは、こわいですよね。



第15巻

仕事をしていると、人と名刺というものを交換しあいますが、「あのーぼく、名刺ないんです。スミマセン」。デビューしてから、ずっとこう言っていました。
それじゃあイカンということで作った名刺にすり込んであるのが上図のマーク。
海外へ取材に行っても、なんとなく職業をわかってもらえるよーに漫画家の勲章、ペンダコをデザインしてみました。

30歳（1990〜1991）



第16巻

人類最古の職業といえば「売春婦」というモノが、そのNO．1の栄誉に輝く。歴史の授業でそう言っていた。（どんな仕事か、わからない人は、お父さんに聞くといいです。）
本当にそれより古い職業はないのか？ あっ、た！ 証明しろ！ と言われたら「できません」とあやまるけど、きっと古いぞッ！ それは恐怖の物語を聞かせてくれる「語りべ」である。
（17巻につづく）



第17巻

（前巻からのつづき）昔々、星空の下で火をかこみながら、老人から少しだけ恐怖する話をきく。
きっと話をきいている人たちは、ものすごい集中力で想像力を働かせて、その世界にひたりきっていただろう。
「さあ。今夜の話は、ここまでじゃ」
「もっと、ききたいよう。木の実あげるから話しておくれよう」
「あした、あした！ さぁ寝た寝た！」
このような物語を作りつづけていきたいものである。

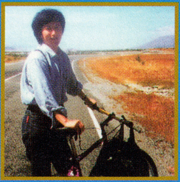
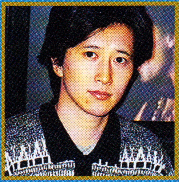


PHOTO BY KOJI KOSEKI

第18巻

「仕事中に電話すると、態度がすごく冷たい」と友人からよくいわれる。母親からの電話で「こんな冷たいヤツ、息子じゃない」といわれた時は、チョッとは反省したが。でもですね！ 仕事中、遊んでる時のようなバカ話で長電話してたら、原稿が遅れる一方ということをみんなは、なんでわかんないんでしょうね。生まれが双子座で二面性の性格なので、仕事と遊びじゃスイッチが切りかわっている—と思ってほしいです。—飛呂彦より—



第19巻

誰も気づいてくれないけど、実は'90年の12月で漫画家生活丸10年である。（祝ってくれとはいってないょいょン。）

一口に10年であるが、自分にとっては「ウーム」と声に出してうなりたくなる年月だし、20代をまるまる漫画といっしょにすごしたとなると、もう一回「ウーム」といってしまいたくなります。

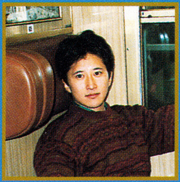
でも、この気持ち、神様とご先祖に深く感謝します。



第20巻

―80年代の初めのころ―

ぼくは仙台に住んでいて原稿のうち合わせやかき直しは、コピー（1枚40円）を送って電話で編集と連絡して仕事していました。それが不便だということが、ひとりぼっちで上京した理由ですが、その間、ファクシミリとかカラーコピーとかが発達してきて、今だったらきっと上京しなかったかもなぁと思います。時代のうつり変わりを感じる今日このごろです。



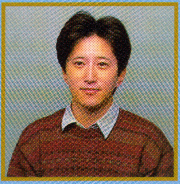
第21巻

ぼくは自慢じゃあないが、異常に記憶力が悪い。

子供のころ、なにをして遊んでたかとか、見たTVの内容など、ほとんど覚えてないし、この間なんか、「宮沢りえ」を見てイキナリ名前をド忘れしてしまって「なんて名前だっけ」と人に聞いてバカにされたし（おまけにすごい宮沢りえファン）、ほんと将来が不安であるが…。

（22巻につづく）

31歳(1991~1992)



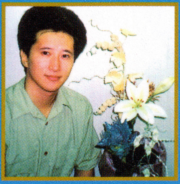
第22巻

〔前巻のつづき→〕ぼくは記憶力が異常に弱い！と落胆ばかりしていては、前むきに生活できないので、物忘れのいい点を考えよう。

●一度見た映画や本を初めて見るように何度でも楽しめ、感動できる。

●都合の悪い約束を本当は覚えていても忘れたフリをしてゆるしてもらえる。

●そして何よりも大切なことだが、主義とか過去にとらわれず身軽にアイデアが出せる。



第23巻

最近、苦手なものにタバコの煙がある。近くで他の人が吸っていても、つい気になってしまう。と、いうわけで、ホル・ホースにも禁煙してもらうことにした。しかし、以前に決定した登場人物の小道具を、イキナリ変えるのは問題があるぞ。うーむ。だが冷静に考えれば、ホル・ホースは考えをコロコロ変える男。「まっ、いっか」というわけで彼はいきなり禁煙用パイプになったのであった。



第24巻

今まで一番、恐ろしかったこと。

それは初めて「雹」というものを体験した時である。子供の時、空から降る「雹」なるものは話すらも聞いたことがなかったのです。あき地で遊んでいると突然、空がまっ黒になり、いつもカルピスに入れて飲んでるようなやつが無数にドガドガ落ちて来たのだ。「この世の終わりだ。親にうそはつきません。妹をいじめません」―そう思いました。

31歳(1991~1992)



『ジョジョの奇妙な冒険』第25巻

バカみたいに思われるかもしれませんが、自分が相撲取りになって土俵にいる夢を見たことがある。こう書くとギャグに聞こえますが実はちがう。最大恐怖を体験した夢なのだ。

まず、NHKで全国放送されていて土俵から逃げれば、日本一の卑怯者。

裸にふんどしの自分は……ゲ！　体重57kgのまだ。「殺される」。

（26巻につづく）

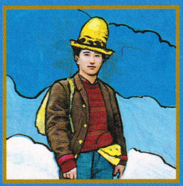


第26巻

（前巻のつづき）夢の中の自分はとにかく日本一の卑怯者になりたくないから、「なるべくケガのないように負ければよい」とちょっとズルイ気持ちで土俵上で力士と向かい合うと「見合って」の声。力士の顔が自分の4倍以上もあるやつがグオッ！とにらみつけてくる。「ゲッ！」よお～く力士の顔を見ると、昨日の試合で激突してついたと思われる額の生キズが深々とついている。そして最もうなされたのが次の場面で、そのキズがヒクヒクいって血がダラッと流れ出て来たのだ。たぶん絶叫したと思う。

（おしまい）

32歳(1992~1993)



第27巻

たった一度だけ、幽霊を見たことがある。それは数年前にイギリスを旅行した時だ。とある古城を利用したホテルに泊まりました。その日は、あまりにも疲れていたので夜8時でしたが、もう寝ることにしました。

眠りについて数分後、少しだけ開いていたバスルームのドアから、外国の女性が出て来たのです。手首から血を流して…。

（28巻につづく）

「ACT.2」はP88から。



第28巻

（27巻のつづき）その外人の女性の幽霊はスーッと部屋を移動し、ベッドの枕元に立つと無表情にぼくを見おろしました。『自分は霊感ゼロの人間だが、ついに幽霊というものを見てしまったらしいぞ』そう思いました。しかし、次の瞬間『でもスゴクねむいから、今は面倒くさいな』とちょっと心の中で思ったら、その幽霊はなんだか悲しそうにそのまま消えてしまいました。これ、本当の体験談です。人は夢だといいますが、真実です。



ACT.
2

1992～2003





ジョジョの奇妙な冒険

第4部
ダイヤモンドは砕けない

第5部
黄金の風

第6部
ストーンオーシャン

1992年〜2003年



第4部
ダイヤモンドは砕けない

PROFILE

★ささき・ひさし
1985年に入社。「週刊少年ジャンプ」編集長を経てライツ事業部　部長代理（2013年9月現在）。好きなスタンドとその理由は「パール・ジャム。単純に美味しそうだし、治してほしいところが沢山あるから。記憶力とか（笑）」。

★添JO員

佐々木尚

——佐々木さんは椛島さんから引き継いで担当されたわけですね。

★たしか第3部の最終回の原稿をもらう時に引き継ぎをしたと思います。椛島が「スーパージャンプ」の副編集長に昇進するので、それにともなっての担当変更でした。

——では先生との出会いは、引き継ぎが初めて？

★いや、第1部を連載されている頃、先生はよく編集部にいらっしゃっていたので、その時に。当時はイケメンなんて言葉はなかったので、僕らは「あれが荒木先生？」「超ハンサムじゃん」とか言ってました。服装も小綺麗というかオシャレで、体型もスマートだし。でも描いてる漫画があれでしたから（笑）、「変な人なのかな」と思いつつ話をしてみると、すごく普通に良い人じゃない？　そのギャップに驚きました。30年近くたった今でも鮮明に憶えています。

——当時、編集部の中で荒木先生はどんな作家と見られていたんでしょうか？

ンサム



超ハ

スケジュール管理能力

★『魔少年ビーティー』も『バオー来訪者』も大ヒットじゃないけどマニアックなファンを持つ、すごく特殊な作家さんだったわけです。クセの多いところも含めて才能を活かしたままメジャーに持っていくのは相当難しいタイプの作家さんなんですが、それが第1部、第2部と来て、第3部で『ジョジョ』を大ブレイクさせていた。それは荒木先生と椛島のコンビだからできたんじゃないか、と後輩の立場からは見ていました。僕らから見てもすごいコンビだったわけで、そのあとを自分が担当するんだからものすごいプレッシャーだったわけ（笑）。その反面、椛島のあとを任されたということは嬉しくもありましたね。『ジョジョ』が大好きだったってこともあるけど、当時の「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）は『ドラゴンボール』や『スラムダンク』、『幽☆遊☆白書』といった人気作があって、その中でも異彩を放っている『ジョジョ』ですから。

——実際に担当されて、先生の印象は？

★そもそも椛島から聞いていたのは「洋楽好き」「ホラー映画好き」だったけど、僕は洋楽聴かない、ホラー映画は怖くて嫌いという（笑）。ただ海外ミステリーものは大好きで、例えば当時だと『ツイン・ピークス』というテレビドラマシリーズとかね。その辺も先生はお好きだっていうことで、先生とよく海外ドラマの話はしていました。で、当時のやりとりでいうと、ネームのFAXが来て電話で打ち合わせとなるわけです。でも僕は面と向かって直接話すほうがやりやすかったんで「僕、行きますよ」って言ったら「いや、来ないでくれ」と。ひとりで考えたいというか、そういうリズムになっているんでしょうね。だから人と会うとそのリズムが狂うから「来ないでくれ」ということでした。それとすごかったのがスケジュール管理能力ですね。今もそうかもしれないけど、当時からとにかく原稿のアップが早くて遅れない人だった。本来の締切前週の木曜日の夕方には先生の手を離れてスタッフが仕上げ作業。その間に僕と先生は食事に出かけていたんですが、場所は決まって近くのイタリアンレストラン。その間は漫画の話は一切しない。先生はイタリア好きですが、僕もイタリアが大好きだったから、そういった話ばかりでしたね。で、食事が終わるとおもむろにファミレスのジョナサンに移動して1時間くらい打ち合わせをバーッとして、そのあとは本当に雑

引き出しの多さ

談でした。具体的な内容は憶えていないけど、たぶん海外ドラマとかの話かな。その雑談もひととおり終わって仕事場に戻って、スタッフの仕上げが終わった原稿を先生がチェックして僕に渡してくれるっていうリズムです。

——椛島さんの時とまったく同じですね。

★最初に原稿を渡された時に驚いたのが「何か修正とかないですか?」って聞かれたことですね。原稿に問題はないと返事をしたら「いや、何かあるでしょ?」とまた言われて「え?」って(笑)。その後も原稿を受け取る時には、何か直していただくというのは毎回ありました。あれは先生の一種のジンクスというか、儀式みたいなものかもしれないですね。

——スケジュールがしっかりしている点は、編集者としては有り難いこと?

★言い方は悪いかもしれませんが、肉体的にはすごく楽でした。リズムがまったく崩れないのは編集としても予定が立てやすいわけで、最初の画集の「JOJO6251」も僕の担当だけど、そういう本の企画も立てやすかった。

——「JOJO6251」はイラストに加えてキャラ解説記事があったりして、今でいうファンブック的なものの走りですね。

★荒木作品はコアな読者が多かったので「普通の画集とはちょっと違う面白いものを作りましょう」という話になったんですよ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——第3部のラストから第4部の途中までの担当が佐々木さんですが、第4部の立ち上げはどういった流れだったんでしょうか。

★偉大な作家さんは例外なく、ものすごく強い敵を作れる人なわけです。主人公は作家自身の投影だからある程度は作れたとしても魅力的な敵キャラは才能がないと作れないし、逆に言えばそこで作家さんの才能が現れるわけです。で、第1部から第3部は壮大なサーガともいえる物語で、DIOもWJ史上に残る敵だった。そのあとの第4部でどんな強くてすごい敵を考えているのかと思っていたら、第4部の舞台は日本、しかも仙台って言われて「え?」って(笑)。

——「より強い敵を出す」というパワーゲームの構図ではなかったわけですね。

★「ミステリアスな街にしたい」「街の地図を作っていきたい」という話も聞いて、「先生はこういうことも考えているのか」とも驚いた記憶がありますね。第

2部みたいに不思議なものを描いて第3部のロードムービーも描けて、第4部では場所を限定した世界も描こうっていう。その引き出しの多さには驚かされました。第3部で大きくメジャーになったという点もあるでしょうが、才能は当たるスポットライトの量が多ければ多いほど輝いていくわけで、おそらく、第3部の連載中に作家としてのステージを何段も上がったんだと思います。街という小さな舞台で色々な戦い方をするという話を聞くのも面白かったですね。康一のスタンドも描き文字のスタンドなんだけど、先生から「描き文字がね、なんか染み込んだら面白いと思うんだよねー」って言われて「?」（笑）。ちょっと意味が分からなくてネームにしてもらったら「なるほど!」と。

――第4部立ち上げの際に、ラスボスである吉良の話は出ていましたか?

★いや、先のことは話していませんでした。吉良が出てくる頃は垣内が担当だから彼に聞いてもらったほうがいいですね。僕が個人的に好きだったのは、トニオのスタンドのパール・ジャムです。「このイタ飯、食べたいっすね」「腰痛も治してくれないかなー」なんて話をしてましたね。あとは山岸由花子かな。当時はまだストーカーという言葉も無かった気がしますが、生活に密着した怖さがあり



★荒木先生の「描き文字が染み込む」という能力が分かる1コマ。
このスタンド能力は確かに言葉で説明されただけでは分からない。

時間には絶対に遅れない

ましたね。

——第４部はそういった個性的なキャラクターが数多く出ますね。

★岸辺露伴は先生と似ているところがありますね。露伴は「良い漫画を描くため。そのためならすべて許される」というキャラクターですが、先生も良い漫画を描くことに一生懸命な人ですから。

——第４部は短いエピソードを殺人鬼という縦の串で通すという構成なんですが、立ち上げの時に何か大きな設定とか構想はあったんでしょうか。

★何かあったかなあ…。ノストラダムスの予言にからんだ設定は聞いた気がしますね、だから年代設定が１９９９年だっていう。「次の１００年を支配する何かが杜王町にあって」といった感じだったかもしれない。でも実際は全然違うよね（笑）。週刊連載はね、最初に最終回を考えていても描いているうちに作家も成長していくから、どんどん変わっちゃうことも多いです。そりゃあ3年後に考えた最終回の方が面白いに決まってますからね。

——第４部で言うなら、短いエピソードの積み重ねの中で吉良という大きな流れも出来たわけですね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——編集部や佐々木さんからの、先生に対するオーダーはあったんでしょうか。

★『ジョジョ』に関してはないですね。僕の担当分に限っていえば、「ここらで大きな敵を出しましょう」とか、そういったことは言っていません。

——仗助の「ものを治す」というスタンド能力はスタープラチナに比べると、地味な印象を受けるんですがその辺は？

★そこは最初に聞いた時に「どうやって戦うんだろう？」「難しいかもしれない」というのはたしかにありました。ただ、先生から「こういう戦い方をしますよ」というアイデアがバンバン出てきて、「ちゃんと見越して考えていたのか」と思いましたね。第3部は戦いの連続だったので、「ものを治す」というのはそれの反動だったのかもしれない。仗助にしろトニオにしろ、平和なスタンド、優しいスタンドですから。

——第４部は読者の反応はどうでしたか。

★年齢層で言うと、やはり高めの読者が多かったですね。少年というよりは青年に近い年齢層の男子が多かったんじゃないかな。

——担当されていた中で、先生の特徴的な印象に残ることは？

★締切もそうだけど、約束の時間には絶対に遅れな

約束の

いってのはありますね。リズムを崩さないというか。だからこちらも、当たり前のことではあるんだけど時間は厳守してました。時間に遅れたからといって怒るような人でもないんだけど、作家さんがそこまできっちりやってくださるわけだから、締切を守れって言ってる立場の僕らはそれ以上にきちんとやらなきゃね。

――荒木作品は担当前から読んでいたんですか？

★全部、リアルタイムで読んでいました。最初にも言いましたが、初めて会った時はごくごく普通の感じのいい人でしたから本当に驚きました。ただ、逆に言うと超多忙なはずの週刊連載をしていながら常人以上に規則正しい普通の生活を送っているので、「そっちのほうがスゲエ」と思います。週刊連載であれだけ緻密な構成をして緻密な絵を描いてオリジナリティにあふれる作品を出しつつ、きっちり休みは取って年に何回かはイタリアに行く。その普通っぷりがすごい。他の作家さんにも言えることだけど、気持ちが入ったら周囲が見えなくなるほどの集中力があり、それを維持しているだけでも常人離れしているのにね。

インプットの量が半端ない

――編集者という立場から、『ジョジョ』が長く続けられる理由はどこだと思いますか？

★アイデアが枯渇しないこと。もっと言うと、インプットの量が半端ないってことですね。『ジョジョ』と同じく長く続いているという点で『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の秋本治先生の話になりますが、秋本先生は何の天才なのかというと好奇心の天才なんです。普通の人であればある程度の年齢になれば、色々と冷めてきたり面倒と思ってしまうはずなんですが、秋本先生は純粋な好奇心を持ち続けていて、そこが『こち亀』という作品の原動力になっている。荒木先生もまったく同じで映画でもファッションでも、新しいものを取り入れていくどん欲さが秘訣だと思いますね。だって人間の頭の中から出るものなんて限りが

新しいものを取り入れていくどん欲さ

あって、5年で枯れますから。ちゃんと絶えず新しいものを入れて、自分の中で咀嚼してアイデアとして持ち続けられるという点で、描いている作品はまったく違いますが秋本先生と荒木先生はものすごく似ていると思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——第4部のあとも『ジョジョ』の連載は第5部、第6部と続きました。その頃も佐々木さんはWJ編集部に在籍していたわけですが、読者の反応はどうだったんでしょうか。

★読者アンケートの結果は、実はただの数字なんです。大切なのは、その数字をどう読むか。だから例えばアンケートが低かったとして、それがどの年齢層にどう受けたのかという点をちゃんと見た上で、作品の実際の人気を読み取るのも編集の仕事なんです。その点でいくと『ジョジョ』は、トップを走る作品じゃないけど間違いなくWJの看板作品でした。余談ですが僕個人の気持ちでいうと『ジョジョ』以外の作品、例えば『ゴージャス☆アイリン』みたいな作品も読みたいなと思っていましたが、ある時期から先生は「『ジョジョ』しか描かない」といったことを言ってらして、

誰も真似できない。

「そうなんだ、勿体ないな」と思っていたことはあります。

——第6部のあと、第7部である『スティール・ボール・ラン』はWJで不定期連載という形に掲載スタイルが変わり、途中で「ウルトラジャンプ」（以下、UJ）に連載の場を移しました。佐々木さんはそれをずっと間近で見ていた数少ない編集者のひとりになります。

★第7部の不定期連載については、先生の中で少年向けの週刊連載というペースが『ジョジョ』に合わなくなってきているんじゃないか、という気持ちもあったと思います。合わせてWJ自身もかつてのように「毎週絶対載せる」というスタイルではなくなっていて、いろいろな連載スタイルがあってもいいのでは、という流れでした。ベテランの作家さんに対しては杓子定規な接し方もしていなかったし。それで不定期連載という流れになったはずです。移籍の時は僕は副編集長になっていましたが、第6部が終わったあたりで作品も作風もWJ本来の少年読者から離れつつあったんでしょうね。荒木ファンの年代がWJのメインどころで

ワン&オンリーの作品

はなくなってきていたという点もあったと思います。それで荒木先生からの要望もあってUJに移籍という形になりました。『ジョジョ』を次のステージに上げるには少なくとも舞台はWJではないだろうし卒業の時期だったんだろうと思っています。

――歴代の担当編集者という立場から見て『ジョジョ』と荒木作品の魅力はどこでしょうか。

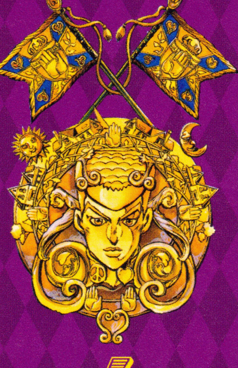
★ワン&オンリー感、他では読めないものがいっぱいあるっていうことですね。セリフ回し、展開、コマの構成、ポーズの取り方、すべてが他の漫画では見られなくて、それが『ジョジョ』を『ジョジョ』たらしめている。漫画に限らず大ヒット作はすべてそうなんですが、オリジナリティに関しては誰も真似できないものがあります。



★「ジョジョ立ち」と呼ばれる荒木作品独特のポーズ。
これも他の漫画では決して見られない「ワン&オンリー」。

――特にスタンドはそうですよね。誰も真似できない。

★発明ですね。「超能力を形にする」って言われてみればそうなんだけど、それまで誰も思いつかなかったし、今それをやったら「スタンドだね」と絶対言われてしまう。そういうワン&オンリーの作品ですね。



第4部
ダイヤモンドは砕けない

★添JO員
垣内 克彦

PROFILE

★かいと・かつひこ
1989年に入社。『週刊少年ジャンプ』編集部を経てビジネス書編集部 ビジネス書第1編集編集長（2013年9月現在）。好きなスタンドとその理由は「ハーヴェスト。可愛いのと色々便利だから（笑）」。

「思いついたんだよ！殺人鬼だよ!!」

―垣内さんが担当されたのは、どこからなんでしょうか。

★第4部を佐々木から引き継いで、レッド・ホット・チリ・ペッパー戦からハイウェイ・スターが終わるところあたりまでが担当です。いちばん最初の打ち合わせの時、先生は「『ジョジョ』はスタンドのアイデアがいっぱいあるから、長くやりたいんだよね」といったことを言っていました。

―第4部は舞台が日本の杜王町なんですが、佐々木さんへの取材によると「杜王町にはノストラダムスの予言に絡んだ何かがある」という設定が当初あったらしいんですが。

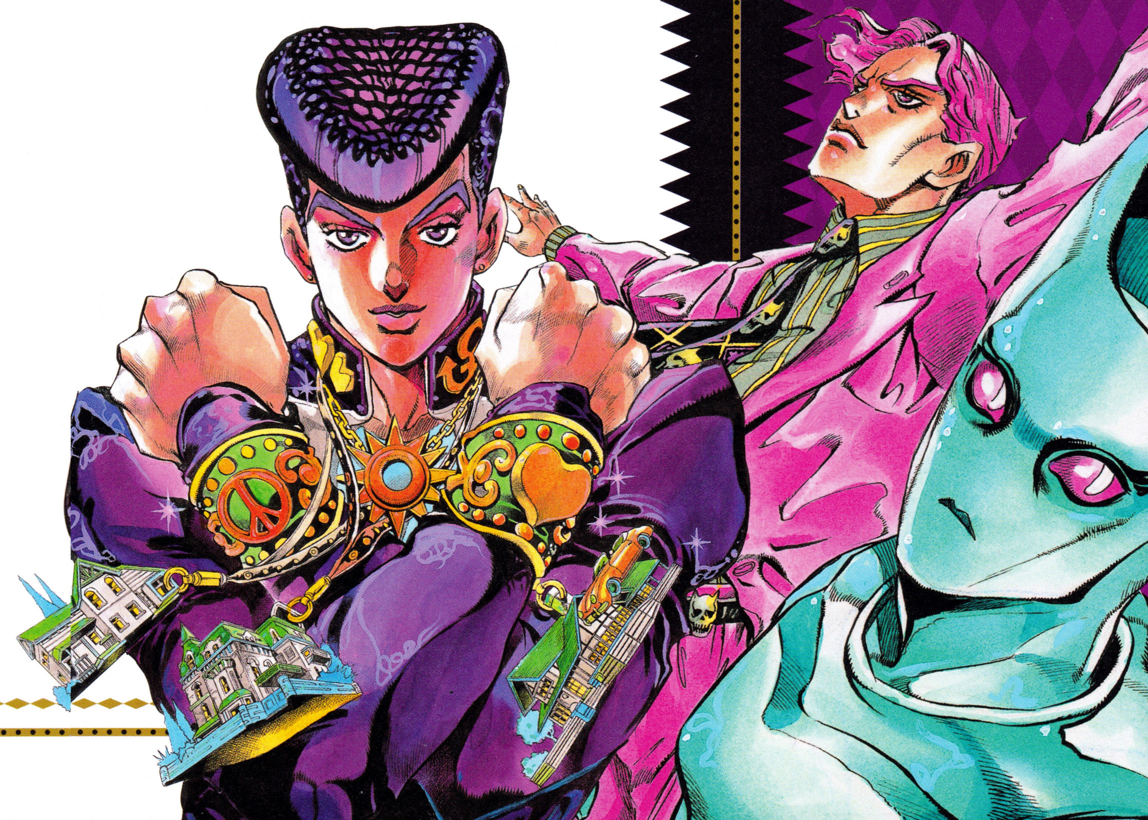
★ああ、たしかに佐々木から「杜王町の地下に遺跡があるらしいんだよ」といった設定は聞いた記憶があります。でも私が最初に担当したレッチリ戦で、ザ・ハンドが地面を削ったら出てきたのは電気ケーブルだったので（笑）、荒木先生はもう古代遺跡の設定とかをやる気はないのかもしれない、とは思っていました。週刊連載は変わっていくものなんですよ。第4部は先生が吉良というキャラクターを見つけたことで、いろんなことが決まったんだと思います。

―垣内さんの担当時代にラスボスの吉良が登場しましたね。

★杉本鈴美のエピソードで殺人鬼（吉良）の存在が明らかになるんですが、先生も私も怪談にはまっていた時期だったので、当初はそれっぽい幽霊のエピソードを何回か短くやろうというレベルだったんですよ。それで杉本鈴美のエピソードが始まって3週目の打ち合わせの時に、先生が突然「この街に殺人鬼がいるのって面白いよね？」って言い出したんです。あの日の打ち合わせはすごく楽しそうで「思いついたんだよ！殺人鬼だよ!!」「鈴美を殺した犯人をラスボスにしたい！」と。はっきりと「ラスボス」と言ったのも憶えています。吉良を出すのが決まったタイミングはそこですね。



★もしも隣人が殺人鬼だったら？　第4部の敵である吉良＆キラークイーンは、そんな「身近な恐怖」を感じさせるキャラクターに仕上がった。



「『ジョジョ』は違うから」

—吉良について「週刊少年ジャンプ」（以下、ＷＪ）編集部の反応はどうでしたか？

★実は当時、編集部のみんなから「ＤＩＯ以上の敵が出てこない。どうなっているんだ」ということは言われていました。でも先生と話をしても「ＤＩＯより強い敵を出しても、それは単なる強さのインフレでしかない。『ジョジョ』は違うから」という返事でしたね。なので私は正直、「第４部はラスボスが出ないままかもしれない。中ボスを倒しながら杜王町の地図が完成して終わるのかな」と思っていました。だからラスボスの話が出た時に、「ついに来た!!」というのは自分の中でありましたね。しかも街という身近な世界で敵が殺人鬼。いいですよね。

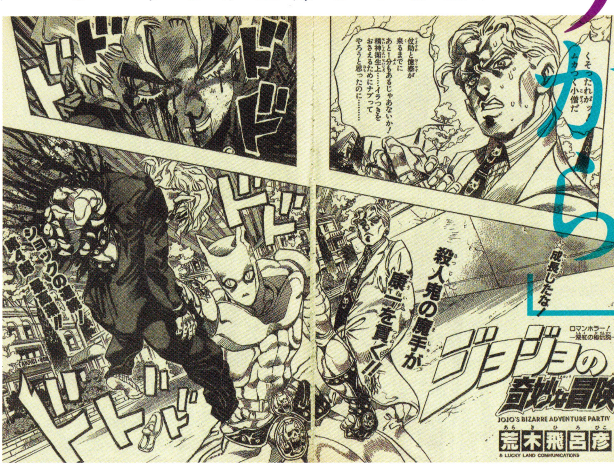
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

—先生の中では、吉良をどういったスタンスの敵にしようと考えていたのでしょうか。

★「第３部のＤＩＯは主人公の動きを遮ろうというタイプ。だから第４部は逆に陰に潜んでいて、見つかったら攻撃してくるというラスボスにしたい」というのは言っていました。それと殺人鬼のアイデアが出た当初は「いろんなところに爆弾が仕掛けてある」「主人公はそれを避けながら敵を追いつめなきゃいけない」という話でしたね。

—サスペンスを描きやすい設定ですね。

★吉良のシアーハートアタックのエピソードでは仗助たちが吉良と接触するという展開なんですが、最初は康一くんがシアーハートアタックの動きを封じただけで終わる予定だったんです。展開の途中で先生から「仗助たちと吉良が出会っちゃうのどう?」というアイデアが出たんですが、そこは編集者の立場から言うとラスボスと出



★左側にはたしかに「最高潮（クライマックス）!!」のアオリが。最終回目前にも思えたが、実際の連載はこののちも約1年半続いた。

会ったら普通は最終対決になるわけで、「あれ？ 第4部はこれで終わるの？」という心配はありました。だから当時の漫画の扉に、「第4部 最高潮(クライマックス)!!」ってアオリ文句を書いた記憶があるんですよね（笑）。吉良と出会ったあとの展開も、先生は「吉良は顔を変えて逃げ切るから」ということで、先生の中でストーリーのダイナミズムは作ってありました。そういえば先生から「吉良が顔を変えるのって大丈夫？ 読者は混乱しないかな？」という確認はありましたね。たしかにその通りで私も同じ不安はあって、そこは割と賭けではありました。ただ第4部の当時は荒木先生が楽しんで描いている時期でしたから、その勢いで押し切れるんじゃないかという感じもしていたし、実際に大丈夫でした。そのあとの川尻家のエピソードも仗助たちがあまり出てこないというチャレンジをしたんですが、読者の票も悪くはなかったと思いますよ。先生的には多分、奥さんや早人のキャラクターが広がってしまったんでしょうね。

——吉良が登場して以降、第4部は大きく流れが変わりましたね。

楽しんで描いている

★吉良を描くにつれて先生は「吉良の能力をバージョンアップさせたい」とは言っていました。吉良は爆弾能力なので「だとしたら酸素だろう」というところは打ち合わせで決めて、そこで出来たのが猫草(ストレイ・キャット)ですね。それと先生は「吉良っていうキャラクターに仲間がいない」ということも気になっていたみたいですね。可哀相とかではなく、物語の展開として「主人公が吉良に辿り着く前に、DIOにおけるエジプト9栄神のような吉良を守る存在との戦いがほしい」ってことですね。ただ吉良の性格を考えると仲間は作れない。そこは長いこと考え込んでいて、結果として作品では吉良の父親が勝手に仲間を増やしているという展開になったんです。

——吉良の第3の爆弾であるキラークイーン バイツァ・ダストのアイデアも先生の中には当初からあったんでしょうか？

★その辺は関谷が担当の時代なので分かりませんが、時間が繰り返すアイデアそのものの話は私の時代に雑談レベルではしていました。ただ吉良の能力と決めていたわけではなく、スタンド能力のアイデアのひとつだったと記憶しています。「敵を『時間の輪』に閉じこめて、先に進めなくするスタンドの話は出来ないか？」という感じでしたね。ただ「19ページの週刊連

時間フェチ

載で『時間の輪』を表現するのは不可能じゃないか」という理由で保留にしていたんですよ。それが吉良の能力になって成立した点は、荒木先生のストーリー展開の巧みさとアイデアのすごさだと思いましたね。余談ですが私は荒木先生は、「時間フェチ」なところがあるんじゃないかなと思っています。DIOにしても吉良にしても、第5部のディアボロにしても、ラスボスの多くはみんな「時間」ですから。

――キラークイーンはシンプルでありながら存在感も放つデザインのスタンドですが、スタンドのビジュアルについて編集者は何か関わったりしているのでしょうか？

★特にはないですね。キラークイーン以外も含めて、スタンドのデザインは原稿があがるまで私も分からないんです。ネームの時には大きなマルに「スタンド」って描いてあるだけなんですよ（笑）。だから原稿でいちばんに見られる喜びはあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――第4部連載当時の読者の反応はどうだったんでしょうか。

★読者的には日本人の主人公で舞台も日本という身近な設定でもあり、第4部は全体的にアンケートの結果も良かった印象がありますね。

――第4部はスタンド能力の組合せや各キャラクターとの関係性など、色々と先生も工夫していたんじゃないでしょうか？

★いろんなパターンがありましたね。主人公周りの人間関係でいうと、例えば「康一くんが承太郎を尊敬する話にしよう」というテーマの時もあれば、「こんな変な敵を出したいね」という時もあり、あるいは鈴美の時のような「幽霊道路に紛れ込む」というシチュエーションもあれば…、という感じで自由というかフリーダムというか…。当時の先生のインタビューを読むと分かるはずですが「思いついたことを、日記のような感じで描いていきたい」ということでした。当時の先生がやりたかったのがサスペンスで、じゃあどんな種類のサスペンスなのかを毎回探っていくという感じでした。

――第4部には多くのキャラクターが登場します。先生が特に入れ込んでいたキャラクターは誰でしたか？

★重ちーですね。途中で死んでしまうキャラクターなんだけど、先生は最後の最後まで「重ちーを殺すしかないんだけど、殺したくない」と悩んでいました。ただ、そこは吉良との絡みで誰かが死なないと吉良への

★先生が「いちばん好き」だという重ちー。
掲載したものは印刷物ではなく、荒木先生の手書きのセリフも見られる貴重なカラー原画。



重ちーは相当好きだった

「『動機』がいちばん大事なんだ」

怒りが沸きませんから、編集者として冷徹に「殺すべきです」と背中を押しました。重ちーが悲しい死に方をしたあとも、先生は「殺さなきゃよかった」と言ってましたから、重ちーは相当好きだったみたいですね。

――重ちーもそうなんですが、第4部は変わった性格のキャラクターが数多く登場するという印象があります。

★宇宙人かどうかも分からない支倉未起隆というキャラクターもいましたね。あれはファミレスのジョナサンでの打ち合わせの前の雑談で宇宙人の話になって、そこから3週間くらいにわたって「宇宙人はいるのか、いないのか」で熱く議論してたところから拾っていると思います。先生的には「宇宙人はいる。でも人間と同じ形をしている」という意見でした。先生曰く「人間のフォルムは自然界において完璧だから、宇宙においても知的生命体はこの形にならざるを得ない」という主張でしたが、私は私で「形は環境によって変わるのでは?」といった話をしたり。どうでもいい細かいことも含めて本当にいろんな宇宙人議論をしていましたから、そこから拾えるネタを集めた形かもしれません。それで宇宙人のキャラが出て、劇中でも宇宙人なのか変人なのか答えは出さないままっていう感じでしたから、私の中で第4部は「変な人がいっぱい出てくる漫画」という認識もありました(笑)。

――バラエティに富んだキャラクター陣ですよね。

★ただ、先生が言っていたのは「変わった人たちがそれぞれの立場で出会った時、それぞれの立場を守るために戦わなくちゃいけなくなる。それが戦いの『動機』で、この『動機』がいちばん大事なんだ」というようなことは言っていました。敵とか味方とか善悪ではなく、「どうしてもこいつとは戦わなくちゃいけない」「許せないものがある」とか、そういうことだと思いますね。その点でいうと仗助と露伴って仲が悪い設定ですが、先生の中ではハイウェイ・スターとの戦いのあとで仲直りする予定だったんです。そのためにずっとハイウェイ・スターのエピソードを描いていたのにネームを見たら仲直りしてなくて、「あれっ?いいんですか?」って聞いたら「こいつら無理だったよ。仲直りはできないですよー」って(笑)。そうい

うところで意表を突く作家さんでもありますね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――第4部の担当時、先生について何か憶えている印象的なエピソードはありますか?

★担当を引き継いだ時、私への最初の質問が「近所の小さなレンタルビデオ屋の映画、全部観ちゃったんだけど。何かいい映画ありますか?」って。それって私からすると、編集者として引き出せるものの有無を試されていることになるわけで、そこは内心「来た来た!」というのはありました。作家さんを引き継ぐ時の、作家さんの「オーラ」に「負けちゃいけない」という心構えはできていたつもりでしたが、結構ドキドキした瞬間ですね。そこでちょっとズルいのですが、先生が興味なくて観ていなさそうなコメディ映画の中から『裸の銃（ガン）を持つ男』という映画を挙げたところ、「観ていない」というので切り抜けたわけですが、翌週の打ち合わせで「あの映画、観たよ」と。そこからその映画についての分析が始まったんですが編集としてはそこで食いついていかないと駄目なわけで、あそこで荒木先生の担当としての私の覚悟が固まった印象はありますね。

――編集者から見て、荒木先生はどんな作家だと感じましたか?

★自身に課している要求レベルは高かったですね。そこは常に「自分はWJの『本流』の作家じゃない」「だから人一倍、上を目指さないと駄目なんだ」ということを言ってました。だから打ち合わせをして今週の展開もまとまった、と私が思った瞬間に先生が「これじゃレベルに達していないな」とやり直すことも多かったですね。普通の作品ならOKなレベルのプロットではあったと思うんですが。荒木先生の持論ですが、「ベストセラーの理論」というのがあって、それは例えば「あるアーティストのアルバムで最良の作品はどれか」というと、いちばん売れたアルバムのひとつ前のアルバムだと。なぜかといえば「そのアルバムが良かったから次のアルバムがいちばん売れたんだ」という論理なんです。だから「自分も手を抜いたら来週は良かったとしても再来週くらいには落ちてしまう。いいものを出し続けていくには、ずっと高いレベルでやっていかないといけないんだ」と言っていました。そんな感じで荒木先生は『ジョジョ』という作品を常に「もうひとつ上に行かなきゃいけないんだ」という意識で描いていると思います。

「人一倍、上を目指さないと」

1992年～2003年



第5部
黄金の風

PROFILE

★せきや・ひろし
1993年に入社。「週刊少年ジャンプ」編集部を経てライツ事業部海外出版課　副課長（2013年9月現在）。好きなスタンドとその理由は「猫草（ストレイ・キャット）。猫好きだし（でも猫アレルギー）、ちょうど最初に関わったスタンド使いだから」。

★添JO員
関谷博

——関谷さんの担当パートは、どこからでしょうか。

★第4部で猫草（ストレイ・キャット）が出た頃から最終回まで、第5部を立ち上げるくらいまでの時期。期間的にいうと1年くらいですね。僕が入社して2年目くらいのはずです。

——第4部は、当時の「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）読者の反応はどうでしたか？

★前任の垣内が担当していたパートの最後あたり、吉良が顔を変えて逃げ切るところでは、もう第4部クライマックスか!?　と読者も盛り上がっていたと思います。ただ、僕が引き継いだ時は仗助も承太郎も出ない時期でしたから読者の反応が薄くなっていました。もちろんコアな『ジョジョ』ファンはたくさんいたんですが、人気アンケートとかいちばん分かりやすい読者の反応としては、表れにくかった部分もあります。『ジョジョ』に限らず長期連載作品はどれも似た傾向になると思いますよ。荒木先生がさほど気にしなくても、それでもやはり担当編集としては読者の反応は気にする部分ですから、それとなく人気キャラの承太郎を出してほしい話を先生にふっても「承太郎は時間を止めるから誰も勝てないんだよね。ズルいよねー」と却下されたり（笑）。そうこうしているうちにも吉良と仗



日常の中の恐怖

助が空気弾で戦うエピソードあたりから盛り上がってきて、結果的にいい形で第4部を完結できました。やはり主人公とラスボスの対決は読者がいちばん期待するところです。

――吉良の父親が携帯電話で空気弾を誘導するというアイデアが秀逸でした。

★あれは潜水艦の魚雷がモチーフのようですね。僕も調べてみたんですが魚雷には自動追跡するタイプや、ソナーを頼りに潜水艦が誘導するタイプなどがあって、その構図をスタンド戦に持ちこんだようです。吉良の最期に関しては先生は「第3部みたいに主人公が敵をボコボコにするっていう最期もあるけど、吉良はこういう死に方で良いんだよ」ということは言っていました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――第4部は後半で川尻早人の活躍も目立ちましたね。

★あれは先生の中では、当初は康一の役割のはずだったんですよ。もともと第4部は康一の成長物語にもする予定で、だから康一のエコーズもACT1、ACT2と成長する設定にしていたんです。吉良という殺人鬼が日常に溶け込んでいるという「日常の中の恐怖」に仗助が挑むという流れの横で、康一がスタンド使いとしても人間としても成長していく流れも敷く予定でした。だから大抵のエピソードに康一も絡んでいる展開になっていたんですが、吉良の身近に早人というキャラクターを置いたら、いちばん近くの早人が吉良の正体を暴いていくという流れに変わっていったんです。そんな感じで途中から早人目線になってしまったので、それもあって第5部の冒頭で康一を出したのではないでしょうか。

――キラークイーンの第3の爆弾であるバイツァ・ダストは、時間を吹き飛ばすというスタンド能力でしたね。

★バイツァ・ダストはかなり先生も悩んでいましたね。第1、第2の爆弾はあったけど、それだけではラスボスとしてキツいというのも分かっていて第3の爆弾をどんな能力にしようか、というのはかなり難産でした。「パワーアップするなら時間に絡めるしかない」とい

うのはもともと先生の考えの中にあったようですが、時間を吹き飛ばして巻き戻るにしても、その約束事には悩みました。スタンドって基本的に「これをしたら、こうなる」という約束事なんですよ。その辺の約束事を、吉良が風呂場で早人を殺す週の前後あたりから3週間くらい、ずっと一緒に考えていましたね。その頃はチェック用のネームのやりとりの電話も普段ならすぐ終わっていたのに、先生の「うーん…これだとちょっとさぁ…」という発言が多かった記憶があります。そこからもう一度打ち合わせが始まって、展開がうまくまとまらずにお互いにイライラしながら話していたこともありましたね。その時は電話で3時間くらいやりとりしていたかな？　バイツァ・ダストの使い方は先生もかなり苦悩した部分で、そういった点も含めて先生はかなりしんどかったようです。これは言っちゃっていいか分からないんですけどちょうどその頃、「『ジョジョ』はもう第4部で終わりにしようか？」といった旨の発言もありました。ただ、第4部のラストに向かうにつれて「第5部もやろうか」という話が先生からも出てくるようになってきたので、こっちも「絶対やりましょうよ！」と。それだけ毎週、スタンドのアイデアや読者を驚かすような展開を考えるのは大変だ



★時間を吹き飛ばすバイツァ・ダストの能力。「本当は週刊連載でやるアイデアじゃないかも。でも挑戦したかったんですよ」と荒木先生。

だとちょっとさぁ…」

ということですね。

——第5部はシリーズの中でも独立した展開になっていますが、先生のそういった心の動きもあるんでしょうか？

★あったのではないでしょうか。第3部、第4部とスタンドバトルをやって、しかもお休みもなく長く続けていたので『ジョジョ』のシリーズを終えるかどうかは別にして、「第4部でちょっと一区切りつけたい」という気持ちになってもいたんだと思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——第5部の構想は、どういった流れで形作られていったか分かりますか？

★イタリアを舞台にしたい、というのは最初から話がありました。ただ、主人公はどんな形であれジョースター家の血を引いていないといけなかったので、そこは先生も迷ってましたね。「ジョセフにまた浮気させるか」みたいなアイデア（冗談？）もちょっと出たんですが、先生も僕もお互いに「それはないよね」という結論で（笑）。

ギャグも好き

——それで視点を変えてDIOの子供という形に？

★DIOの肉体はジョナサンなのでジョースター家の血筋になりますから。初期の打ち合わせでは吸血鬼DIOの子供でもあるので「日差しは苦手にしようか？」「太陽の光を浴びるとチクチクするとか」なんて話もありましたね。先生はギャグも好きなので、そういう類の設定も意外とありますよ。それともうひとつ、先生からは「主人公を女性にしたい」という話がありました。

——第5部ですよね？　第6部の徐倫ではなく、ジョルノが女性？

★ジョルノっていう名前もまだ全然決まっていなかった時期なんですが。今だったら違いますが、少年誌の漫画で女性を主人公にするのは、辛いのではないかという印象が僕にはありました。当時のWJはまだ女性主人公という時代ではなかったんですね。そこは先生とも打ち合わせで色々話していく中で最終的には主人公は女性にはならなかったんですが、ジョルノのスタンドは「生命を生み出す」という能力ですよね。生命（子供）を産めるのは女性だけですから、そこは「女性が主人公」という案の名残なのかなと思います。

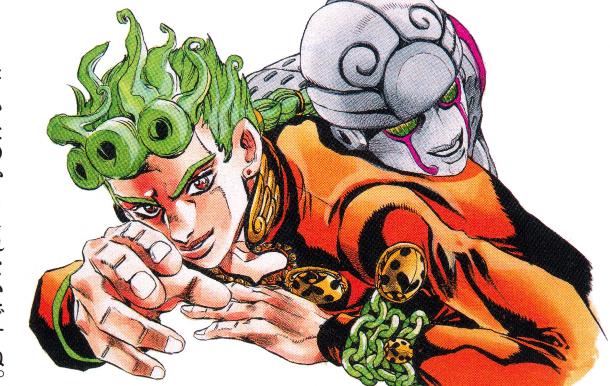
——ジョルノは華奢で中性的なキャラクターですが、初期案で女性だったことも関係しているのかもしれま

「これ

せんね。
★ジョルノの本名も「汐華初流乃（しおばなはるの）」という女性的な名前でしょ？　もしかしたら「実は女性でした」という展開も考えていたのかもしれないですね。…そういえば「男みたいに見える女とかはどうかな？　ダメかな？」とか、そんなギャグみたいなアイデアも先生は言ってましたね（笑）。

――先生は割とお茶目なところもありますね（笑）。

★そうですね。先生は2003年にパリで個展を開かれたんですが、そこにお邪魔した時も内心は「ありがとう！」だったらしいんですが、先生は「なんだ、来たの？」くらいに素っ気ない感じで、意外とそういうところは恥ずかしがり屋というかツンデレというか（笑）。あと、あまり過去に執着しなかったりしますね。スーパーフライという鉄塔のスタンドとの戦いで仗助が鉄塔から落ちそうになった時も「クレイジー・ダイヤモンドの能力で鉄塔に戻れないかなぁ？」と自分から言い出して。「いや先生、スタンドは自分には効果がないのがルールでは…」「そこをさぁ…」みたいなやりとりがあったり、そのうちに「仗助の気合いでなんとかなるんじゃないかな」ということを言い出したり（笑）。割と思ったこと、感じたことをスッと口に出して言うところがありますね。普通であればオブラートに包んだりするようなことも感覚的にスッと話す。それが悪いことではなくて良い方向に出ている部分が多いから作品的にも面白いんだと思います。ある部分には固執しないところもあって、担当になった時も先生から「『ジョジョ』は長いからさ、読むのは第3部からで十分だよ」という声をかけてもらったり。いや、もちろん担当するに当たって第1巻から読み直してはいたのですが。わずか1年という期間ですが、かなり印象に残る担当作品でした。



★もしジョルノが女性キャラクターとして描かれていたら、第5部はストーリー展開も全く違ったものになっていたかもしれない。

感覚的にスッと話す

ずっと見た目も若いまま日々新しい

――それだけ密度が濃かったということですね。

★ネームのチェックも濃かったですね。毎週の連載は基本的に19ページなんですが、ネームはたいてい20～21ページで上がってくるんです。1～2ページ分を削らなければいけなくて、先生と電話でどこをどうすれば19ページに収まるかの打ち合わせを毎週やっていました。これは先生自身が言っていたことなんですが、「自分のリズムが21ページ」なんだそうです。「気持ちよくネームを割って、これでOKだ！　って思って数えるとだいたい21ページ」だと。たまにネームが19ページであがる時もあったんですが、そういう時はちょっと間延びしている印象もあったかもしれません。やはり21ページでネームを割って要らない部分をカットして、見せるところはしっかり見せて凝縮していくことで連載1本分のメリハリがつくのだろう、と思っています。

――第4部を中心に担当されていたわけですが、印象深い先生の言葉などありましたか？

★僕は1年くらいで担当を離れることになったんですが、次の担当に替わりますって時に先生から「もう替わっちゃうの？　短くない？　なんかそんな気もしてたんだよな～」というお話はありました。前任の佐々木も垣内も1年くらいだったはずで、私もそうですが、先生としては担当との関係がやっと築けた頃にまた交替というのが辛かったのだと思います。僕自身も荒木先生の担当になって成長させてもらった部分がめちゃめちゃ大きい。先生のほうが僕より10歳ほど年上なんですが、年齢は離れていても対等という感じでやらせていただけました。今でもそうですが先生の感覚は非常に若くて、もしかして自分より年下なんじゃないかと錯覚する時もあるくらい。少年というか青年というか、その年代の感覚のままで物事を考えて描いているという感じがします。だからずっと見た目も若いままだし（笑）、作品が時代に対応できるんだと思いますね。50代という先生の実際の年齢で物事を考えていたら『ジョジョリオン』のような作品は面白く描けないでしょうし、そういった意味で荒木先生も『ジョジョ』も常に進化していて、日々新しい。だから『ジョジョ』は良いんじゃないのかなと思います。先生の気持ちが続く限り、『ジョジョ』というタイトルなのかどうか分からないけど新しいものが生まれていく。そんな気がしています。

1992年〜2003年

★添JO員

東 秀人

——第5部から担当されていますが、先生からテーマ的なことを聞いたことはありますか？

★「第5部は集団劇をやりたい」という話は聞いていました。「主人公はジョルノではあるけれど、チームの誰もが主人公でもあるという形にしたい」ということも言っていましたね。第5部に限らず主要キャラが何人も死ぬ展開が多いですが、そこは先生の中で「リアルな世界で描きたい」「誰も死なないなんて有り得ない」といった気持ちがあったんだろうと思います。人気を取るために誰かを死なせて盛り上げるといったいやらしい発想ではなくて、ギリギリの命がけの戦い



第6部

ストーンオーシャン

PROFILE

★あずま・ひでと
1990年に入社。「週刊少年ジャンプ」編集部を経てコンテンツ事業部　コンテンツ事業課　課長（2013年9月現在）。好きなスタンドとその理由は「セックス・ピストルズ。本体のミスタと仲良くて、楽しそうだから。一緒に戦っている、という感じが良い」。



「第5部は集団劇をやりたい」

をやっているんだから誰かが死ぬのは先生の中では必然だったんでしょうね。

——第5部の「黄金の風」、第6部の「ストーンオーシャン」といった各部のサブタイトルは東さんの担当時代に付けられたものですね。

★それは次の第6部のスタートと関係しています。『ジョジョ』は長期連載で「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）の看板作品だし、雑誌としても必要ということで第5部が終わっても連載は続けていただきたい、というのが編集部の考えだったんですが、一方で連載が長すぎて新規読者が入りづらいという問題点もあったんです。そこで第5部の完結が見えた段階で、編集部から「主人公の名前はジョジョでいいが、『ジョジョの奇妙な冒険』というタイトルは変えられないか」という相談をしています。タイトルを新しくすることで新連載という体裁をとり、今まで読むことを敬遠していた若い読者を取り込んでいこうという考えからですね。第4部とか第5部というと、どうしても今まで読んでいなかった人にはハードルが高いと思われていたみたいなので。ただ、荒木先生としては「どこまで行っても『ジョジョ』なんだから、そういう小手先の対応はどうなの？」というお考えで、たしかにそれももっともなんで、それで「ストーンオーシャン」というサブタイトルを考えてもらって、『ジョジョの奇妙な冒険』と並べて入れましょうという形に落ち着いたんです。だから第6部の最初



★ディアボロのキング・クリムゾンに倒されたアバッキオ。いきなりの死に驚愕した読者も多かったのではないだろうか。

「どこまで行っても『ジョジョ』」

の頃の連載扉では「ストーンオーシャン」というタイトルも結構大きく出ているはずですよ。で、タイトルをそうしようと決まった頃に先生から「はい」と紙を渡されて「そしたら第1部から第5部のタイトルもいるよね？　考えたから」って（笑）。だから各部のサブタイトルは第6部がきっかけになってますね。それと第6部の時にもうひとつ編集部からお願いしたことがあって、それは「十分な準備期間を用意するので、新作としてゼロからスタートしてほしい」というものでした。これも新規読者の開拓を狙ってのことで、だから第6部の連載開始は第5部終了から半年後でしたし、「ストーンオーシャン」を読むと分かるんですけど「スタンドとは何か」といった基礎的なところから丁寧に説明しつつ展開しているんですよ。



★第6部の連載スタートとなった2000年第1号の週刊少年ジャンプ。タイトルは『ジョジョ』と「ストーンオーシャン」が並列で記されている。

――「ストーンオーシャン」では取材旅行にも行かれたんですよね。

★第6部スタート前の準備期間中だったので1999年の秋頃だったと思います。アメリカのフロリダを中心に一週間くらいだったかな、行ってきました。その時のガイドさんのご家族が偶然にも警察関係の方で、そのつてで刑務所の内部を特別に見せてもらえたりして、すごくレアな体験をさせてもらえました。あれは本当にラッキーでしたね。そういえば刑務所の内部を見ている時、途中で先生の気分が悪くなったりしたこともありました。感受性が豊かな人なので、自分が閉じこめられたら、とか色々考えちゃったのかもしれないですね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――第6部はシリーズ初の女性主人公ですが、このアイデアは先生から？

★そうです。少年漫画誌の編集者として僕は「男の子にしてください」ってお願いしたんだけど3秒で却下されました（笑）。WJでは女性が主人公だと受けないというのがあったので男性にしてもらいたかったたん

2回できないタイプ

「だからやるんだ」

だけど、先生は「だからやるんだ」と（笑）。ただ、思えばその時の人気だけで考えたら僕は今でも男性主人公が良かったという意見ですが（笑）、『ジョジョ』の長い歴史を考えると第6部を女性主人公にしたことはトータルとして圧倒的に良かったと思います。というのも荒木先生は多分、同じことを2回できないタイプだと思うんですよ。常に挑戦していくタイプの作家さんなので、「人気を取るために男性主人公にしたら作品を描くモチベーションは保てないだろう」というのが本能的に分かっていたのかもしれませんね。当時は映画でも「強い女主人公」というのがけっこう出てきていましたし、そろそろ挑戦しても良いんじゃないか？　みたいなことも考えられて敢えて女性主人公にしたのかもしれません。普通に人気を取ることだけを考えるのなら第3部の承太郎のミニチュアみたいな主人公にして、亜流をやっていればいいわけですから。でもそういうことはしたくないし、常に戦い続けないといけないタイプの作家さんなんでしょうね。

——編集者から見て、当時の荒木先生はどんな作家に見えましたか？

★キャラクターもストーリーも自分の中でしっかり組み立てるタイプで、締切も完璧に守るという非常に仕事がやりやすい作家さんでしたし、編集部の中でもそういう評価が高い人でした。なので僕が担当に選ばれたのも漫画編集者の適性というよりは、趣味的な部分で先生と話が合うんじゃないかと上の人が考えたからじゃないですかね。僕も音楽好き、映画好きですし、先生の聴いている音楽もだいたい分かりますから。先生に気持ちよく仕事をしていただければ、という編集部の考えがあったんだと思います。実際、2年半担当させていただいて、僕の出したアイデアって、5個くらいしか採用されていませんよ（笑）。

同じことを

——先生は、どんな人柄でしょうか。

★非常にきっちりした人ですね。プロ意識が高くて、常に仕事最優先で全力投球。最高のレベルで仕事ができるように環境作りも含めてきっちりとされています。同時にオンとオフの分け方もきっちりしていて、休む時は全力で休みます（笑）。僕が担当している時は合併号の休みが年3回、年末年始とGWとお盆にあるんですが、毎回イタリアに旅行されていた印象ですね。プライヴェートと仕事をきっちり分けるタイプで、当時は主に漫画業界以外の方と遊んでいた感じですかね。なので、荒木先生がWJの新年会に出席される時なん

休む時は全力で休みます

かは大変でしたよ。WJの作家さんにも荒木先生ファンはいっぱいいたので、囲まれちゃって。連載作家さんでも荒木先生に会える機会は滅多になかったので、「今年は荒木先生が新年会に来るらしい！」みたいな感じになって。途中で帰ろうとする荒木先生を、まだ話せていない作家さんがいるから引き留めてくれ、って副編集長に頼まれたのを憶えています（笑）。

――割とご自分の中でこうするっていう、ルールとか決めるタイプですか？

★そうですね。ルールというか、決めごとというか、ご自分で決めて、それをきっちり守る方でしたね。仕事に向き合う上での決めごともいっぱいあったと思いますが、生活全般にも色々ありましたよ。当時のもので印象深かったのは、「新宿以外には行かない」っていう決めごとでしたね。これは、買い物とかたいていのことは新宿の伊勢丹界隈でまかなえるので、基本新宿以外には出かけたくない、それ以外の街とかには行かないことにしている、というものだったんですが、当時先生は毎週金曜日は映画館に行く日と決めていたんですね。ところが観たい映画が例えば渋谷の単館ロードショーだったりすると、「観たい！　でも渋谷だから行けない」って、ものすごく、本当に真剣に悩む（笑）。他人からすれば行けばいいじゃないですか、ということかもしれないけど、決めちゃった以上は基本的に曲げない人でした。ひとつをないがしろにすると他の部分も崩れていくというのが無意識にあったのかもしれないですね。「常に最高の作品を作る」とか「締切は絶対に守る」とか、本人は当たり前のことと考えていると思うんですが、常に自分を律する心があって、それがそういう自分ルールみたいな決めごとに繋がっていたんじゃないかと思います。とはいえ、WJの新年会の場所が銀座とか青山だったりすると、真剣に悩んでいたのはおかしかったですね（笑）。「イタリアより近いじゃないですか？」って言ったら、「銀座はイタリアより遠いよ！」って返された時は絶句しました（笑）。もちろん時代や年齢に応じてルール改正もしていると思うんで、今は大丈夫だと思いますが…。

「銀座はイタリアより遠いよ！」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――東さんが担当していた頃に先生の2冊目の画集「JOJO A-GO!GO!」が発売されています。

★第1部から数えて10年近くが経っていて、初期からのコアなファンの年齢層が20歳オーバーと高かったのは分かっていたので、『ジョジョ』に関しては値段は高くてもちゃんとしたものを作れば受け入れてもらえるはずだという意識がありました。逆に言うと、高くてもいいからちゃんとしたものを作らないと見向きもされないとも思っていました。当時のWJでは値段が高くなる画集でも1800円くらいが上限、子供が買える値段じゃないとダメという常識があったんですが、敢えて定価6800円という豪華ボックスの「JOJO A-GO!GO!」を企画しました。当然、上司にも企画書を回していますが、上を説得するのに苦労をしたかというとそんなこともなく「まぁ、そうだよね」という感じで。つまり僕だけじゃなく編集部の上も同じ認識だったんですよね。まぁ、美術書みたいな本を作りたいっていう僕の個人的な願望もあって、それは『ジョジョ』じゃないと出来ないだろー、って思ってたんですけど（笑）。

――「JOJO A-GO!GO!」の当時からアート性のある作家さんだと認識されていた？

★それはある程度は感じてましたけど、まさか今のようにGUCCIとコラボしたり、美術館で展覧会やって、「美術手帖」に特集されたりとか、そこまではさすがに想像すら出来なかったです。すいません（笑）。まあ当時はWJという超メジャーなところで独自の世界をひとりで歩む孤高の漫画家というイメージでしたね。熱狂的なファンがいて、作家陣の中でも独特の地位を築いていて、メインストリームとは別の意味での看板作家という感じでした。作家としてある種のキャラも立っていたので圧倒的な存在感はありましたし、それだけにさっきも触れましたが若い新人作家の中には荒木先生を「神様」と言う人も多かったですね。

――当時の打ち合わせは、どんなスタイルだったんでしょうか。

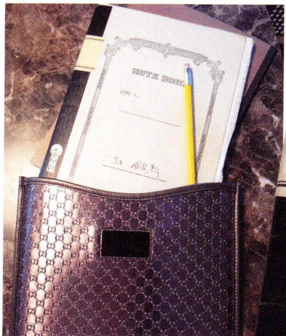
★昔も今も変わっていないと思いますが、まず雑談でした。映画の話とか、社会で話題になっている事件があれば犯人がどういう人物なのかを話したりとか。それがひと通り終わって、そろそろ打ち合わせしましょうかという流れになる感じです。先生がおもむろにスケッチブックを開いて先週までの流れのメモを入れて、そこから漫画の打ち合わせという感じでした。それと実はこの打ち合わせ用のスケッチブックの他にノートが1冊あって、先生は時々ノートを「ん〜…」って考えながらチラチラッと見ることもありましたね。それこそポーカーで、自分のカードをコソ〜ッとこうやって見る感じ？（笑）多分、あのノートには先生が事前

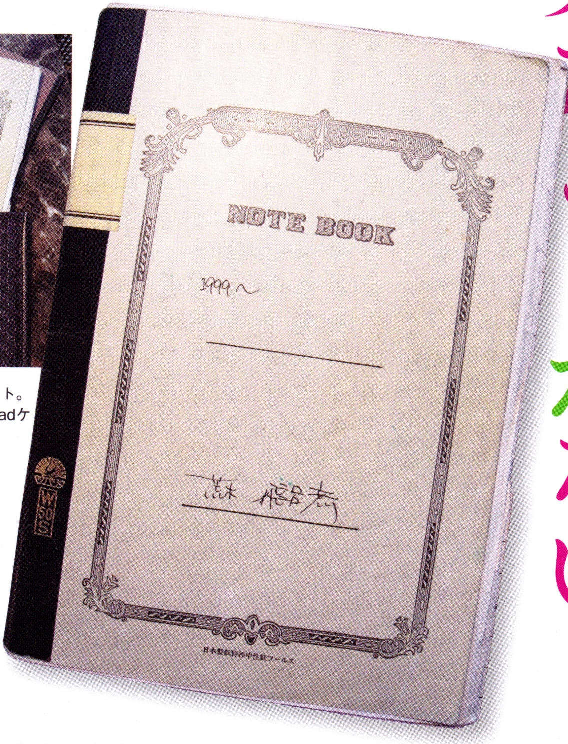
その中身は見たことがない

に自分で考えた様々な展開案やネタが書いてあるはずです。僕もその中身は見たことがないんですが。

——そのノートは気になりますね（笑）。

★で、打ち合わせの始めに、今週のテーマを決めるんですね。例えば、「今週は敵のすごさを見せる回だ」とか。大枠のテーマを決めて、そこから具体的にどんなアイデアがあるのかを一緒に考えるんです。例えば「敵のすごさを見せるために、ブチャラティが攻撃される。では具体的にどんな攻撃なんだ?」みたいに。まあ実際は僕が色々と愚にもつかないことを言って、「それは違うだろー」とか、「ありきたりじゃない?」みたいなことを言われて、そのうちに先生のアイデアが固まってくる、っていうパターンでしたけど。荒木先生の漫画のセオリーとして、「毎週1話につきひとつのアイデアを入れればいい」というのがあって、欲張ってふたつもみっつもアイデアを入れるとページが足りないし、収拾がつかなくなる。なので、「今週のネタをひとつ考えよう」、という作業でしたね。他にも色々教えていただきましたね。例えば、「少年漫画の主人公は悩んじゃダメだ」というのもありました。





★1999年から使っているノート。先生はGUCCIから贈られたiPadケースに入れて持ち歩いている。

主人公が悩んでいいのは「強い敵をどうやって倒すか」という時だけ

これは主人公が戦うにあたって、「どうして僕が戦わなきゃいけないの?」とか、うじうじ考えさせたら絶対ダメ。主人公が悩んでいいのは「強い敵をどうやって倒すか」という時だけだ、っていうルールなんですが、シンプルなんですけど荒木先生に言われると非常に説得力があって、若い漫画家さんの打ち合わせの時とかに役立たせてもらいましたね。

——「敵をどう倒すか」に集中するのは少年漫画の王道ですね。

★荒木作品は完全に王道なんですよ。もともとの根っこはそこでぶれていないんですが他の作家さんとは違ったセンスを持っているから、ああいう作風になるんです。

——でも、そこが『ジョジョ』の大きな魅力だと感じます。

★そうですね。よく「文は人なり」って言って、その人の書く文章には人柄が出てくる、みたいに言われますが、荒木先生を見ていると、「漫画は人なり」って思いますね。正直『ジョジョ』の登場人物っていうのは、荒木先生自身ですからね。『ジョジョ』の主人公たちもこの世に生を受けて、己の為すところを為す、という感じですが、荒木先生も漫画家として為すべきところを為す、という感じで、傍から見るとストイックなまでに作品に身を捧げているのは、すごいなと思いますね。まあ先生に言うと、そんなの当たり前でしょ? って怒られそうですけど…(笑)。

漫画家として為すべきところを為す

1992年〜2003年



第6部
ストーンオーシャン

PROFILE

★しま・ともゆき
1990年に入社。「週刊少年ジャンプ」「Vジャンプ」「ジャンプSQ.」編集部を経て「週刊ヤングジャンプ」編集長（2013年9月現在）。好きなスタンドとその理由は「ボヘミアン・ラプソディー。担当時、かつてなく肝を冷やしました」。

★添JO員
嶋 智之

この佇まいは「露伴」

――担当されたのはどこからどこまでですか?

★第6部の途中、単行本でいうと第70巻のウエストウッドのあたりからです。第7部は先生と一緒にアメリカに取材旅行に行って第1話を入稿した頃だと思いますので、期間的には3年間くらいですね。

――取材に行かれたのはいつ頃?

★2003年7月頃ですね。舞台を北米にすることは先生の中で決まっていたので、カリフォルニア州のロサンゼルスからサンディエゴ、アリゾナ州のグランドキャニオンなどを一週間くらいで回ってきました。そういえばその旅の道中でのエピソードなんですけど、グランドキャニオンで先生が服が汚れるのも構わず地面に這うようにして植物を撮っていたんですね。ちょっと感動して「僕も撮りましょうか?」と話しかけたら一瞥もくれずに「撮りたきゃあ、勝手に撮れ



人間の限界点

「最新型神父ですよ」

ば」と。この佇まいは「露伴」かと思いゾクゾクしましたね。

――コミックス第18巻のコメントにも「お母さんに怒られた」と書いていますね（笑）。

★もうひとつ僕は高所が苦手でグランドキャニオンでは実際生きた心地がしなかったのですが、先生はあえてギリギリの崖っぷちまで行って「全然怖くないよ、こっち来たら?」とニコニコしながら手招きするという…そんなチャーミングなところもあったりしますね。先生の取材スタイルなんですが、とにかく行く場所行く場所で徹底的に風景なら360度全部、建物ならドアから壁紙・調度品に至るまで触れるもの全てを撮影していく感じでした。ですから一ヵ所の滞在時間も相当なものでした。食事も「アメリカには好きな食いもんないからさぁ、バーガーキングでいいんだよね」とあくまで取材優先でしたね。

――第6部の途中から担当とのことですが、作品のテーマ的なことはお話をされましたか?

★先生から直接お話をいただくことはありませんでしたが、打ち合わせを重ねる中で「人間の限界点」を突き詰めたのが第6部なのかなと考えています。ラストに向けての徐倫たちとプッチ神父の戦いも肉体と精神両方を極めたバトルじゃないですか。「限界を超えて強くなっていく」というのが1990年代のWJの王道だとすれば、それを先生の解釈で描いたのが第6部ではないかと。言い方を変えると「運命を乗り越える」という『ジョジョ』ルールの最大進化形ですね。そんな印象を持っていましたので「ここが集大成なのかな。もしかしたら、ここで『ジョジョ』は区切りがつくのかな」とも考えた時期もありましたね。荒木先生担当なら誰もが思うことですが、WJ連載陣の中でも屈指のハイテンションを維持しているのが『ジョジョ』という作品ですので何とか未読の読者にも伝えたくて毎号のアオリにも気合を入れました。

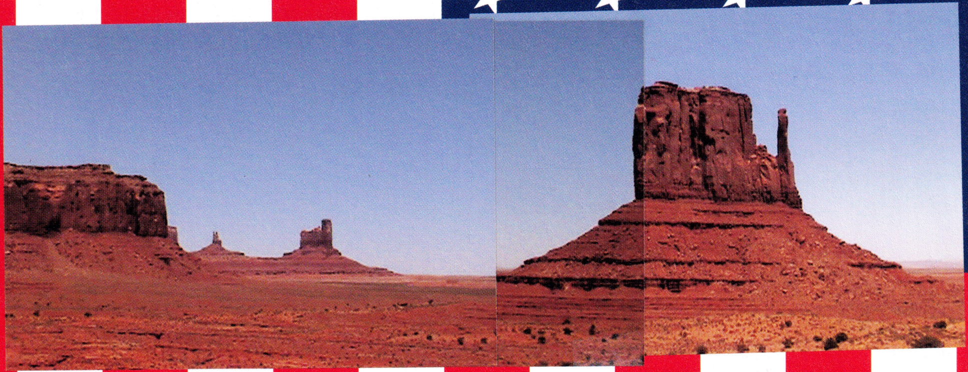
――連載当時、アオリの疾走感がファンの間で話題になっていました。「ザ・ニュー神父」や「NO断念!!」などのアオリは今もファンに語り継がれています。

★たしか先生から原稿をいただいて「神父、かなり雰囲気変わりましたね」と話しましたら、「最新型神父ですよ」と。憶えてらっしゃらないと思いますが（笑）。



荒木飛呂彦 in U.S.A.

『スティール・ボール・ラン』の取材旅行は2003年7月1日～7月11日にかけて行われた。主にカリフォルニア州のサンディエゴ（スティール・ボール・ランレースの出発点）やデスバレー、アリゾナ州のツーソンやグランドキャニオンといった場所を取材している。



横長写真はグランドキャニオンの近くにあるモニュメントバレーで、インタビューにある「360度撮影」の一例。こうすることで、その場所の全体像が把握できる。先生はプリントをつなぎ合わせて資料にしていた。下の2点は植物などのディテール参考用として撮影されたもの。（撮影・荒木飛呂彦）





グランドキャニオンは海抜が高く、夏でも意外と涼しいため長袖が必須。デスバレーなどの砂漠地帯にも取材に行き、「死ぬかと思うくらいの暑さ」（荒木先生）を経験している。こういった体験も作品作りには必須だ。





僕が担当時のアオリは割と荒木先生のおっしゃる言葉にインスパイアされていましたので、原稿をチェックする段階でほぼ決まっていました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――ベタな質問ですが、好きなキャラクターは？

★担当当時、徐倫側のキャラクターはみんな思い入れがありましたけど、改めて思い返すとプッチ神父ですね。第6部の主人公はプッチ神父だったのだなぁと思います。ＤＩＯの意志を継いだとはいえ、ここまで純粋に自身の願望を貫く敵役も珍しいのではないでしょうか。あと、何故かプッチ神父の台詞だけは荒木先生ご自身の声で伝わってくるんです。『安っぽい感情で動いてるんじゃあないッ！』など身の引き締まる思いがします。

――プッチ神父のセリフを読めば、先生のダークな一面が見えてくるかもしれませんね。

★先生のお言葉なのですが、「ダークな部分とコミカルな部分に境界線はない」とよくおっしゃってました。恐怖と笑いが相互に転化しあうのも『ジョジョ』の魅力のひとつだと思いますが、第6部では敵側のキャラクターそれぞれに人間的な深さをあまり描く必要がなかった分、スタンドにより娯楽要素が盛り込んであって、担当という立場抜きで毎回楽しんでいました。

――第7部『スティール・ボール・ラン』はＷＪでの連載スタイルも毎号30ページ前後を10週前後掲載し、先生が描きためてから再び掲載という変則的なスタイルでしたね。

★あのスタイルになったのは先生から「毎週の連載もできないことはないけど、やっぱまずいと思うんだよね」というお話を頂いたからです。将来を見据えて「ここで色々と削ったらまずいんじゃないか」という気持ちを持たれたんじゃないでしょうか。

――タイトルも『ジョジョの奇妙な冒険』が外れて『スティール・ボール・ラン』のみとなっています。

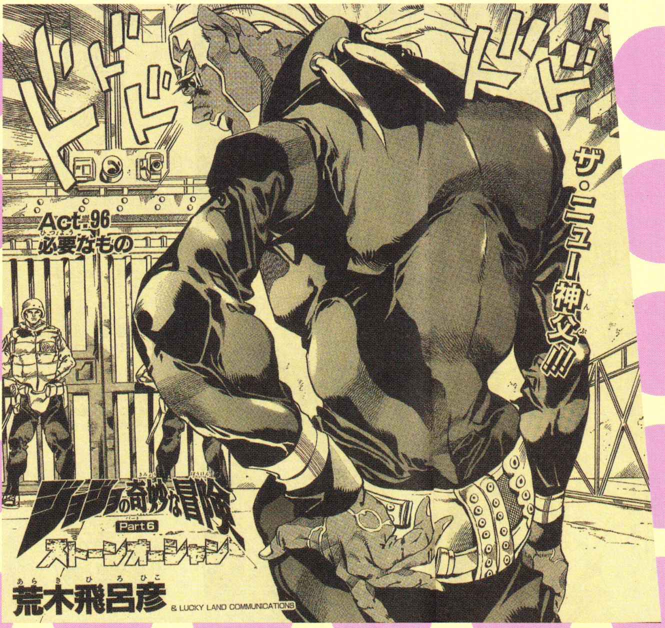
★タイトルの件は、第6部開始時と同じく編集部からの要望だったはずです。『ジョジョ』ではない新しい作品を作ってほしいという意図があってのことでした。

――第7部はそれまでの『ジョジョ』のパラレルワールド的な世界なんですが、これについて先生の考えは？

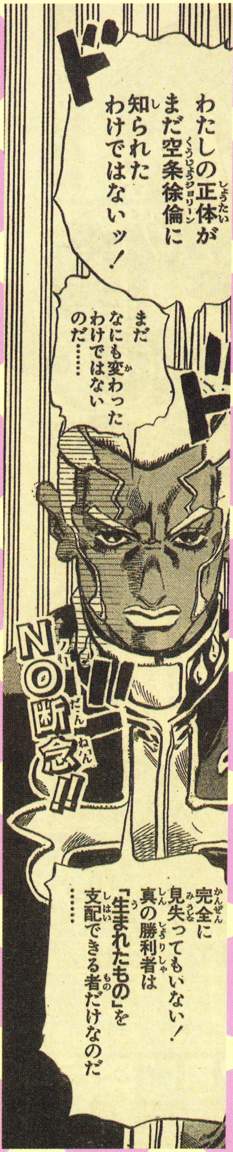
「ダークな部分とコミカルな部分に境界線はない」

第6部「ストーンオーシャン」アオリ集

★ここでは連載当時の誌面から、いくつかのアオリを抜粋して掲載する。



荒木先生の言葉にヒントを得た「ザ・ニュー神父!!!」は週刊少年ジャンプ2002年第1号掲載。

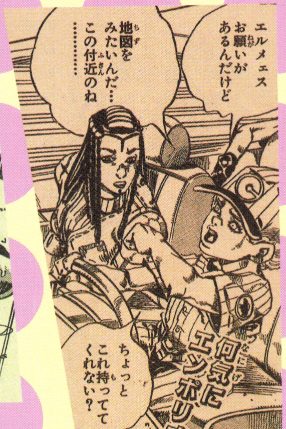


「NO断念!!」は週刊少年ジャンプ2001年第48号に掲載。



そして「引力、即ち愛(ラブ)!!」は第6部最終回の週刊少年ジャンプ2003年第19号に掲載された。

「何気にエンポリオ…(次ページに「使える男!!」と続く)は荒木先生の「(エンポリオって)何気に使えるんだよね」という言葉を受けてのもので、週刊少年ジャンプ2002年第50号に掲載。



★先生的には「別に第6部までと繋がってなくてもいいんじゃない?」という話でした。第6部についても「あれはいくつもあるストーンオーシャンの中のひとつなんだよね」と。第6部の終わり頃には第7部の構想も先生から伺っていたんですが、端的に「次は鉄球なんだよね」みたいな感じでしかおっしゃらないので、最初はさっぱり分からなかったですね（笑）。ただ先生の中では「舞台はアメリカ」「ゴールを目指す展開」「取材旅行が必要」といったことは決められてましたね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――先生は順位は気にしないという話を歴代担当さんが話されていますが、第6部や第7部の当時も同じですか?

★まったく気にされませんでした。第6部は3年くらい連載が続いたんですがWJの連載会議で「終わりも検討しよう」といった話は出ていなかったですね。

――当時の打ち合わせは、どういったスタイルだったんですか?

★僕の場合は前の週に見た映画、主にホラーやサスペンス映画ですが先生のアンテナに引っかかりそうな話題を話すところから始めていました。そうした雑談から先生の思考時間に入りまして、途中、先生の頭の中で生まれた疑問に適宜対応していくというスタイルですね。「『ピノキオ』って著作権どうなってんだっけ?」とかですね。しばらくしておもむろに「できた!」という呟きから愛用スケッチブックを広げると翌週のプロットを流れるように書き込まれていく感じでしょうか。そこで、「今回はどんな話に?」「う〜ん、教えたくないな〜知りたい?」「いえいえ、そこを何とか…」というやり取りがあったりします（笑）。

――ああ、そこは露伴っぽいですね…。編集者から見て、荒木先生はどんなタイプの作家だと感じていますか?

★描きたいテーマがあらかじめ決まっていて、決してブレないタイプの作家ですね。頑固とは違って、頑強な骨組みが既にあるイメージです。そこに新しい映画・本・音楽あるいは僕らとの雑談の中から次々と情報を取捨選択して娯楽要素を肉付けしていく。時流に乗った新しい要素を貪欲に吸い上げていく印象がありますね。

――血ではなく題材を吸う（笑）。

★これは思い込みも入っているのですが、先生レベルの作家は無自覚に自分の前世とか歴史をわかっている

新しい要素を貪欲に吸い上げていく

んじゃないかなと感じることがあるんです。国が違ったり時代が変わっても限られた資料で全体を把握したり、ご自身の解釈で描けたりするのですから。繰り返しになりますが、先生の中で描くべきことが何かを自覚していると思います。

――描く内容はもう決まっていて、それを出力しているだけというイメージ？

★出力するだけじゃつまらないから、ひと捻りも加えてみて…という感じです。漫画雑誌のひとつの頂点であるWJで、何年にもわたって生き残って描き続けてきた作家の方々を見ると本当にそう思います。

――2010年頃からは大きな『ジョジョ』ムーブメントが来ましたね。

★荒木先生は、ご自身とご家族も周囲を引き寄せる「引力」を持ってらっしゃると感じます。2003年4月にパリで個展を開かれたのですがその折奥様が「いつか欧州のブランドと『ジョジョ』がコラボできれば面白いわよね」とおっしゃっていました。その後2009年のルーヴル美術館、2011年のGUCCIとのコラボレーション企画と結果的に『ジョジョ』25周年&デビュー30周年を迎えるタイミングで実現したことを考えますと、やはり偶然ではなく必然を感じてしまいますね。



★2003年４月10日～４月30日まで、フランスのパリで開かれた「JOJO in Paris」のインビテーションカード。

編集者インタビューを読んだ荒木先生から  一言！ Part 1

先生からは「主人公を女性にしたい」という話がありました。（関谷）

P069 下段

★憶えてないなぁ…。ただ外国映画でも主人公が女性弁護士だったりする「強い女性」を描いた作品が出ていた頃なので、新鮮な感じがしてたと思います。第1部から第3部までは神話的世界というか「強くて逞しい男」がテーマのひとつだったので、そこからの脱却というのも第5部の頃にはあったと思いますよ。

吉良を出すのが決まったタイミングはそこですね。（垣内）

P059 下段

★日常のバトルをもっと描きたかったから「今は吉良を出すタイミングではないかもしれない」「出したら第4部は完結へ向かうかもしれない」っていう気持ちもありましたね。吉良は承太郎と康一に一度敗北して顔を変えて逃げるんだけど、敵って敗北のあとに復活してからが強いと思うんですよ。「負けを知っている人間がいちばん恐ろしい」ってことですね。

「僕、行きますよ」って言ったら「いや、来ないでくれ」と。（佐々木）

P051 下段

★ああ、これは多分リズムが狂っちゃうからじゃないかなあ。ストーリーを考えたり原稿を描いている時に突然、打ち合わせってなると作業を止めなきゃなんない。特に週刊連載の頃は作画時間が週3日しかなくて、単純計算で1日6ページくらい描くっていう結構タイトな進行なんです。そこで1時間でもロスすると睡眠時間を削ることになるから、それで多分「来ないで」と言っちゃったんだと思います。

（順位は）まったく気にされませんでした。（嶋）

P085 上段

★読者の人気を取るためにストーリーを作ると流れに違和感が生じるんですよ。例えば読者の要望があるからといって、第2部のカーズが地球に戻ってきても、必然性がなければ自然な感じじゃなくなると思うんですよね。でも、そこは本当に難しいですね。観光地は宣伝してお客さんに来てもらいたい反面、人が入らないようにして自然や伝統を守らなくちゃいけない。同じようなせめぎ合いがあるんですよ、漫画にも。

スケッチブックの他にノートが（東）

P077 下段

★1999年から使っている、スタンドのアイデアをメモしたノートですね。ちょっと中は見せられないんだけど…。他にもアイデアノートは昔から作っていて、そっちはもう何冊もありますね。中身はキャラクターの背景をメモしたキャラ身上書とか話の展開のメモとか。それと「銀杏の葉はなぜ滑るのか」みたいなメモもいっぱい書いてある。くだらないネタに思えるかもしれないけど、これが何年かして熟成されると活きてくるんですよ。あと、「この映画、つまんねーっ。カネかえせー！」みたいな感情もちょっと書いてある（笑）。

32歳(1992~1993)

荒木飛呂彦
カバーコメント集

「ACT 2」は『ジョジョ』第4部が始まる第29巻から第5部が完結する第63巻、そして第6部「ストーンオーシャン」第1(64)巻から完結巻である第17(80)巻までを収録した。

ACT.2



『ジョジョの奇妙な冒険』
第29巻

この世には「怖いもの」がたくさんあると思いますが、荒木飛呂彦の「恐怖ベスト10」を考えてみました。

第10位「死」、9位「天井にひっつくことのできる生物」(ゴキブリなど)、8位「妄想」、7位「知人」、6位「占いで凶が出ること」、5位「病院」、4位「自然環境破壊」、3位「閉所」、2位「他人」。そして堂々、輝ける第1位はッ!「闇」。

いかがですか? みなさんとは、どう違うでしょうか?



第30巻

〔子供のとき〕

母親がカゼをひいたので、ぼくに「悪いけど、(近所の)お医者さん行って、お薬もらって来てちょうだい」とお使いをたのまれた。ぼくが待合室で待ってると、先生が出て来て—。

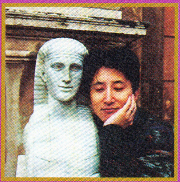
「さ! 荒木君、そでまくって注射するから」

「え! ぼくじゃあないよ!」

「うそだよ」

すごく恐ろしかった。でも、とてもおもしろいと思った。これがマンガ家になるキッカケだったと今、思う。

33歳(1993~1994)



第31巻

音楽をよく聴くのだが、曲のメロディーが頭から離れなくなって困る時がある。いちばん重症だったのは「男と女」という曲が3日間、頭の中で「ダバダバダ」とエンドレスで鳴って、学生時代だったので、『勉強できねーよー』と思った。

水前寺清子の「365歩のマーチ」も歩きだすと聴こえ始める時があって、『パブロフの犬』で有名な条件反射ってのに、おちいってしまったこともあった。



第32巻

荒木飛呂彦の
こいつはビビったぜ
映画ベスト10
(もうやめてくれといいながら
それでもみたベスト10)

第1位 ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド
第2位 ジョーズ
第3位 ジョニーは戦場へ行った
第4位 ミシシッピー・バーニング
第5位 プラトゥーン
第6位 パピヨン
第7位 ハロウィン4
第8位 蝿の王
第9位 羊たちの沈黙
第10位 エイリアン



第33巻

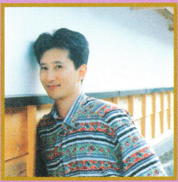
リッパだけど、そんなにオモシロイ作品が選ばれるわけではないと思っていた「アカデミー賞」。C・イーストウッドの「許されざる者」が選ばれた時は、もうまるで自分のことのようにうれしくて、眠れませんでした。フトンの中で「ムフフ笑い」をしたりして、別に知り合いでもないし何か得するわけでもないのに、どうしてこんなにうれしいのだろう? 「ファン」とは不思議だよね。

第34巻



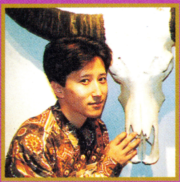
父は六十年間「郵便受け」のことを「郵便おけ(桶)」だと思っていた。まちがいに気づく機会はなんどもあったにちがいないが、六十年間そのハードルをクリアし続けたのは奇跡である。
ぼくもまた、『ジャッカルの日』という映画を十回以上観ているが、ずっと『ジャッカルの目』だと思っていたし、『ドカベン』という漫画もついこの間まで『ドカベソ』だと思っていた(スミマセン)。

第35巻



『自然環境破壊』に超関心がある。
以前、故郷に帰った時、子供の時から知ってるはずの『山』がひとつまるまる姿を消してた事がある。住宅地を建設するためにブルドーザーがけずりとってしまったって理由(わけ)です。地域の人々はそれで利益があっていいんでしょうが、地形まで変えるのは悪い事だと思うのです。
そーゆー事っていうのは犯罪ではないのでしょうか？　私は犯罪だと思うのです。

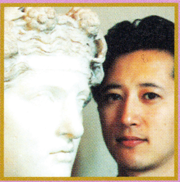
第36巻



前から雨にぬれてる自転車をカワイソーと思うことはあったが、ここ数年「あわれ」だなあと思うのは留守番電話の「留守中電話あったよ」と点滅で知らせてくれる赤ランプ。
一週間以上、旅行した後もズッと点滅しつづけておったの？　と思うと本当、気の毒な気分になる。御主人様が見てない時ぐらいサボってもいいよとも思う。でも仕事だからガンバろーね。

34歳(1994~1995)

第37巻



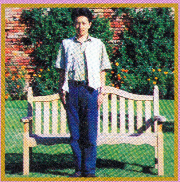
身の回りにミステリーがひとつある。夜9時と11時、きっかり2回、仕事場の一階下の住人がきまって、ベランダの窓をガラと開ける音がして、何か『木』のような物でベランダの壁かどこかを『コン!・コン』と必ず2回(3回ではない)たたくのだ。そして、ピシャン！と窓が閉まる。いったい、あの夜空にひびく、あの『コンコン』は、なにをしている音なんだ？　毎夜だよ。(38巻につづく)

第38巻



身の回りにミステリーがある。
知り合いの女性にボーイフレンドがいるんだが、この男性、デートの日、必ず夕方の6時になると家に帰ってしまうらしいのだ。
なにしに、そんなに早く帰っちゃうのだ？
27歳の男性で「自分のことが嫌いなの？」ときくと「好き」というし、「帰るの早すぎない？」と言うと「だまってしまう」らしい。
なぜですかァ？　アニメでも見るんですかァ？
(39巻につづく)

第39巻



身の回りにミステリーがある。
濡れてプールから上がった時、とある友人が、ぼくの髪の毛を見て「あ!・極楽くんの髪型そっくり」と言って笑いころげた。
「極楽くん」……何者なのそいつ？
有名なマンガか何かの主人公なのか？
「死神くん」や「閻魔(エンマ)くん」や「悪魔くん」や「地獄くん」は知ってるが「極楽くん」は誰だ。誰なの？　どんな髪型してるヤツなワケ？　この間、友人に聞いたら「そんなこと言った？」と答えた。

34歳(1994~1995)



『ジョジョの奇妙な冒険』第40巻

『○○カタログ図鑑』のような本を見るのが大好きで、恐竜図鑑から映画スター事典のようなものまで、売っているとつい買ってしまう。生まれはどこだとか、生年月日だとか、好きな食べ物だとか、細かいデータが載ってれば載ってるほどいい。同じ所を何回も見てしまう。

……で最近、愛読しているのは、『スーパーモデルカタログ』と『世界のネコ』。どっちも優雅そうで、とてもいい。



第41巻

作品の中で病院だとか、薬屋さんの中だとか、お寺だとかを描かなくてはいけない時、「写真」を撮って、それを参考に描くのだが、この写真を撮るのが、けっこう神経使うのです。

「写真撮らしてください」とお願いしても、「何に使うの?」とか、「何の雑誌?」、「あんた誰?」とか細かく質問されたあげく、「責任者がいないので、明日来て」とか言われたりする。参考にするだけなんスから、楽に撮らして。(お菓子あげるから)。



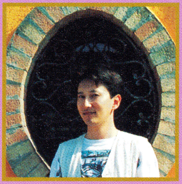
第42巻

「ウルウル涙できるCDアルバムが多数ある」
その70年代ベスト10(順番なし)

好みは人によって違うものですが、これらは何度聴いても涙が出る。

○レッド・ツェッペリン『フィジカル・グラフィティ』
○シカゴ『市我古(シカゴ)への長い道』
○『サタデー・ナイト・フィーバー』サウンド・トラック
○カーティス・メイフィールド『スーパー・フライ』
○マービン・ゲイ『ホワッツ・ゴーイング・オン』
○ジャクソン・ブラウン『レイト・フォー・ザ・スカイ』
○ピンク・フロイド『狂気』
○セックス・ピストルズ『勝手にしやがれ』
○ジョージ・ベンスン『ブリージン』
○カーペンターズ『ナウ・アンド・ゼン』

35歳(1995~1996)



第43巻

仕事場のまわり自然観察記その①

仕事場に侵入してくる虫NO.1はテントウ虫だ。この虫、網戸をものともしない。テントウ虫って飛んで来て物にとまったら、上に向かって登っていくらしい。

網戸にとまったら「さん」のところを上に登っていく。

…で、「さん」の上には3ミリぐらいのスキ間がちょこっとあって、そこから入ってくるのだ。

害虫ではないので、つかまえて外に出すと、またそいつが入ってくる。



第44巻

仕事場のまわり自然観察記その②

ベランダにちょっとした花壇があるのだが、そこにネコが、うんこをしていく。てめーコラ!っつーわけで、ネコは除草剤が嫌いという噂なんで、花壇にまいたら、突然、近所のオバさんがやって来て、「ネコがかわいそーだから除草剤まかないでくださいね」。なんで、人ん家のこと知ってるんだ? ベランダは2階だぞ。「ネコとお話できるネコオババか?」言われた時、ゾッとした。



第45巻

ジョジョに対して、よくいただく意見に第4部になって『〝敵〟が弱くなった』というのがある。「答え」は作品の中にあると思って、普通はあまり意見に対し、答えたりしないのであるが、編集部の中からもこういう意見がたまに来るので、しかたなく答えると第4部は「人の心の弱さ」をテーマに描いている。『心の弱い部分』が追いつめられたり、ある方向から見ると『恐ろしさになる』ということをスタンドにしているのだ。(46巻につづく)

36歳(1996~1997)



第46巻

ちょこっと考えてると、マンガの中に強い敵が出て来る。その次にそれよりも強い敵が出て来る。その次はそれよりも強い。…となると最後はいったいどうなっちゃうわけですか？　宇宙のハテを考えてるみたいになる。それと世の中を見渡してみると本当に『強い』人っていうのは悪い事はしない事に気づく。

「悪い事をする敵」というものは「心に弱さ」を持った人であり、真に怖いのは弱さを攻撃に変えた者なのだ。



第47巻

イタリアでは「J」という文字はないらしく、外来語とか古語にしか用いられないんだそうである。だから「JOJO」という名前などなくなってしまい、発音も「ヨォヨォ」というそうで、この巻の71ページから始まる第5部の主人公は「GIOGIO」とイタリア語に忠実に表記することにしたのです。

ちなみに「H」という発音もないらしく、「飛呂彦」は「イロイコ」と「誰だ？　それ」って感じに呼ばれてしまったりもするのです。

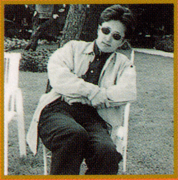


第48巻

イタリアに取材に行ったんですけど、ちょいと不思議に思ったことがある。

警官である。空港とか刑務所にいる警官はマシンガンを持っている。けっこうヤバイのかなぁと思っていると、マントを着て、「剣」を持っているタイプの警官もいる。昔の軍人とかが持ってたような「剣」である。

思ったんだけど、『マシンガン』も『剣』も悪人と闘う時に使うんですかね、あれ？　想像すると両方ともスゴそうな闘いが街中で行なわれそうなんですけど。



第49巻

最近は女性の歌手じゃないと聴く気がしないってのがあるけど、作家とかマンガ家とかでも、具体的に作品名は、あげないけれど、特に恐怖の分野に関して「こいつスゲー怖ェこと考える人だなあー」と思って作者名を見るとたいてー女性。

個人的な意見なんですけど、女性には、はっきり言ってズバ抜けた感じの建築士とか画家みたいな人は、いないと思うけれど、「情緒関係」について見れば、かなわないって人が、たくさんいて、とても勉強になる。最近は、その辺に注目していろんなものを見ている。



第50巻

自分以外の人にとって、どーでもいい事、書きますけど、よく溺れそうになる。といっても、海とか川ではなくて、コップの水を飲んでて死にそーになる。なにかのキッカケで一口の水がノドのどこかでムセる癖がついて、マジに呼吸不可能になってしまうのだ。大抵は落ちつけば、ちょっとずつ息ができるのだが、この間、意識がモーローとなってしまった。危なかった。九死に一生を得たというのに、その時、誰もなんの関心も示してくれなかった。



第51巻

仕事場の「下水」の流れが微妙に悪くなり、「パイプでも汚れたのか、掃除でもするか」と思ったが、「待てよ、一年ほど前、下水工事したばかりだよな」という事を思い出した。

ヤな予感がしたので、別の修理屋を呼んで地面を掘らせたところ、これが専門職に言わせると『言語道断の手抜き工事。別に流れなくもないので素人にはわからない』との事。

前の業者に問いつめたところ、ただひと言、「うっかりしてました」。オ…オレはキレた。

（52巻につづく）

36歳（1996~1997）



『ジョジョの奇妙な冒険』第52巻

過去5年の間で思い出すと我が仕事場では4件の建築関係のトラブルがあり、こっちが素人だと思ってるのか『言い訳のテクニック』が全部すでに用意済みみたいなのだ。
わたしは職人さんを尊敬しており、それは誇り高い仕事をするところにあるんだけれども、家に来た人と会社は他のところでもやってんだよね、きっと。こういう『心』が社会を悪くするのかもしれない。（もちろん、この件は証拠をそろえて弁償させた。）

37歳（1997~1998）



第53巻

子供のころマンガ家に関する次のような噂があった。
①マンガ家は本物の拳銃をひそかに持っていて地下室で撃っている。
②デッサン用の男女のモデルがいて時にはヌードになってもらったりする。
③ブレインというアイデアを出す人がいて、世界中のあらゆる情報は彼に聞けばわかる。
④徹夜仕事をするなんてウソで週に4日はゴルフやヨットで遊んでいる。
はたしてこの中で本当はどれか？　教えません。



第54巻

自分の使ってる物で『最も長持ちしてる電化製品』はオーブントースターである。
友人が一九七八年に購入した物を「オンボロだからやるよ」といって、タダでもらったのが故郷から上京した一九八四年。以後オンボロどころか役に立っていて約13年。まったくこわれる気配も見せていない。タイマーもジジジというゼンマイ式でよけいな機能とかついていないので気軽に使えてよく焼ける。オレンジ色という趣味はよくないがガンバッてるので、ここに書いてあげる。



第55巻

身のまわり自然観察記その③
仕事場（2階）にはいろんな生き物がいる。まず「蟻」。たまに原稿の上をはいずりまわっているので、どこから入ってくるのだろうかと調べたらコンセントの中から出てくるのを目撃。どうしようもないので撃退をあきらめた。それから「ヤモリ」。たぶん空調関係の管の中にいて、夜、誰もいなくなった後しか出てこないのでこれもほっておいてある。「スズメ」もいる。朝、来てみたら窓もドアも閉じてるのに部屋の中を時々、飛んでいる。スズメはどこから入ってきてるのか、全く謎である。



第56巻

常々、昔から思っていた疑問なんですけど、というより「文句たれ」が入ってんですけど、外国映画の日本公開ってなんで遅いんでしょうかね？　まあ、本国アメリカより遅いってのはわかるんですけど、この間、「MIB（メン・イン・ブラック）」って映画の予告みてたら公開済みの国々の名がズラズラ並んで出て来て『世界中で日本が一番遅れてんじゃあねーか！　愛国心傷つくぜッ!!』って感じで「文句言いてえ！」って思ったわけです。たぶん利益の問題でしょうけど早く見せて。お願い。



第57巻

『自分に似た人』―顔とか姿ではなくて、偉大な人物の伝記とか読んでると「オオ、この人と同じだよ。オレはァァァ」とか感激して、その気になって勇気がわいてきたりする。
C（クリスチャン）・ディオールという大戦後に活躍した偉大なF（ファッション）・D（デザイナー）がいたんですけど、この人、デザインの仕事をしたあと、庭とか花壇とかの土いじりをせずにはいられなかったらしい。「自分と同じだよォ、土いじりは心が落ちつくんだよォォォッ、ネコのウンコは嫌いだよォォ」そう思った。



バチカン博物館
サルディニア島の地図

第58巻

夢判断みたいに人それぞれの心の状態が関係するのかもしれないんですけど、グッとくる映像みたいなのってありませんか？　自分の場合はヨットが疾走している映像を見ていると心がウォォって気持ちになります。列車とかR・カーのエンジンの走りよりも風に乗ってる感じのヨットがいいです。あと良いのは『夜』、ウルトラマンが目とC・タイマーだけ光らせて、山とかビルの谷間で闘っているのも良いです。巨大なものは夜がいいです。



第59巻

『グッとくる映像』には、まだ続きがありまして、刑事が犯人を追跡する映像では『雨が降ってる』とすごく良いですねェ……。どんなとこがいいのかって言うとその理由がさっぱり言葉では説明できないところが、『グッとくる映像』なんですねェ。刑事には雨です。それともうひとつ。『男がひとり馬に乗って荒野を行く』って映像を子供の時、初めて見た時は誰かが、すでに教えてくれたのか、「カッコイイ」というのは、こーゆう事なのだと本能的というか、すでに知っていたような気がしてならない。



第60巻

好きなオモチャってありますよね
燃えた自分のベスト5

BEST ① 蛍光のガイコツ人形
（闇で光るガイコツには幻想の世界にひきずりこまされた）
② スーパーボール （このゴムの固まりにSFの風を感じた）
③ バイオハザード・プレイステーション
（とにかく おもしろすぎる）
④ サンダーバード2号のプラモデル
（まじに、どこにでも行けるなと思ったし、丸っぽいデザインとコンテナ部のアイデアに燃えた）
⑤ レゴまたはダイヤブロック
（組み立ててはこわし、作ってはバラバラにし、毎日バカみたいに遊んだ。しかし西洋美術の思想が、これにはあると思う）

うーむ。かわいい系おもちゃはランク外になったな。やっぱり。



第61巻

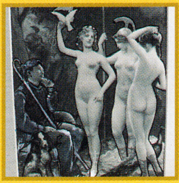
ローマの「コロッセオ」とかの様な古い建築物がある所に行くと、いつも思う事があって、それは「この建物って、人が楽しい時も苦しい時も戦争の時も不況の時も新婚さんが幸せいっぱいの時も昔の芸術家が悩んでる時もA・ヘップバーンが来た時も雨の日も晴れの日も、ずうーっとずうーっと建ってるのだなぁ」となんかしみじみとした勇気が湧くような感動がある。そして自分の国、「日本」にはこの様な場所があるとしたなら、それはどこなのか？　（62巻につづく）



第62巻

歴史だとか過去のノスタルジィを感じさせる場所というのは心を落ちつかせるので、そーゆー場所を大切にするというのは非常に大切な事だと思う。元プリンスが行ったというレストランに食べに行っただけでも、けっこう感動するんだからまちがいない。（マズかったけど）

しかしながら、私の生まれ故郷では街が発展しないという理由で『寺町（お墓の町）』をそっくり郊外に移して道路とかマンションを建ててしまった。ヤバイと思う。



第63巻

『連続』――音楽のすばらしさは連続する音の美しさであり、モーツァルトは『音符一つとしてカットできない』と皇帝に向かって言ったし、生命も連続するDNAという鎖でできている。そう考えると、この世には連続するどうすることもできない「運命」というものが存在するのを認めざるを得ない。しかし一方で「運命」で決定されているとなると、努力したり喜んでも仕方がないという考えも生まれてくる。そこなんですよ。人間讃歌を描いていて悩む点は。答えはあるのか？

39歳（2000）



『ジョジョの奇妙な冒険PART6 ストーンオーシャン』第1（64）巻

JOJO第6部の主人公は女性です。なぜ『女性』なのか？ そこの所なのだ問題は。

JOJOの主人公なのだから顔面にパンチをくらってもヘコたれないタフさが必要だ。時にはドブの中をはいずり回る可能性もあるし、大股開きでビルの上から落っこちるかもしれない。女性にはちょっとキツイ設定だ。

でもそのギャップが逆に考えてみるとおもしろいかもと思った。しかも聖母マリア様のような大きな人間愛を持つ人。主人公は女性しかないと思った。

40歳（2000～2001）



第2（65）巻

仕事場の周りの自然観察（その④）

昨年、ストレスが原因だと言われたんだけど胃炎になった。その時、ヨーロッパの格言で「トマトを作っている家に胃病はいない」ってのを聞いて、「あ、そう…。そんなら栽培してみっか」という動機でトマトを育てることにした。植木鉢を買い（2300円）、肥料と土（約千円）、添え木（200円）。トマトの苗（140円）、それを3本植えたので合計1万9920円。仮に10個できたとしたら1個いくらのトマトだ？（つづく）



第3（66）巻

仕事場の周りの自然観察（その⑤）

きのこのナメコ茸は本当は茎みたいなところがあって、もっとプロポーションが長いきのこで茎もオイシイらしいのだが醜いので売る時は「先っちょ」のとこだけじゃないと売れないのだそうだ。

トマトを自分で栽培して思ったことはトマトの「香り」が売っている物より断然いい。何故だろうか。ひょっとして消費者の中に「くさい」とか言う人がいて農家はワザと香りを消して作っているのではないか？ マンガ制作に関しても同じ様な事があるような気がする。気をつけよう。



第4（67）巻

睡眠時間について

睡眠時間は、その人個人の遺伝子情報で決まっているらしいが、最近、不思議なことが起こった。半年ほど前まで自分の場合、絶対に8時間は眠らないと気が済まないし、体調も悪い感じだったのに最近、突然3～4時間眠れば十分スッキリって感じになった。8時間も寝るヤツの気が知れねーって気分。いったいこの変化の理由は何なのだろう？ 食生活の変化か？ 枕のせいか？ 謎である。



第5（68）巻

フロリダ州マイアミの刑務所に取材に行った時に所長さんにインタビューした。「受刑者の男性と女性では、その犯した犯罪の種類に違いとかありますか？」と質問した。

自分のイメージでは男性の方が凶悪な犯罪を犯し、女性はやさしい犯罪に種類が、かたよっているんじゃあないかと思っていた。

所長さんの答えは「同じだよ。男性と女性に違いはない。殺人犯もいるし、レイプ犯も服役している」。そう言った。

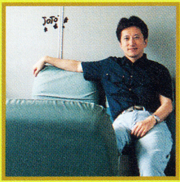


第6（69）巻

子供の頃の話

小学校の時、おバカな友達がいて、そいつと遊んでいる時、花壇の、針がすごく小さくて見えない種類のサボテンの上にそいつが知らないですわってしまった。半ズボンだったし、当然オシリに針が刺さった。そしたら、なんと彼は悲鳴をあげながら、手でオシリをさすったのだ。当然手に針が刺さる。彼は泣き始めた。「針が見えないんだよ」と言ってるのに彼は、さらにその手を舌でなめたのだ。なんかさぁ、急に友達でいるのはやめようと思った。

41歳(2001~2002)

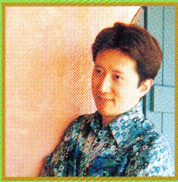


第7(70)巻

携帯電話について

世の中のみんながこれだけ誰もが携帯電話を持つと、持ってない自分は異常なヤツなのでは？とヤバインじゃないの的気分になる。というより自分は携帯電話の必要ない人なのよ。

まず仕事場から出かける事のない仕事じゃないスか。それに出かけた時くらいは誰からも電話して来てほしくないのよ。きっとロクな内容じゃあないだろうしね。問題は待ち合わせの時間に遅れる時なんだけど。それは…。（8(71)巻に続く）



第8(71)巻

この時代に携帯電話を必要としない自分とは、いったいどんな人間なんだろう。

まず待ち合わせ時間に遅れる場合。自分的にはスゴイ便利。待たせてる相手は電話持ってるので、公衆電話から連絡すればいい。

困るのは相手が遅れる場合。相手は連絡がとれない。でも自分的には元々15分以上待たない人なので、連絡がない方がすぐ帰れるので全然平気。

相手がけっこう大変。イコール携帯電話を持たないヤツはスゴイ勝手なヤツ。みんな怒ってんのかな？



第9(72)巻

『疲れずにマンガを描く方法』

—ま、結論から言って、こんなうまい事があるなら、わたしも知りたい。だが疲労を後日に残さずマンガを描くというのは必要な事だ。

今まで自分がやってきた経験をここに記したい。整体で調べてもらった時、わたしの体は右腕側背中の筋肉が異常に発達しているらしい。

つまり毎日、長い時間ペンを走らせ続けているので、知らない間に筋肉が右側だけムキムキになってるらしいのだ。これが良くない。（10(73)巻に続く）

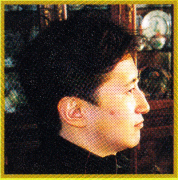
42歳(2002~2003)



第10(73)巻

単純に考えると…。『左半身にも筋肉をつけてやれば良い』。これが右腕ばかり使って毎日、何時間も仕事をする漫画家の対策である。

…で大まじめに書くんですけど、日常生活では「左きき」になる。というのが対策である。荷物を持つのから、傘をさしたり、歯みがきやお茶を飲む動作、リモコンとかまで、私の場合、箸を持つくらいが例外でほとんど全て左でやることにしている。これでけっこう左側の筋肉が発達してくる。それと疲労を残さない方法がもうひとつある。（11(74)巻に続く）



第11(74)巻

（10(73)巻の続き）

『疲労を後日に残さないためのマンガの描き方』

絵を描く時、特に細かい部分を「正確に描かなくては！」などと強く思っている時、つい呼吸を止めてペン線を走らせるタイプの人。こういう人の疲労のダメージが大きい。ペンを入れる時の呼吸は「フーッ」と吐きながら描くと良いという事に経験で気がついた。スポーツをする時の呼吸と同じだと思う。でもまァ、こんな事、大マジに考えてるの私だけか……。



第12(75)巻

フロリダ州、オーランドという所に取材に行った。テーマパークが集まる街なのだけれど、世界でも本当に奇妙な味を持った街だと思った。

一言で言うなら『人間の夢と希望が作りあげた街』。雑草や水たまりの水までも計算されて作られてる印象があり、歩いてる人たちは全員がみな幸せそうだ。普通そういうのって、逆に私を不安にさせたりするのだが、そんな事はない。落ちついて、ホッとする所でもあった。

42歳(2002~2003)



『ジョジョの奇妙な冒険PART6 ストーンオーシャン』第13(76)巻

超能力について その①
母親の証言によると、わたしは幼い頃、超能力を持っていたそうだ（現在はない）。
どういう能力か？ 例えば病院の待合室にいる時、突然、私がおびえ出し、ソファの陰に隠れる。「何してんだこいつ?」と母親が思ってしばらくすると白衣を着た医者が廊下の角を曲ってやって来る。つまり、あまりの医者嫌いゆえに医者が近づくことが、いつも予知（探知）できたらしいのだ。すげえ。医者限定のスタンド能力。



第14(77)巻

超能力について その②
先日、CDを5枚買った。ジャンルは洋楽だが、ジャズ、ロック、R&Bと分かれて、それぞれ全く違うアーティストのものだった。だが、よーく見てるとアルバムのプロデューサーが5枚とも全部同じ人。『Antonio(アントニオ) "L.A.(エルエー)" Reid(リード)』という人だった。意識したわけでもないのに、こんな偶然ってあるだろうか？ ポーカーゲームのR(ロイヤル)・S(ストレート)・F(フラッシュ)とか、ロト6以上のすごい奇跡だと思った。「啓示」を感じた。

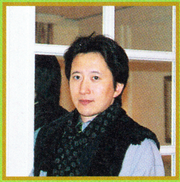


第15(78)巻

カワイイ顔について。
「愛子様」ってカワイイ。TVに出てくると、つい「カワイイ!」って叫んでしまう。
ルーブル美術館で個人的にはモナリザより好きな絵、ベラスケスの「マルガリータ王女」もヤッベ！ 涙が出るほどカワイイ。
画家・奈良美智(ならよしとも)が描く女の子も抱きしめてブチュッてチューしたくなるバカ面。
この3人には何か共通点があるはずだ。でも、それが何かわからない。顔が似てるってことでもないんだよ。

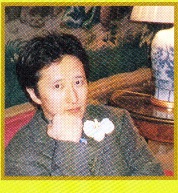
「ACT.3」はP129から。

43歳(2003~2004)



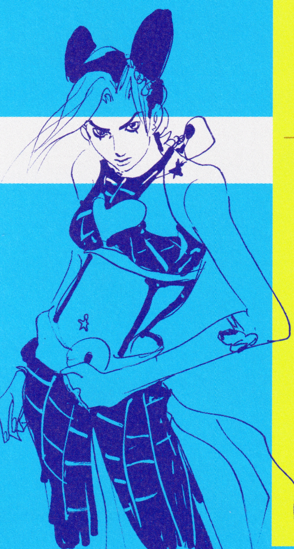
第16(79)巻

マンガ編集者は普通、お昼すぎから出勤する。20数年前、ぼくが原稿を集英社に持ち込んだのは午前中だった。だが、たまたまひとりだけ出勤していて、その人に原稿を見てもらった。彼は『ジョジョ』の初代編集者であり、彼の意見と影響は、あまりにも大きい。午後に行ってれば、きっと違う編集者で、その人の影響を受け、違う作品になっただろう。
「運命」は偶然ではなく理由がある。『ジョジョ』の中では、この考え方をとる。科学的には証明できないかもしれないが感覚がそうだと言っているのだから。



第17(80)巻

説明するのがムズかしいんだけれど、マンガを描いていると『重力』の存在というモノをすごく感じる（唐突ですけど）。
つまり作者はアイデアだとか、主人公の行動をコントロールしてストーリーを進行させていると世間一般で思われているようだけど、そうじゃあない事が描いている時にあって、主人公が作者の意に反して行動せざるを得ない時とか、絵にも描かざるを得ない絵というのが出てくる。これをぼくは『重力』と感じ、『重力』とは『運命』だと感じるのだ。S(ストーン)・O(オーシャン)最終巻、これをちょっと思って読んでほしい。



ACT. 3

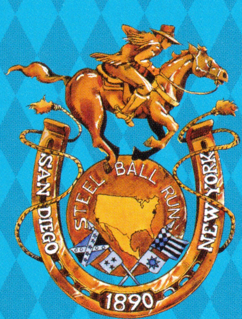
2004 ～ 2013

ジョジョの奇妙な冒険

第7部
スティール・ボール・ラン

第8部
ジョジョリオン

2004年〜2013年



第7部
スティール・ボール・ラン

PROFILE

★へいし・よしひさ
1991年に入社。「週刊少年ジャンプ」編集長（2013年9月現在）。好きなキャラクターとその理由は「ジャイロ。なんだかんだ、自分の担当の時のキャラに愛着があります」。

★添JO員
瓶子 吉久

—『スティール・ボール・ラン』の冒頭から担当されていますが、「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）の連載は変則的なスタイルでしたね。

★そうですね。短期集中というか、10週載せたらしばらく休んで描きたまったら掲載して…、という変則的な連載スタイルでした。なので話数で言えば僕が実際に担当したのは20週分とかそれくらいで、途中で「ウルトラジャンプ」（以下、UJ）に移籍したので期間で言っても1年間くらいと短いですね。

—不定期連載というスタイルは荒木先生からの提案という話ですが。

★先生からの要望だったと聞いています。『スティール・ボール・ラン』の立ち上げに関しては実は前任の嶋がすでにある程度の打ち合わせもすませていて、先生も原稿に入っている頃でした。その時点で、嶋が他誌に異動となったので僕が担当することになったんです。僕の担当した頃は、連載スタイルとか移籍とかの件も含めて、歴代担当の中ではかなり特殊な時期を過ごしてきたと思



います。

──WJからUJへの移籍の経緯を知りたいのですが。

★WJは小学生をメインとした少年読者がターゲットの雑誌です。『ジョジョ』はWJの看板作品のひとつだし、単行本も安定した人気で数も出ていたんですが、連載が長くなりファンの年齢層が上がっているのかもといった空気が、編集部でも第6部の途中あたりからありました。それで第6部が終わったあとあたりで、編集部の上のほうと荒木先生とで話し合いをしたと聞いています。その時には先生から「描きためる」という案も出ていたので、編集部から「描きためスタイルで掲載しましょう」「『ジョジョ』のタイトルは外して、新しい作品として描いてほしい」という話になり、なのでタイトルは『ジョジョ』ではないし、キャラの名前はジョジョだけど過去のシリーズとも繋がっているような、いないような、そんな形で新作として始まってますね。ただ、その前から先生としても段階を踏んでWJではない何処かに移籍するということを、ずっと考えていたと思います。そのあと、先生側から「UJに行こうかと思っています」というお話が出たので、僕はそれを編集部に持ち帰って、上司にも相談して…、という流れでした。



★『スティール・ボール・ラン』第1話が掲載された週刊少年ジャンプ2004年第8号。巻頭カラーで53ページという大ボリュームだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

描きためる

──持ち帰って編集部の反応は?

★「もう少しWJでやってもらえないか」という話を僕の上司が先生にしたようですが結局、荒木先生のお気持ちが「WJはそろそろかな」ということでしたので、先生がそうおっしゃっているのなら…という感じでした。当時は月刊誌でいうとUJの他に「月刊少年ジャンプ」もあったんですが、先生はUJの井藤とのパイプがあったので移籍先にUJを希望されたんだと思います。

──『スティール・ボール・ラン』というか『ジョジョ』は、WJの看板のひとつでした。それがなく

走りながら物語を作っていった

なったことで、雑誌的に何かしら影響はあったのではないでしょうか。

★今でもそうなんですが長い連載作品が終わると、やはり読者のモチベーションが落ちるんですよ。でも、そこで新しい人気作品を立ち上げて、落ちたところをまた吸収して底上げしていくという感じなんです。もちろん長期連載作がなくなることで離れていく読者もたくさんいるはずなので売り上げ的にも影響がなかったわけではない。でも荒木作品はUJという受け皿も決まっていたわけで、卒業という言い方が僕はいちばんしっくりきていますね。

――作品の話に戻ります。先生からは『スティール・ボール・ラン』をどういった展開にしたい、といった構想を聞いていましたか？

★ラスボスである大統領については、当時はまったく話はしていませんでした。もともと先の展開は決め込まない作家さんでもありますので、当時はとにかく「純粋にレースの話だ」と言っていました。遺体の話も僕が担当している時に出た記憶はなく、大統領もUJ掲載時から出たキャラクターなので、やはり走りながら物語を作っていったという形のはずです。

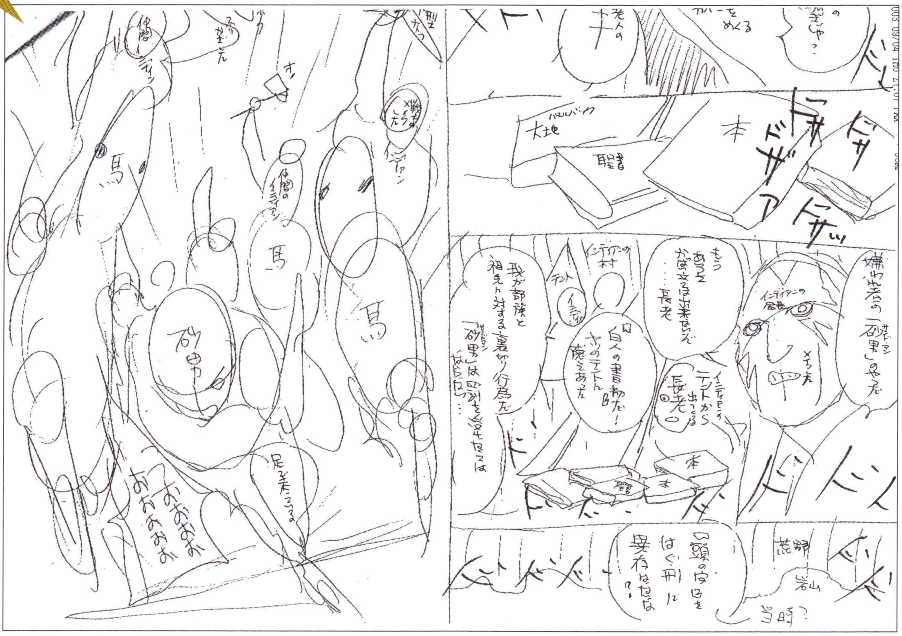
――『スティール・ボール・ラン』や荒木先生について、特に印象深いエピソードはありますか？

★どの作家さんもそうですが、担当が替わってしまうのは気持ち良くないことだと思うんですよ。先生もそういう部分があったのか、最初の顔合わせで「嶋さんとは一緒にアメリカ取材にも行ったんだけどなあ」といったことをポロッとおっしゃって、あらためて「腹を決めてやらねば！」と。それで、ひとりでアメリカへ取材旅行に行きました。先生と嶋が辿ったルートを、僕がまたひとりで辿るという（笑）。

――それが担当になって最初の仕事？

★そうです。先生が辿ったルートを再び辿ることで共通言語ができるわけで、これは打ち合わせの時もすごく役にたちました。「あの山の形がさぁ」と言われた時に「ああ、あれですね」と。それがあるかないかで、漫画の背景の見え方が違ってくる。砂漠にも行きまして、先生が行かれた時は真夏だったのでものすごく暑かったそうですが僕が行ったのは12月の頭なので寒く

★『スティール・ボール・ラン』第1話のネームと、実際の原稿。
通常、ネーム類などは破棄されることが多いため、貴重な資料といえる。






なんの騒ぎじゃ?
嫌われ者の「砂男」のやつだ
もう あいつを かばい立ては 出来ないぞ……長老
「白人の書物」だ ヤツのテントに 隠してあった
我が部族と 祖先に対する 裏切り行為だ
「砂男」は 罰を受けなくては ならない……
『頭の皮』を はぐ刑に処す
異存はないな?

唯一無二の作家

て閑散としてまして…。グランドキャニオンのロッジにひとりでポツンと泊まったという、そんな思い出が（笑）。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――荒木先生の才能はどういった部分だと感じていますか？

★唯一無二の作家さんという点ですね。ネームや打ち合わせのスタイルといった点もそうですが、自分のやり方というものがちゃんとあって、それが他の作家さんとは違う独特なものがある。作家さんは皆さん独特といえばそうなんですが、荒木先生は特にそういう自分のスタイルというものがある方ですね。僕の知る限り荒木先生と似たタイプの作家さんはいないし、だいたいあれだけちゃんとスケジュールを管理できている人は僕の知っている限り『こちら葛飾区亀有公園前派出所』の秋本治先生以外にはいないです。

――担当を離れてからのお付き合いというのは？

★荒木先生は暑いのが苦手なので夏は毎年、地方で仕事をされるんです。オフの日などはそこに招いてもらっています、歴代担当編集が集まるという濃いイベントなんですが（笑）。そこで他愛もない話をしたり、一緒に川に遊びに行ったりアトラクションみたいなもので遊んだり。男ばっかりですけど（笑）。

――そこで漫画の話は？

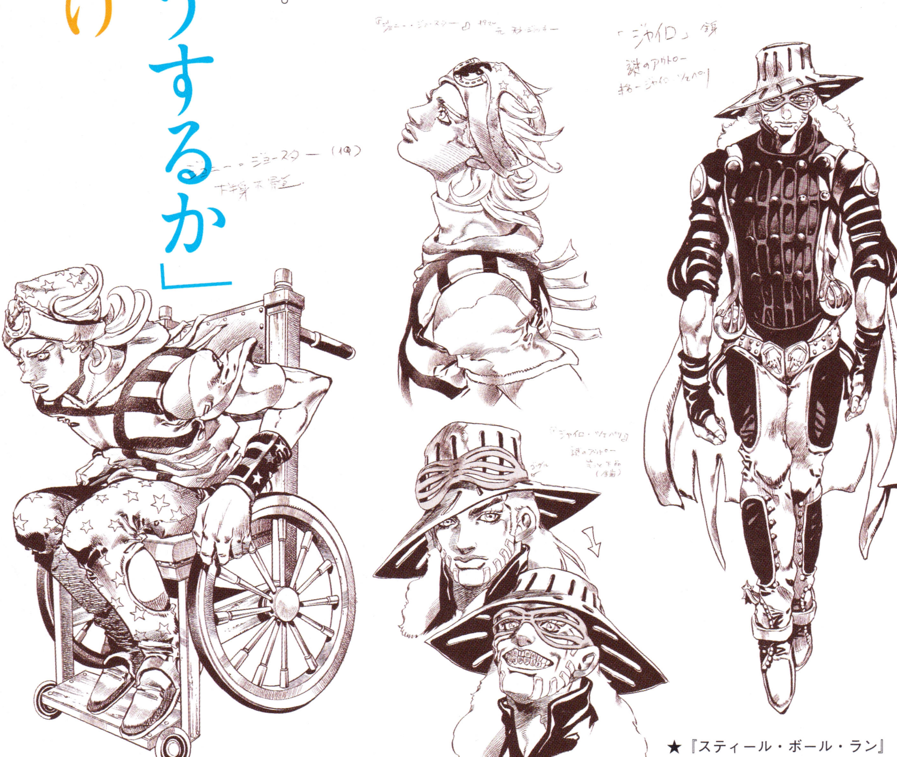
★まったくしないですね。荒木先生が漫画の話をするのは僕の時は打ち合わせの時だけでした。しかも他の漫画の話も全然しなくて、本当に『ジョジョ』の話だけでした。それも、その時に描いている『ジョジョ』の「次回の展開をどうするか」という点だけで、逆にラスボスの構想とかクライマックスの展開だとかも話しませんでしたし、過去のキャラクターについてもまったく話さなかったです。

――瓶子さんは、WJの編集者として荒木先生と作品の変遷を見ていた方になります。

★僕がWJに配属されたのが第3部のクライマックス、承太郎とDIOの決着の頃だったと思います。第3部

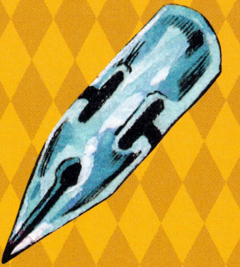
「次回の展開をどうするか」という点だけ

は異色ではあるけれど少年漫画の王道だと思うんですが、第4部の頃になると荒木先生の作家としての色がより強く出たというか、作家として成長した感じがありました。この頃からカリスマ的な人気も出始めて、編集部の中でも「『ジョジョ』って他とは違うね」「特別な作品だね」という空気が強くなっていましたね。僕が『スティール・ボール・ラン』を担当した頃までは、僕の中でもマニア色が強くてファンの年齢層も高い作家さんという印象だったんですが、2010年頃から巻き起こった一連の『ジョジョ』ムーブメントでは若い女性層やライト層も取り込んでいて、もう「いったい何が起きているんだッ!?」というくらい驚いています。長い作品には調子が良い時期もあれば、悪くなってしまう時期もあって、ビジネス的にも長期タイトルを再活性化させる戦略が必要だと思うんですが、そういう意味では『ジョジョ』は常に良いお客さんを持っているし、獲得したケースだと感じています。



★『スティール・ボール・ラン』連載開始前の人物設定画。

2004年〜2013年



岸辺露伴は動かない

Thus Spoke Kishibe Rohan

PROFILE

★さいとう・ゆう
2005年に入社。「週刊少年ジャンプ」編集部に在籍（2013年9月現在）。好きなスタンドとその理由は「キラークイーンとザ・グレイトフル・デッド。強いから」。

★添JO員

齊藤 優

—週刊少年ジャンプ（以下、WJ）編集部での担当という形ですが、具体的にはどういった関わり方でしょうか。

★WJに載った読切の『岸辺露伴は動かない ～エピソード5：富豪村～』は打ち合わせも含めて僕が担当しました。それと連載がなくても諸々の連絡や報告もありますので、それも前担当の瓶子から引き継いでやっています。『富豪村』はもともと荒木先生が「WJで読切を描きたい」と希望されたところから立ち上がっていて、最初の打ち合わせの時にはもうマナー対決というテーマは出ていましたね。

—読切の読者の評判はどうでしたか？

★アンケート結果はめちゃくちゃ良かったです。マナー対決だったので予備知識が無くても入れる内容ですし先生も読みやすさを意識されていたようなので、『ジョジョ』を知らない低年齢層の読者にも、「ちょっと変わった頭脳バトル漫画」というふうに受け入れられたんでしょう。

—『富豪村』の打ち合わせ時の印象は？　編集者として絡むのはそれが初めてですよね？



★マナー対決というテーマが決まったあとも先生から展開のアイデアがたくさん出て、こちらからも様々な意見を投げて、という形で進めました。他の作家さんと比べても頭からラストまでかなりしっかりと組み立てるやり方で少し意外でした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——WJの現役編集者という立場で漫画家の卵や若い作家との付き合いもあるかと思いますが、『ジョジョ』リスペクトの人は多い?

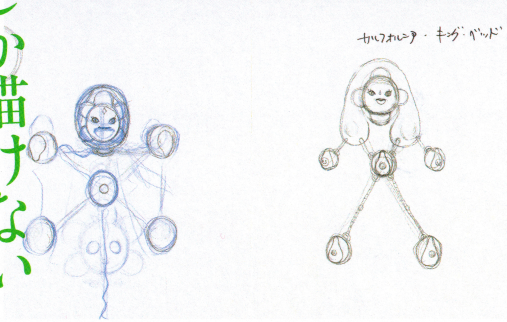
★多いですね。クリエイターに与えている影響は尋常ではないと思います。若い作家が魅力を感じているのは、誰が見ても『ジョジョ』だとすぐに分かるところ。内容面でも圧倒的に尖っていて荒木先生しか描けないという唯一無二感です。実は先日、第2部をあらためて読み直して感じたんですが、バトルのアイデアの量が他の作品と比べて桁違いに、異常なほど多い。しかもこれを週刊連載でやっていたのか、という点に驚愕します。それとビジュアルの面白さですね。漫画の編集者になって分かったことですが、漫画の中でデザインやビジュアルの面白さというのはかなり大きいんです。特にスタンドは130体以上もデザインされていますが日本の妖怪や世界中の民芸品などを下敷きにしつつ、それらが先生の中で昇華されていて、シルエットが重ならない。

——人間キャラクターでも同じことが言えますね。

★それと、やりたいことを心おきなくやっているように見える点でもクリエイターは憧れると思います。ただ、先生自身は自分が描きたいものを描けばいい、と

圧倒的に尖っていて荒木先生しか描けない

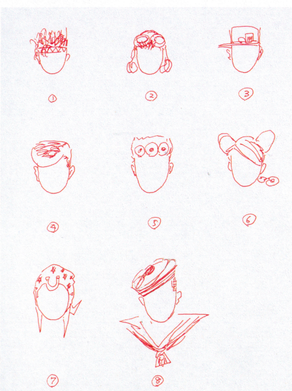




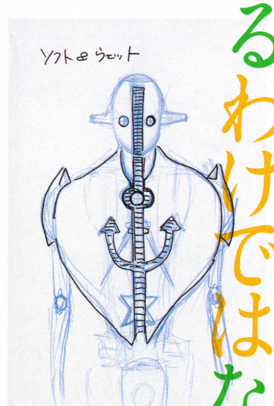
★第8部のデザイン画を公開！次ページ以降では、奇跡的に残っていた第7部や第5部のデザイン画も。

好き勝手に描いているわけではない

いうのではなく、例えば出てくるアイデアにしても、『富豪村』という読切1本の打ち合わせですら先生自身から「このアイデアじゃ読者は納得してくれないな」という言葉が5回くらい出たりする。「ここまでやらないと読者は喜んでくれないだろうな」というラインを、理屈ではなく感覚として持っている。決して好き勝手に描いているわけではないんですね。クリエイターに関して言うと、この数年の『ジョジョ』の再評価の動きはリアルタイムで読者だった人たちがクリエイターになって「『ジョジョ』が好き」と語っていて、そのクリエイターのファンも「じゃあ読んでみようかな」「『ジョジョ』ってオシャレかも」と手を伸ばした。物理的な理由としては、それがいちばん大きいと思います。あとはクリエーターたちが『ジョジョ』を語ることで昔からのファンの中にも「『ジョジョ』を好きと言っていいんだ」という安心感が生まれたんじゃないでしょうか。以前は『ジョジョ』好きというとマニアックとか思われがちでしたから。そういった古くからのファンの飢餓感も大きかったかもしれないですね、数年前までは『ジョジョ』はコミックスと画集以外のアイテムがほとんどなくて、僕らの『ジョジョ』への飢餓感はそりゃもうすごかった。そしてそ

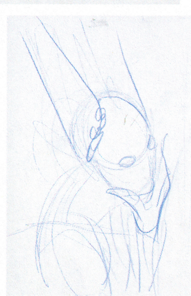


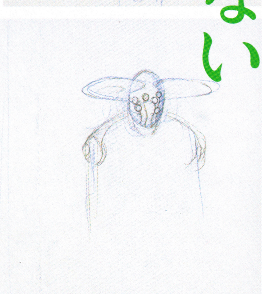




★上は第８部連載前に描いたもの。先に歴代主人公を描き、かぶらないようにして東方定助のシルエットを決めた。







のまま大人になった今はお金を使える世代になったから、今までの分を埋めるように沢山のアイテムに手を伸ばす、そういう構図もあると思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――荒木先生とのお付き合いで、印象に残っていることは？

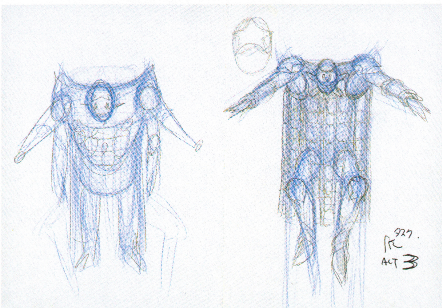
★荒木先生との会食の時、道に迷って遅刻しそうになってレストランに駆け込んだら「レストランで走っちゃダメだよ」と注意されまして（笑）。それくらい公序良俗という部分をすごく意識されている方です。あとは『富豪村』でエピソードナンバーを入れてもらったことですね。先生は『岸辺露伴は動かない』の1作目『エピソード16：懺悔室』を描いた当時、「いくつか外伝がある中の1本というニュアンスが出せれば」ということで「エピソード16」としたらしいんです。ただ、先生の中でそこは比重の低いポイントだったらしくて2作目の『六壁坂』では実はエピソードナンバーが入っていない。僕は1作目を読んだ時に「残りの15本も読みたい！」とファンレターを書いたくらいの荒木ファンだったので、3作目の『富豪村』の打ち合わせの時に、先生はナンバーの件を完全に忘れて

公序良俗









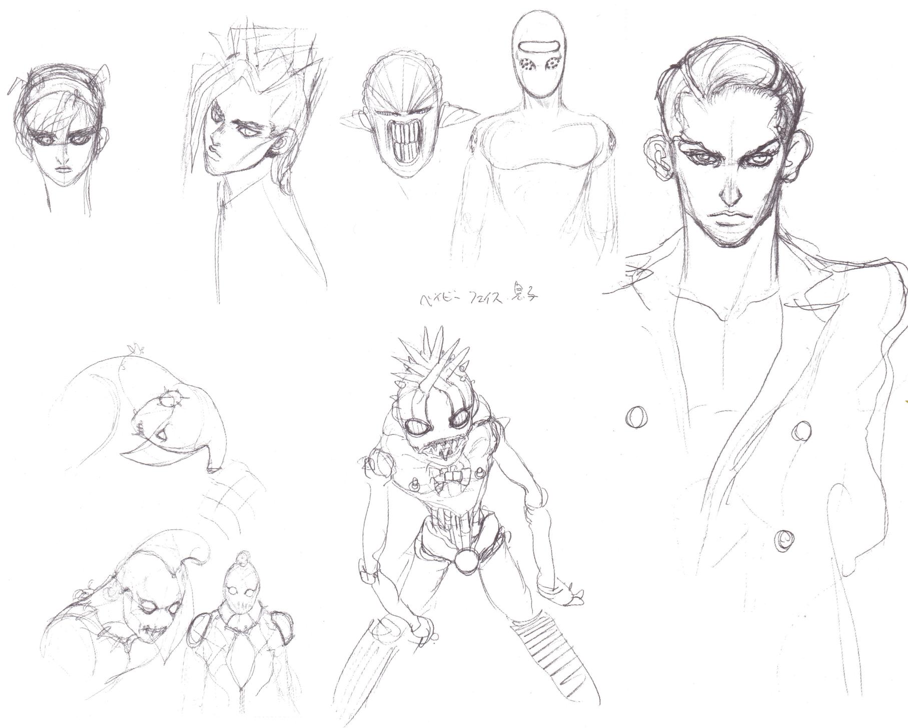
いましたが（笑）、先生に「エピソード5」というナンバーを入れてもらいました。

――荒木先生と人柄や性格が似ている『ジョジョ』キャラクターは誰だと感じますか？

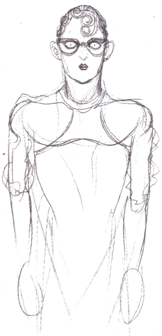
★よく岸辺露伴という話が出るんですが、僕の中ではまったく重ならないですね。似ていると思ったのは…、吉良吉影かな。規則正しい生活を送る部分や信念を曲げなかったり、という哲学が荒木先生に似ている感じがします。仗助と戦うことになった理由も自分の信念を貫いた結果なわけで、そこが先生の印象とだぶります。吉良の台詞は僕の脳内では完全に荒木先生の声で再生されるんですよね（笑）。

――荒木ファンの編集者という立場から見た荒木先生や作品の魅力は？

★個人的なことで恐縮ですが、高校時代は常に『ジョジョ』の第46巻と第53巻がカバンの中に入っていて（笑）。第46巻は仗助と吉良がにらみ合っているカバーイラストが大好きで絵の構図といいサブタイトルの「クレイジー・D（ダイヤモンド）は砕けない」といい、たまらない。第53巻は「ザ・グレイトフル・デッドの巻」ですが、フィレンツェ行き超特急の中という密室劇でありながらアクションも両立している点が素晴らしいエピソード。高校の帰り道はどちらかのコ



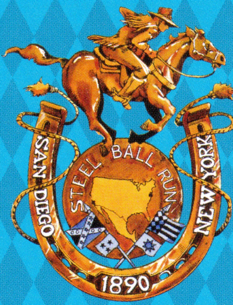
ミックスを読んでいたので、それぞれ100回くらい読み込んだほどでした。中学2年生の時、たまたま読んだWJで『ジョジョ』と出会わなければ僕はまったく違う人生になっていたはずで、そんな感じで荒木先生は個人的には神様のような存在ですね。あ、でも実際に打ち合わせをした時は、ちょっと変わったところもあるけど普通の人という印象ではありました。ただ、ちょっと変わったところというのがポイントで、例えば映画で面白いと思うところが普通の人と違う。先生はジョージ・A・ロメロが監督した『ドーン・オブ・ザ・デッド（邦題『ゾンビ』）』という映画が大好きなんですが、どこが好きなのかと聞くと「ショッピングモールに生き残った人間が立て籠もって、好き勝手にしているところが好きなんだよねー」って。「そこですか⁉」みたいな感じのシーンですが、他の人が拾わないところを拾っていくのはセンスというか才能だと感じます。どんな映画に関しても、なぜ自分が感動しているのか、なぜ面白いと感じたのかが分析できていて、ものすごく頭のいい人という印象です。



他の人が拾わないところを拾っていく



2004年〜2013年



第7部
スティール・ボール・ラン

PROFILE

★いとう・りょう
1996年に入社。「MANGAオールマン」を経て「ウルトラジャンプ」副編集長（2013年9月現在）。好きなキャラとその理由は「ジャイロとジョニィ。やっぱり長い付き合いでしたから」。

★添JO員

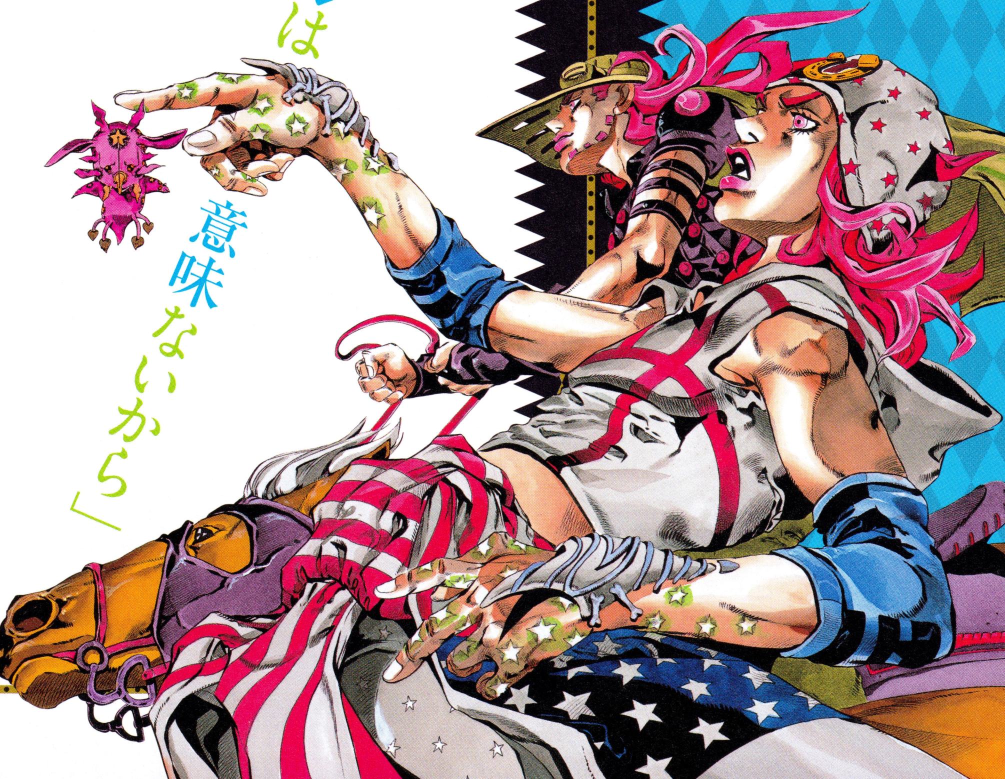
井藤涼

「プラスがないバトルは意味ないから」

—荒木先生が「ウルトラジャンプ」（以下、UJ）に移籍してからの担当ですが、そもそもの先生とのお付き合いはいつから？

★最初に担当したのは1999年の『デッドマンズQ』ですね。僕はその当時、「MANGAオールマン」という雑誌にいまして、そこに3号連続掲載というスタイルでした。「MANGAオールマン」の編集長が初代担当の椛島で、僕は荒木ファンだったので「担当したいんです！」と頼み込んで（笑）。

—『スティール・ボール・ラン』はUJ移籍当初、



「王道を描いていきたい。」

――先生の中ではどういった構想だったんでしょうか。

★最初は「冒険レースもの。スタンドも出てこないかもしれない」というようなことを言っていました。ただ、途中から「謎を追いかける展開がほしい」という話も出て。たしかにそうなんですよね、第4巻の「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）連載分までの流れで言えばゴールはあるけど、今ひとつ主人公の目的が見えない部分があった。レースに勝った負けたというだけの流れを繰り返していくと緊張感が保てないかもしれないし、プラスアルファの軸が必要だというのが荒木先生の中に出てきたんでしょうね。

――UJ編集部から先生へのオーダーは？

★少年誌ではないので、WJでは描けない残酷描写やセクシャルな表現もOKですという話はしました。先生の返事は「マニアックなものを描きたいわけではなく、王道を描いていきたい。ただ、少年誌ということで遠慮していた部分は挑戦として描くかもしれない」ということでした。WJは基本的に子供が読むものなので、いろいろ配慮しなければいけない部分もあるわけで。なのでオーダーは「描きたいことを思い切り描いてください！」ぐらいで、むしろ荒木先生に教えられることのほうが多いですね。

――具体的には？

★遺体争奪戦について打ち合わせをしていて「じゃあ敵に奪われた遺体を取り返す流れですね？」と聞くと、「いや、それだとプラマイゼロでしょう。何か得るものがないと。プラスがないバトルは意味ないから」と言われて、なるほどと思いました。荒木先生はよく「なんかグッとくるんだよね」という言い方をされるんですが、その具体例のひとつですね。プラスの爽快感があるということです。そういった荒木先生の理論とか方法論も勉強させてもらえたので、打ち合わせは楽しかったですね。荒木先生の言葉って最初に聞いた



★週刊少年ジャンプから移籍後、初掲載となったウルトラジャンプ2005年４月号にはプロローグ編が掲載され、本編は翌５月号から再スタートした。

アップデートされている

時は「え?」って思うことが多くて、例えば「次の敵はね、男尊女卑みたいな奴なんだよね」と言ったりする。第7部に出てくるリンゴォって敵キャラなんですけど。最初はイメージがつかめないんですが、よくよく話を聞いていくと、先生の「現代の男が弱っている感じがする」「だから強い男を敵で描いてみたい」という感覚が分かって、こちらも「ああ、なるほど」となるわけです。そういった時代の空気感も敏感に感じ取って作品に反映させていくタイプなんですね。

——絵柄に関しても空気感を取り入れるところはあるように感じます。承太郎の眉毛はしっかりしていますが周囲の漫画を見渡すと眉毛の細いキャラクターが主流になっていた。それで第4部の仗助の眉毛は細めに描いたとおっしゃっていました。

★そうですね。例えばフィギュアに関しても原型を先生に監修していただくんですが、第3部の承太郎の原型監修の時、先生から「承太郎の服装がさ、時代に合ってないんだよね」という意見が出た。そりゃそうですよ、20年前に描かれたわけですから。先生曰く「ウエストの位置が高すぎる。今は腰ばきだから、そうできないか」と。つまり先生の中でキャラクターデザインはアップデートされているんですよね。まぁ、でもファンが欲しいのは当時のキャラクターの立体物なわけで、その辺はお話ししたら「ああ、そうか」と納得はしていただけたんですけども。荒木先生の中では、過去の部のキャラクターやストーリーを新しくして今の感性に近づけることには躊躇がないんだろうと思います。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——フィギュアもそうですが、アニメーションやゲームなど、2010年頃から『ジョジョ』ムーブメントともいえるような大きな波が来ましたね。

★リアルタイムで『ジョジョ』の各部を好きだった人が、現場で決定権を持つ世代になってきたというのは大きいんじゃないかと思います。10年ほど前は現場の若い人が「『ジョジョ』をやりたい」といっても会社のOKが出なかったらしいです。ところがこの数年で、そういった『ジョジョ』好きな世代が決定権を持つ立場になってきて、合わせてお客さんも自由になるお金を持てる年代になった。需要と供給がはまったという感じでしょうか。そこに、今の若い世代も「『ジョジョ』っていう面白いタイトルがあるらしい」と気づいてくれて、裾野が一気に広がった感じがしています。これだけの会社や人間が『ジョジョ』で仕事をやり

たい!!」と手を挙げてくれるようになったのは、荒木先生がそういう作品を描き続けてくれていたからで、ひとえに作品の力だと思います。そして描き続けていたから歴代担当が社内のあちこちにいた、というのも大きいですね。例えば「ジョジョ展をやりたい」といえば宣伝部には東がいて『ジョジョ』のテイストに合う会場を探してくれたし、WJには瓶子がいて、上のほうには椛島や佐々木がいて…、という具合に荒木先生と『ジョジョ』を直接知っている人が要所要所にいるからとにかく話が早かった。そういう良い状況がいろいろと重なったんですね。

──裾野が広がって、従来のファン層とは違う若い世代や女性が増えているのも驚きです。

★ただ、気配はあったんですよ。UJに届くファンレターを見ていると「親子2世代で『ジョジョ』ファンです」という声がチラホラあった。中学生くらいの女の子からのハガキで「お母さんが読んでいたから、私も好きになりました。お母さんは第4部が好きで、私は第5部が好きです」みたいなことがあって、僕らも「えっ!?」と驚くとともに、ムーブメントを作るのは女性で維持するのが男性という傾向がありますから「若い女子がいけるなら若い男子だっていけるかも?」という商売魂も出た（笑）。アパレルにしてもそうですね。2006年にユニクロとのコラボで荒木先生のイラストTシャツを出したんですが、僕らは「きっと年季の入った『ジョジョ』ファンが買うんだろう」と思っていた。ところが実は若い人が買っているというのが分かって、しかも、ものすごい売れ行きだという。その売れ方から、若い人たちは「読んだことはなくても、記号としては『ジョジョ』を知っているんじゃあないのか」「荒木イラストやスタンドを独特でカッコイイと感じてくれているのかな?」と気づかされた。例えば、スパイダーマンやバットマンというキャラクターはみんな知っているし、映画にも行くしフィギュアも買う。でも原作コミックは読んだことがないという人も多い。それと同じで『ジョジョ』という漫画は読んだことがなくてもスタンドやキャラクターは「なんかいいよね」って感じで受け止めてくれてるのかもしれなくて、そういう若い層がグッズを買ってくれるんじゃないか、もっとうまくいけば『ジョジョ』本編も読んでくれるんじゃないか、はまってくれるんじゃないか、というのはありました。もちろん当時は確証はなかったですけどね。

──結果的には、編集者としての読みが当たりました。

★でも、それは荒木先生の力ですよね。『ジョジョ』という長く続く作品にリアルタイムで食いついてくれ

キャラクターデザインは

た層がいて、若い人も絵柄も含めて独特でカッコイイと感じてくれたんでしょう。それに加えてフィギュアやアニメ、ゲームといった各ジャンルで『ジョジョ』好きが決定権を持つ年代になり、同時に集英社内のあちこちに歴代担当が何人もいてくれた。環境がすべて整っていたんでしょうね。もちろん荒木先生はそれを狙っていたわけじゃなくて、結果的にこうなったんですが。とても不思議なんですけど荒木先生ってそんなふうに、色々なものを呼び込む才能を持っているとしか思えないんですよね。大きなことも小さなことも含めて偶然という感じでもなく、先生自身が「自分はこうしたいんだ」という方向に本能的に向かって行くと、常に周囲が呼応していくような。途中で描くのをやめたりサボったりせずに、先生が「こうだ!」と思った作品を描き続けた結果が今という状況なんだろうなと。ひとえに「荒木飛呂彦だからこそ」というのがあると思います。褒め過ぎかもしれないけど(笑)。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

荒木飛呂彦だからこそ

——話は前後しますが、先生の第一印象はどうでしたか。

★意外にすごく気さくな人だな、と(笑)。最初にお会いした時、僕も御多分に漏れず「先生は岸辺露伴みたいに怖い人なんじゃないか」「馬鹿だと思われて一言も口きいてくれなかったどーしよー」と緊張していて、まともにしゃべれず背中に汗ビッショリでしたけど(笑)。そのあと、僕がいた「MANGAオールマン」という雑誌が2002年に休刊になって、UJに異動したんですが、先生がちょうど第6部を終えて少し時間ができた時に『変人偏屈列伝』シリーズの「ウィンチェスター・ミステリー・ハウス」「腸チフスのメアリー」の2本を描いていただきました。それが2003年頃ですね。「先生の体があいた時に、『デッドマンズQ』の新作も短期集中とかでやりましょう」という話もしていて、先生も「アイデアもいろいろあるし、吉良を描きたいんだよね」ということでした。そういえば当時、忘れられないことがありました。「MANGAオールマン」が休刊になって、僕の異動先もまだ決まってない時のことです。当時の部長が先

生に「MANGAオールマンはなくなるけど、他にも読切を描く場所はたくさんあるからお願いします」という話をしたら、先生が「僕は井藤君が行く編集部で描きますよ」と言ってくれて。僕は感動して、「この人のことは絶対に裏切っちゃだめだ」と思ったんですね。社交辞令で言ってくれただけかもしれないけど、僕は救われました。本当に有り難いと思っています。

――先生がWJに第6部や第7部を連載されていた頃も『ジョジョ』の話は聞いたりしていましたか?

★第7部の『スティール・ボール・ラン』の連載直前の頃に先生から話を聞いたりはしていました。あの時期は荒木先生的にも悩んでいたんだろうなぁというのが僕の正直な印象ですね。ちょうどWJ編集部から「『ジョジョ』というタイトルを外して新作で」と頼まれていた頃だと思います。『スティール・ボール・ラン』が始まってからは、原稿を描きためるという変則的な仕事の仕方だったので「ペースが崩れた」ということも言っていました。週刊連載のような明確な締切がない中での仕事でしたから。自分が描きたい絵や構成に対して、ページ数が足りないという思いもあったんじゃないかな…。そんな時期に僕とふたりで食事をしている時に「ちょっと疲れたから、週刊で描くのはもういいかな」とポロッと言ったことがありました。

色々なものを呼び込む才能を持っている

「UJで描けないかな。月刊誌ならひとかたまりで描けるし。大自然とか馬も見開きの広い空間で表現できるしさ、WJの31ページだと窮屈なんだよね」という話も出ましたね。もちろん、僕としてはUJで描いていただけるなら大歓迎なんですが、まずはWJ編集部の意見を聞くのが筋なので、相談しに行きました。それと当時は「月刊少年ジャンプ」もあったんですが、先生にそこを聞いたら「知ってる人いないしさあ」と。

――人間関係を重視される?

★でしょうね。それで、いろいろとWJ編集部と調整して、話がまとまってUJで描くことになったわけですが、その時に先生が「で、UJでは何を描こうか。『デッドマンズQ』を描けばいいの?」と(笑)。

――そこは『スティール・ボール・ラン』の続きですよね(笑)。

★『スティール・ボール・ラン』はWJの連載分をまとめた第4巻のラストが「俺たちの戦いはこれからだ!」みたいな感じで終わっているでしょ? あれは先生的には、読者に一応の完結として見てもらってもいいように描いていたようですね。僕としてはもちろん『スティール・ボール・ラン』を読みたかったので、

「やっぱり『ジョジョ』というタイトルをつけたい」

UJでも『スティール・ボール・ラン』をやりましょう、と。その時に荒木先生から言われたのが、「やっぱり『ジョジョ』というタイトルをつけたい」と。それでUJ掲載時から第7部と謳ったわけです。荒木先生の中では「やっぱり『ジョジョ』なんだよね」「『ジョジョ』って部が代わるごとに新連載みたいなものなんだよね」と言っていました。シリーズタイトルのようなイメージなんでしょうね。

――映画の『007』シリーズのようなイメージでしょうか。

役者や舞台や年代が変わっても、やはりひとつのシリーズ。それと同じですね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――第8部『ジョジョリオン』は立ち上げから関わっていますね。



★第4巻のラストページ。「このまま突っ走るぞ!」というジャイロの台詞通り、物語はそのままウルトラジャンプへと引き継がれた。

★『スティール・ボール・ラン』の連載中から、「次は杜王町にしたい」とずっと言ってました。実は当初は第4部の杜王町を想定していて、途中で「1970年代が舞台なのもいいね」みたいな話も出ていました。荒木先生の少年時代ですね。ただ、それだと携帯電話やメールが使えないとか、物語上の制約も増えるので、逆に近未来を舞台にしようかというアイデアもありま

本質をとらえる力
荒木理論

した。

――『ジョジョリオン』は主人公像が異色ですね。記憶喪失で睾丸を4つ持っている。

★僕個人の印象なんですが、2011年の東日本大震災のあと、日本中の人々がある種の喪失感を抱いていたと思うんです。僕たちはこれからどうしていけばいいのか？ そもそも日本人って何だろう？ そういったことも含めて単純に「敵がいて戦って」というだけでなく、「自分とは何者なのか？」を探しにいくのがテーマなのかな、だから記憶喪失なのかなとは思いました。荒木先生自身はそういうテーマを表に出すのが嫌いな人なので、ハッキリ語らないでしょうけど。荒木先生は直感的に、物事の本質をとらえる力がすごく鋭い漫画家さんだと感じています。以前、雑談の中でいじめ問題について話したことがあったんですが、先生は「いじめは良くないとか、やめましょうとだけ言うのは良くないと思うんだよね」と。「戦争にしても、世界平和は理想だけど、現実には戦争は起きてしまう。いじめも現実にはあるんだから、大事なのはいじめにあった時にどう向き合うかを教えてあげることじゃあないか」「きれい事だけ言われたら、子供はキツイと思う」と。その通りだと思います。先生も子供の頃にきれい事を色々と言われた時、「映画館でホラー映画とかを見ると安心した」って言うんです。何故かというと、そこでは当たり前ですが残虐なことが起きるわけで、でも主人公たちがどう向き合うかを見せてくれる。「嘘がない空間だったんだよね」ということを言っていて、この人はすごいと思いました。「ホラー映画を見ると安心する」っていう部分だけを切り取ると単なる危ない人になるんですけど（笑）、真意を紐解いていくと実は本質を突いているんです。これも以前の話ですが、大学生のフリーペーパーの取材で「就職とか色々と決断しなくちゃいけない学生に大事なことは？」という質問を受けたときの答えが「美しさっていうのかな。そういうのが大事なんですよ」って。聞いたほうは「え？」ってなったと思いますよ（笑）。で、どういう意図なのかを聞いていくと、「自分にとって、美しいとか良いと思えることを判断できる審美眼を学生時代に磨いてほしい。その判断ができれば、決断もできるんですよ」っていうことなんだと。そういった荒木理論に『ジョジョ』は裏打ちされて描かれているんですよね。



第8部
ジョジョリオン

PROFILE

★やまうち・さとし
2001年入社。「週刊ヤングジャンプ」を経て「ウルトラジャンプ」編集主任（2013年9月現在）。好きなキャラクターとその理由は「自分の担当部分以外で考えて川尻早人。非力だけど機知で勝ち抜くキャラが昔から好きなので、スタンド使いでもないのに吉良と渡り合う彼に痺れました」。

★添JO員

山内智

——担当になったタイミングは、『スティール・ボール・ラン』のどの辺りからでしょうか。

★2011年2月に新担当として先生に紹介されました。『スティール・ボール・ラン』のラストも見えていた時期ですね、前任の井藤からの引き継ぎも兼ねて『スティール・ボール・ラン』の打ち合わせには2回ほど同席しましたが、もうラストまでの流れは決まっていたので特に口出しすることもなく、「先生はこういうふうに打ち合わせをしているのか」という確認をしていました。

——その後、第8部である『ジョジョリオン』に突入するわけですね。

★『ジョジョリオン』第2話くらいまでは井藤と一緒に打ち合わせに行ってたかな。話題を呼んだ『ジョジョリオン』というタイトルはその頃に荒木先生から出たものです。ちょうど作家デビュー30周年と『ジョジョ』25周年の期間が始まった頃ですから、『ジョジョ



ジョリオン』第2巻の先生のコメントにもあるように「記念碑的な意味も込めて」のようです。覚えやすくてキャッチーで、意味は分からなくても一言で言えて、『ジョジョ』性が高い感じもある、良いタイトルだと思います。杜王町が舞台となることは僕が担当する前から決まっていたんですが、担当になってから変わった部分もあります。ひとつはやはり東日本大震災ですね。「杜王町を舞台に描く以上、震災に触れないわけにはいかない」とおっしゃっていました。また、時代設定までは決まっていなかったのですが、必然的に震災後、つまり現代が舞台となりました。

――杜王町に関しては、数年前のインタビューでも「あらためて描きたい」といったお話が出ていました。

★『ジョジョリオン』の舞台が杜王町になったのは、ある種の必然かなという感じはしています。第3部でエジプトまで旅した後に、第4部は先生の故郷である仙台をモデルとした杜王町を描きましたよね。今回も第7部がアメリカを旅する物語でしたから、それに続く第8部で杜王町というのは、故郷に帰る安心感みたいなものがあったんじゃないかと思うんです。作業の面でも、地理的にも時代的にも異国のアメリカと違い、ご自分の中の原風景を現代的に組み立てていけばよい杜王町は、サスペンスやバトルの描写により集中できる舞台なのではないでしょうか。

――第4部の杜王町と第8部の杜王町は、名前は同じですが違う場所でもありますね。並行世界的なものですが、第4部の杜王町にしようという案は無かったのでしょうか。

★僕が知る限り、そういう話はありませんでした。第4部を読んでいる読者がニヤッとできるような設定があったりしたらいいよね、という話はした記憶がありますが、そのまま同じ街を舞台にするという話をしたことはないと思います。あ、でも「露伴はいてもいいかも」という話は、冗談交じりで話しましたよ。なにしろ時間が加速した第6部のクライマックスでも原稿を間に合わせた人ですから、時空を超えて存在する可能性がある（笑）。



★『ジョジョリオン』はウルトラジャンプ2011年6月号より連載開始。『スティール・ボール・ラン』完結の翌月号から開始というスタイルであった。

読者がニヤッと

ある日の打ち合わせで突然復活

——歴代の担当編集によると、荒木先生は連載をしながら先の展開を考えるタイプとのことですが、『ジョジョリオン』も同じでしょうか。

★同じですね。先々をガッチリ決めて描かれてはいません。だから予定調和にならず、続きが気になって仕方がない作品が描けるんだと思う。漫画はクライマックスに向かって螺旋を描いて展開するのが良い、という話を先輩から聞いたことがあるんですが、それで言うと『ジョジョリオン』は、まだ螺旋の大きさもスピードもはっきりとは分からない状態です。だからこれまでに登場したお話のパーツがフッと繋がると、ものすごい勢いでストーリーが展開していく可能性があります。逆にまだこれから新たな謎が現れ、螺旋の直径が大きくなる可能性もあると思いますよ。荒木先生の場合、どこかに行ったと思っていた設定や展開が、ある日の打ち合わせで突然復活してくることも多いので（笑）。『ジョジョリオン』のラストがどうなるのかという話も、先生からまったく出ていません。定助が何者なのかという、彼の謎を解き明かす物語にはなっていきますが…。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——2010年頃から『ジョジョ』の一大ムーブメントが発生しています。ここまで広がったきっかけは担当から見て何でしょうか。

★潜在的な人気はもともとあった作品だと思うんです。きっかけのひとつは、時を経て『ジョジョ』を好きな世代が様々なメディアで決定権のある立場になり、作品や商品、さらには先生ご本人のメディア露出が増えたから、というのがあると思います。もうひとつは、これも世代的なものがあるかもしれませんが、クリエイターをはじめとした、別ジャンルで活躍する発信力のある方々がその分野でトップに立ち、『ジョジョ』ファンを公言するようになったことです。彼らの作品のファンが「原点」を探った結果『ジョジョ』に辿り着き、新たなファンになるという、ジャンルや世代を超えた拡散があったのではないでしょうか。面白いのは、そういった『ジョジョ』好きの方々は、ただ「好きだからコラボしたい」というタイプではないんですね。皆さんご自分なりに、『ジョジョ』を咀嚼して消化し血肉とした上で、ご自分のアウトプットをされているんです。それができるからトップに立っている、

亜流の作品はまったく見当たらない

ということもあるんでしょうけど、『ジョジョ』ならではの特徴だと思います。それは漫画でも同じで、『ジョジョ』に影響を受けた作家はすごく多いのですが、そのままストレートに出す作家はいないし、実際に亜流の作品はまったく見当たらない。荒木先生ご自身が、他のカルチャーを創作のヒントに取り入れているのと相似形で、興味深いですね。

――ムーブメントに火が付いたとリアルに感じたのはどのタイミングですか？

★前任の井藤が担当した『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』が出版された2011年あたりですね。オールカラーの大判コミックスとはいえ、定価2800円の本が発売されて即日重版がかかったんです。想定を大幅に上回る売れ行きでした。ネットの掲示板で『ジョジョ』のセリフが扱われたりメディア露出が増えていたりと、漠然とした雰囲気を感じてはいましたが、具体的に意識したのはこの出来事です。『ジョジョ』がスタートしてから、20数年間かけて熟成されていたものが、一気に跳ねた、ということなんでしょうね。

――このムーブメントの大きな背骨となったのが、2012年に開かれた「荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展」ですね。先生の故郷である宮城県仙台市、そして東京の2ヵ所で開かれました。

★両会場とも、予想を大幅に上回るお客さんに来ていただけました。東京会場は約1ヵ月という長期の展示でしたが、実は企画立ち上げ当初は2週間くらいの予定だったんです。それでも、今だから言えますが個人的には一抹の不安を持っていました。すでに『ジョジョ』がいわゆる「ブーム」な状況で話題になっていたし、コミックスもすごい勢いで重版がかかっていましたが、開催する10月は休日の少ない時期です。原画展に来るほどのファンはやはり男性サラリーマンが中心だろうと読んでいましたから、例えば「平日の昼間に来てくれる人なんかいるんだろうか？」と。ところが蓋を開けてみたら平日の昼間でもチケットは全て前売りで、しかもかなり早い段階で完売。お客さんも若い女性からお子さんまで非常に幅広く、本当に驚きました。ご覧いただけない方もた



★30年に亘って描かれた原画の数々が展示された「ジョジョ展」。作品をリアルタイムで知らないはずの若い女性客も多かったことは、関係者にとって驚きのひとつだった。

運を持っている

くさん出てしまい、それは本当に申し訳なかったのですが…。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

―2011年には雑誌「SPUR」10月号の別冊付録でGUCCIとのコラボレーションが実現し、それが縁で2013年には荒木先生のイラストがGUCCIの全世界直営ショップのウインドウデザインにも選ばれました。

★ＧＵＣＣＩに関しては90年を超える歴史と伝統があり、ハイクラスの方に愛されている超一流のブランドです。荒木先生のイラストがショップのウインドウビジュアルとして使われたのは、先生の絵がハイクラスのお客さんに価値が理解されるものだと認められたからでしょうね。あれだけのハイブランドが全世界で展開するウインドウビジュアルを、『ジョジョ』というひとつのキャラクターに賭けるというのは大変な決断だと思います。これは荒木先生の絵が持っている力なんでしょうね。そして２０１３年6月にはＧＵＣＣＩの協力で、イタリアのフィレンツェで原画展が開かれました。

―2012年には雑誌「SPUR」の増刊ムック「ジョジョメノン」も発売されています。この本で荒木先生は、承太郎のイメージの源流でもある俳優のクリント・イーストウッド氏とも会いましたね。

★あんなに舞い上がる先生を見たのは初めてです(笑)。例えば写真撮影の時は、カメラマンからお互いに見つめ合うポーズをオーダーされて「いやー！ 眩しくて見られないですよー！」という感じ。本当に子供のように喜んでいらっしゃいました。日頃の打ち合わせでも、イーストウッド氏への敬意を聞いてはいたんですけれど、「本当に憧れの存在なんだな、喜んでもらえてよかった！」と、僕まで嬉しくなりました。もちろんイーストウッド氏は簡単に会えるような方ではないんですが、いくつかの幸運がタイミング良く重なって実現しました。歴代担当や関係者ともよく話すんですが、荒木先生は本当に「運を持っている」としか思えないんですね。「幸運が重なって」と言いましたがイーストウッド氏が興味を持ってくれたのもルーヴル美術館やＧＵＣＣＩとのコラボレーションという実績があったからだと思うし、それらも先生がずっと『ジョジョ』を描いてきたことの結果であって、単なる幸運ではないと思っています。

のジャンル

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――少々ベタな質問ですが、荒木先生が似ている『ジョジョ』キャラクターは誰だと感じますか。やはり岸辺露伴？

★キャラクターそれぞれの、いろんな面をお持ちだと思うんですよね。意外なところでは、確信を持って行動し、進んでいくという点で第7部のヴァレンタイン大統領みたいな面もあるし。先生の人柄についてだと「公序良俗に反することはやらない」という部分は僕も印象が強いですね。例えば荒木先生は絶対に信号を守るんですよ。幅の狭い道で、深夜の車がまったく走っていないような時間帯でも、先生は赤信号であれば渡らない。人が見ている見ていないは関係なく、自分の中で後ろめたいと思うことはしたくないんじゃないかな。

――漫画の執筆に加え、原画展、様々な取材や関連本の発売など、2011～2013年の荒木先生は相当な忙しさではなかったでしょうか。

絶対に信号を守る

★色々な場所に行ったり、イーストウッド氏をはじめ様々な人と会えたりと、「普段ではできない経験を楽しんでいる」とおっしゃってはくださいましたが、ものすごくお忙しかったと思いますよ。あれほどお好きな映画を観られない時期があったくらいですから…。担当してまだ2年と少しですが、僕ほど荒木先生にお願いごとをした担当っていないんじゃないですか（苦笑）。でもそんな無茶振りにいつも応えてくださって、頭が下がるばかりです。先生は人一倍漫画を描くことに労力を投入する方ですが、それは必ずしも原稿用紙と向き合うことだけではないんですね。映画を観たり美術品を見たり、人と会って話したことなどを作品に投影させていくことを含めての「人一倍の労力」。すごい才能だと感じます。作家さんに限らず、たいていの場合は「仕事をしなきゃ」という決意の中で色々なことを進めると思うのですが、先生の中にはおそらくそういう意識があまりない。漫画を描くためのあらゆる才能を持っている人で、これはもう荒木飛呂彦というひとつのジャンルだと僕は思っています。

荒木飛呂彦というひとつ

段階を踏んでWJではない何処かに移籍する（瓶子）

★読者にたっぷり読んでもらいたいっていう気持ちは大きくなっていましたね。毎週19ページのWJだと、もうページが足りないんですよ。19ページの呪いっていうか（笑）。WJでの『スティール・ボール・ラン』は特殊な連載形式を試させてもらったけど、逆に仕事のリズムが崩れてしまって自分には全然合わなかった。だけど月刊誌なら1話が45ページくらいなので山場を2回、自由な場所に作れるからサスペンスもタップリと分かりやすく描ける。それで「これだったら月刊誌に行ったほうがいいな」と思ったんです。

P099 下段

デザインやビジュアルの面白さ（齊藤）

★シルエットは大事ですね。以前、電車の中でWJを読んでいる人がいて、遠くからそれを見てたのにキャラクターのシルエットだけで「あの人、超人気漫画の『○○○』を読んでる！」って分かったんですよ。そこはスゴイと思ったし、「それに負けちゃだめだ！」って思ったからシルエットはかなり気を遣います。他の作品の良い部分は取り入れないといけないですね。

P105 上段

「（ウルトラジャンプでは）『デッドマンズQ』を描けばいいの？」（井藤）

★え〜、こんなこと考えてたかなあ（笑）。僕はUJでも『スティール・ボール・ラン』を描こうと思ってましたよ、だってゴールさせないと（笑）。ただ、実はWJの時もUJの時も、「本当にゴールできるのか!?」と自分自身が不安な部分はありましたね。最初にハッキリとコースも最終地も見せちゃったので、破綻したら後戻りが出来ない物語でしたから。最初に全体を見せてあえて自分を追い込んだんだけど、ニューヨークにゴールできて本当に良かったぁ（笑）。

P115 下段

先生の絵がハイクラスのお客さんに価値が理解されるものだと認められた（山内）

★ファッションに行けたのは僕にとって大きいですね。ファッションはクールさが魅力なわけで、例えばモデルの写真もわざと目線を外したりしてる。でも少年漫画は正反対で、キャラの目線はビシッと読者に向けなきゃいけない。その正反対の水と油のところに僕を呼んでいただけたというのがびっくりだし、有り得ないことだと思っていたので、自分の中では画期的ですね。

P122 上段

荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展 記録

画業30周年&『ジョジョ』25周年を記念した一大イベント、それが「ジョジョ展」だ。また、GUCCI主催によるイタリア・フィレンツェでの原画展も併せて紹介する。

荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展

HIROHIKO ARAKI JOJO EXHIBITION 2012

in S市杜王町

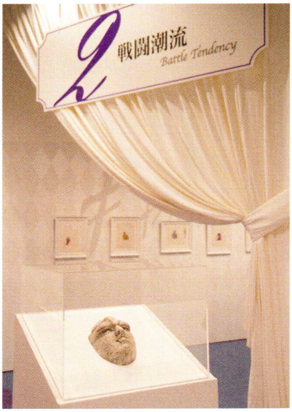
2012.7.28 - 8.14 in SENDAI

会場は宮城県仙台市にある「せんだいメディアテーク」で開催期間は2012年7月28日(土)～8月14日(火)。来場者は約3万人。「白」をイメージカラーにして各部ごとに原画を展示、特に第4部は「S市杜王町」での開催とあって大きく展示された。



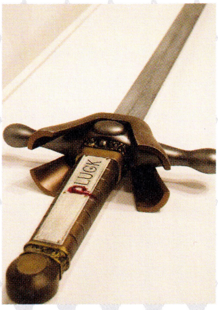
上／七夕祭りがモチーフのキービジュアル。飾りの中にはクレイジー・ダイヤモンドが。



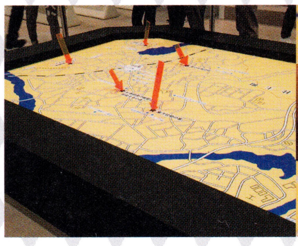


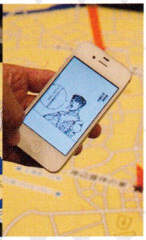
上と右／会場風景。壁や通路には荒木作品独特の描き文字がデコレーションされ、アクセントのカーテンが随所に張られた。下／原作各部の小道具類も新規で造り起こされた。写真のブラフォードの剣や等身大・岸辺露伴フィギュアのほかに弓と矢、石仮面なども。右下／原作通りに完全再現された岸辺露伴のデスクで、荒木先生が記念写真。下／AR技術を使った杜王町マップも。











荒木飛呂彦原画展

ジョジョ展

HIROHIKO ARAKI JOJO EXHIBITION 2012

2012.10.6 - 11.4 in TOKYO

東京展の開催場所は東京・六本木ヒルズにある「森アーツセンターギャラリー」。開催期間は2012年10月6日(土)～11月4日(日)。来場者は約10万人。会場は「黒」を基調としたデザインになっており、原画も総数200点以上を展示。また、作品の世界観を表現した立体物も多数展示された。



上／東京展のキービジュアル。承太郎＆イギーと富士山という意外な組み合わせが強く印象に残る。





右、上／展示スペースは各部のイメージに合った装飾が施された。第1部では巨大な単行本第1巻のオブジェ、第2部ではインタラクティブ映像技術を応用して「来場者の動きに合わせて波紋が広がる」という凝った演出も。下／第6部の展示スペースは刑務所をイメージしていた。



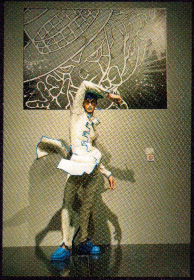




上／等身大の承太郎＆DIOフィギュア。これに会場が用意したiPadをかざすと画面内でスタープラチナの「オラオラ」VSザ・ワールドの「無駄無駄」が！　左上／柱の男サンタナも等身大。下／ブチャラティ＆スタンド能力も等身大で表現。そのほか、エイジャの赤石、弓と矢といった大小様々な造形物も展示された。

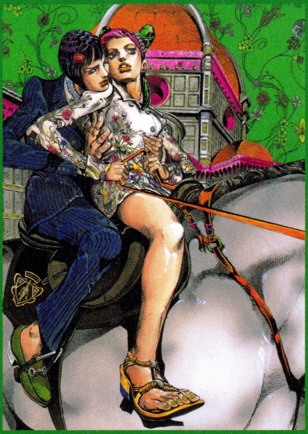












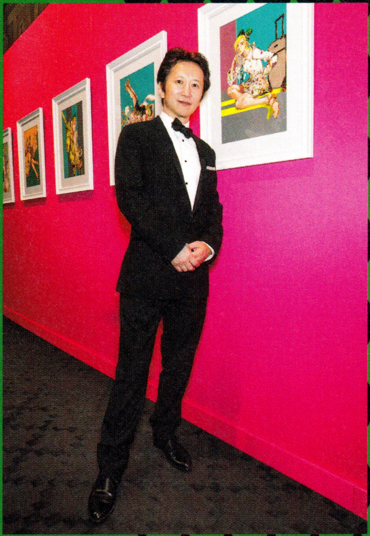
HIROHIKO ARAKI
AN EXCLUSIVE MANGA EXHIBITION IN FLORENCE

2013.6.28 - 7.14

イタリア・フィレンツェにあるGUCCIショールームにて、2013年6月28日(金)～7月14日(日)まで開催。会場は15世紀に建てられたGUCCI所有の歴史的建造物で、かつてはGUCCIの工房としても使われていた場所だ。会場では第5部以降のカラーイラスト原画を中心に約60点が展示された。

左／キービジュアル。徐倫とブチャラティは、部をまたいでの共演となる。





右／GUCCIのために描いたイラストを前にした荒木先生。オープン前日のレセプションにて。上／会場の入り口。この建物内部は通常は一般公開されていないが、今回のために特別に使用されることになった。下／会場の一部で、天井や壁には伝統的なフレスコ画が。漫画というポップカルチャーとGUCCIの伝統がコラボレーションした場所といえるだろう。



荒木飛呂彦 カバーコメント集 ACT.3

「ACT 3」では第7部「スティール・ボール・ラン」が始まる第1（81）巻から第7部完結の第24（104）巻までと、第8部『ジョジョリオン』第1（105）巻から第4（108）巻までを収めた。

43歳（2003~2004）

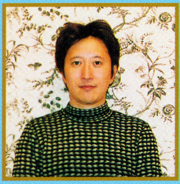


『スティール・ボール・ラン』第1（81）巻

このSBR（スティール・ボール・ラン）は、実質的に「ジョジョの奇妙な冒険」PART7として描かれているものですが、初めてここから読み始める読者のために、あえてそのことを強調したくないと考えました。

しかし一方で、漫画家の創作に対する姿勢の問題として、過去の作品を完全に葬り去ってまったく新しい作品を描こうというのは、良くない態度だとも思ったのです。作品のテーマというのは、過去から連続していなくてはならないのです。

（SBR（スティール・ボール・ラン）2巻に続く）



第2（82）巻

季節がうつり変わるように、あるいは人が人生を歩むように、作品のテーマというものも過去からの延長線上になければと思うのです。断ち切ることは、してはいけないと考えます。

SBR（スティール・ボール・ラン）には「ジョジョの奇妙な冒険」に登場したキャラクターに似た名前の人物が出て来ますが、彼らの先祖と考えるかあるいは、パラレル・ワールドと考えてください。

テーマは同じ人間讃歌。人生という奇妙なレースを登場人物たちはどう突き進むのか⁉

44歳（2004）



第3（83）巻

最近「球体」関係でスゴイな、と思ったものは、エクササイズとかに使うボールなんだけど、直径70～80センチくらいの中に空気が入って化学樹脂でできてるもので、それにただ座ってボヨンボヨンとジャンプするだけでなんと、腹筋がついて背骨とか骨盤の歪みがとれるっていうのだ。それだけの動きなのにどういう原理でそうなるのか、感覚的に理解できない。疑り深い性格だが、プロスポーツ選手が使っているトコ見て、本当らしいと納得した。内臓も強くなるんだと。

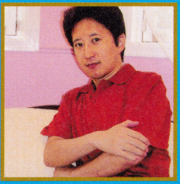


第4（84）巻

「球体」関係の事でスゴイ、と思った事は、「合気道」のビデオを見ていて、袴姿の若い男が正座してる60歳くらいの男（達人らしい）の頭をガシィッと両手で（なぜか）ワシ掴みする。60男は「フン！」と頭を球の動きで首をふる。すると若い袴男は2メートルくらい宙にふっ飛ぶのだ。

「ヤラセでワザと飛んだのか？」って思うほど軽々と頭で人を投げ飛ばしたのだ。1万円以上するビデオなのでウソとは思えないし、一度投げ飛ばされてみたい。（柔らかい場所で）

45歳（2005~2006）



第5（85）巻

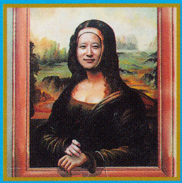
1980年の暮れに、手塚治虫先生に握手していただいた時、「うわっ漫画家の『手』ってすごい柔らかくてフワフワだぁ。」と思った。また空手の大山倍達（おおやまますたつ）先生と握手させてもらった時も「ゲッこんなフワフワの手でビンとか砕くのかぁ」とも思った。そしてつまり「達人」ていうのは、柔らかい手をしていなければならないんだなぁと決めつけた。ぼくはあんまり「柔らかいっスねぇ！」って言われた事ないけどきっとジャイロの手はフワフワだな。

45歳(2005~2006)



『スティール・ボール・ラン』
第6(86)巻

よく女性とかに言われる事が多いんだけれど、「誰それに顔似てるよね?」とか言われたりしないでしょうか? 僕は昔よく「ジェームス・スペーダー」というスターゲイトとかに出ていた俳優に似ていると言われました。最近ではダ・ヴィンチの「モナリザ」とか言われたし、プリンスの「1999のジャケット」に似てるとかも言われました。その他言われた事のあるもの「ジャッキー・チェン」、「田村正和」、「犬」、「馬」、「雲」、「自動車」、手塚治虫のヴァンパイアの「ロック」など。全部「?」です。



PHOTOGRAPHED BY M.K.

第7(87)巻

わたし(飛呂彦)も気付いたら40代半ばになってしまっていて、仮に人生70歳とか80歳まで生きるとしたなら、とっくに折り返し地点を過ぎてしまった事になる。で、ちょっとこムズかしい事を書くけど、最近良く考えるのは、自分はこんなんでいいのか? という事だ。自分は「正しい道」を歩いて来ているのだろうか?「納得」する事が必要で、ジャイロもジョニィも「納得」する為にこのレースに出てるわけで、それがこのマンガのテーマってわけで……。(8巻に続く)



第8(88)巻

「正しい道」とはなんだろうと思う。

愛とか正義を願う気持ちを持つあまり、間違った道に迷い込んだらどうしようと思う。

それが正しいのか誤った道なのか、どうやって「2つ」を見分ければ良いのか? 誰か教えてくれるというのか? 愛する気持ちゆえに愛する者を傷つけてしまったら、どうやってそこを抜け出せば良いのか? ジャイロとジョニィも、レースに係わる者は全員、その状況下にある。「祈り」しか方法はないのか?

46歳(2006~2007)



第9(89)巻

この数年で最高だと思う映画は、マイケル・マン監督の一連の作品(「インサイダー」とか「コラテラル」)と、ジェイソン・ボーン シリーズ、そしてTVの「24(トゥエンティフォー)」だ。主人公たちが全員プロフェッショナルで、躊躇なく行動する点、その意志には迷いがなく、「善」だとか「悪」だとかの区別を超越している。そこには人間存在の深い何かを感じる。主人公たちの思いを考えると涙が出て来て、超クールな作品なのに熱く感動する。BEST1は「ヒート」。



第10(90)巻

たまたま貰ったんだけど、仕事場に水着(スウィム・スーツ)ガールのカレンダーが飾ってあるのね。つまり12枚の女の子の写真があるのよ。イヤらしくないやつよ。月が変わる度に一枚めくるでしょ。これがさあ、その時、何かもの悲しい気持ちになるのよ。「さよなら、9月の女の子。もう会えないんだね。」とか思ってしまうのよ。『ベリッ!』(カレンダーを破く音)で、「10月もいいねえ!」とかすぐに裏切って思って。……で何が言いたいのかというと、「一年は早いな」という一言よン。



第11(91)巻

最近良く考える事は「数字」について。たとえば「お金の数字」。少ないよりは多い方がいいと誰もが思っているけど、ある数を越えて多過ぎると、なんか不幸をしょい込む雰囲気がするし、万人が恩恵を受けてる発明の「自動車」も、数が増え過ぎると逆に不便だし、気象にまで影響が出て来ている。

そして生命もひとりひとりはとても大切なものだが、これがもし「人口100億人の国」がこの地球上に出来上がったら。う~む、相当恐い。

47歳(2007~2008)



第12(92)巻

自分の中に「怒の季節」というのがあって、なんか妙に世の中とか規則とかに怒りがわいてくる時期がある。その季節を過ぎると逆に「イイんじゃあないのォ♪」とか同じ事に対して思ったりする。

最近ではDVDで、「T(テキサス)・チェーンソー・B(ビギニング)」というタイトルと「T(テキサス)・チェーンキラー・B(ビギニング)」というホラー映画が同時に出て、間違って買ってしまった。(オイッ!)

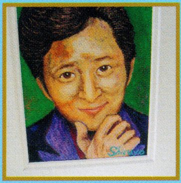
これが「怒の季節」をはずれてると、オモシロソーなホラーが2本出てとてもウレしい!になる。



第13(93)巻







Painted by S.Y.

第14(94)巻

「人馬一体」って言葉が良く歴史小説とか、競馬の雑誌で見かけたりするけど、乗り手が馬の動きとまるで同化するようになじんで走れる事をいうのだそうだ。

馬に乗ってるジャイロ達を描いてる時、なんかその事が、ぼくは馬には乗らないんだけど少しわかる気がする。

どの絵とは具体的には言えないけど、バシッと決まったように描けた気がする時があって、馬に乗った人間が絵画的になじんで気持ちいいのよ。きっと人と馬は生物学的(?)に相性がいいんだと思う。

48歳(2008~2009)



第15(95)巻

なんかどうも、人様に怖がられてるみたいで、インタビューとかで初めてお会いした方々に「あぁ、緊張しました」とよく言われる。それがかなり悩みだ。かつて描いた「岸辺露伴」というキャラと僕がダブってるイメージみたいで、何か身構えられる。僕は違います。

仕事中、インクやケシゴムのカスがお茶の中に入っても「まあ、いいや飲んじゃえ」っていう性格(体質?)です。

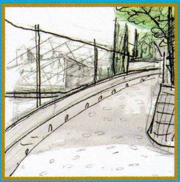
本当「荒木に会うと癒されるなぁ」って言われたい。心の修業が必要っぽい。



第16(96)巻

ホラー映画が3度の飯より大好きで。B級、チープなほど大好きで、敬意を表して観るし、世界観は心が落ち着く。

だが、ホラー演出的にどうしても許せない事がいくつかある。(その①)携帯かけようとしたら圏外。もしくはバッテリー切れ。(その②)弾丸(たま)が少ないっつーのに、やたら撃ちまくりやがって、肝心な時に弾丸(たま)切れ。(その③)主人公の背後へカメラがゆっくり寄って行って、主人公がふり返ると誰もいない。なにもいないならそーゆーカメラやるなぁー。ゆ、許せん。滝に打たれて出直して来い。



第17(97)巻

『月の沙漠を♪』って歌あるじゃないですか。子供の頃、僕が歌うのを涙を流して聴いてくれる友人がいて、そいつの事、どういう感覚なんだ?って思ってたんだけど、歌じゃあないけど自分にもあった。それは風景なんだけど、カーブしている坂道でそこに『バックネットがある坂道――たとえば学校とか』ヤバイ。国内でも海外でも、その条件の坂道に出くわすと、ノスタルジィーっていうのか、涙が出て泣いてしまう。理由はわからないけど、とにかく泣きながら写メる。

49歳(2009~2010)



『スティール・ボール・ラン』
第18(98)巻

この『SBR』(スティール・ボール・ラン)を描いていて、登場人物たちの共通点が見えはじめていますが、それは全員家に帰りたがっています。というか帰る場所と帰る意味を探しています。それは故郷のあるジャイロでさえ。登場人物の中でそれを探せたのは、今のところ「マウンテン・ティム」だけ。『SBR』(スティール・ボール・ラン)を描いてる作者自身も執筆していて何が過酷かというと、本当このレースから家に帰りたい。でもまだ帰れません。キャラクターたちが故郷に帰る意味を探せるまでは。



第19(99)巻

若い人に忠告します。『木登り』のマネは絶対にしてはいけないし、やるなという事をするのはもっといけません。もし東京都内で木になんか登ったら、職質か通報されること間違いなしだし、登るのはいいけど今度は降りれなくなったりして、バカには登れません。股関節痛めたり、すりムイたり、死んだり、だいたい人格疑われるので、登ったら軽く見下されます。登れる木を求めて地方まで旅に出なくちゃいけないし、でも、自然と一体になるという深い哲学が体で学べて良いのよ。



第20(100)巻

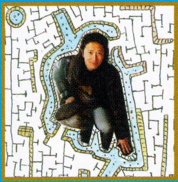
家の中に『ツケマツ毛』が落ちてて怖いんですけど……。長くてりっぱなヤツが廊下とか、洗面所に落ちてて、照明が薄暗いとメチャビックリするんですけど。もしかして動くんじゃあないかと想像して、まじ「ホラー」。(誰、とは名前特定できないんですが)つまんでゴミ箱に捨てると「なんで捨てるのよッ。まだ使うのに!」と、落とした事を棚に上げて本当にマジ激怒されるのが、さらにもっと怖いんですけど。

50歳(2010~2011)



第21(101)巻

実際にあった会話。——
「え? 『ワケルくん』ご存知ないんですか?」…
「? いえ。知らないですけど」
「本当ですか? ワケルくんですよ。ワケルくん!」
「なんでしょう? それ」
「本当、ご存知ないんですか? 分け目のついてるワケルくん。ものすごい人気なんですよ。先生は仙台出身でしたよね?」
「えー。はい。仙台ですけど……もしかして、滋賀の〝ひこにゃん〟とか奈良の〝せんとくん〟みたいなゆるキャラの事ですか?」
「わたし、この部署について以来の大反響なんですよ! 先生、プロの漫画家なのに、ご存知ないとは、ワハハハ」
「知るワケないだろ!」(オチ。ウマイ?)



第22(102)巻

「絵」を描くという作業は『無限』である。どこで終わっていいのか、一枚をずーっと描いてられる。そして『物語』。仮に「恋人」が穴の底に落ちている設定があって、そこに「嫌いな友人」を身替りに突き落とすと、その『恋人』は命が助かるという状況があったとしたなら、もし、あなたならどうしますか? 嫌いなヤツを突き落とす? それは「正しい行動」じゃない気がする。考えると『無限』に答えがでなくなってしまう。
ちなみに「絵」は、自分の「心」が終わりとした時が完成。自分勝手だと思う。

51歳（2011~2012）



第23（103）巻

最近、気になる事は「パフォーマンス」をする人たちの存在。その人たちの目的は『話題の中心になる事』が最大なので、本当にやりたい事の真実がいったい何なのか、わからない。その人たちは才能豊かなので色々な分野にまたがろうとして、ひとつの事を黙って極めようとしない。
芸能なのか政治なのか？ 救援活動なのかビジネスなのか？ 社会にとって非常に不気味な存在だと感じるし、相反する目的がひとつになるとは考えられない。



第24（104）巻

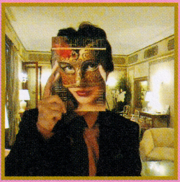
この24巻で、SBR（スティール・ボール・ラン）レースは完結します。皆様、心よりご愛読感謝申し上げます。
ここに登場する「聖なる遺体」とはいったい何者だったのでしょうか？ 最後までハッキリとは言いきりませんでしたが、「清らか」なものの象徴として描きました。「清らかさ」という感覚はとても大切な感覚だそうで、善悪の区別や、美徳や敬うべきものが、本能的に理解出来るそうです。「遺体」を手にする者は間違いなく「幸せ」になるのでしょう。



『ジョジョリオン』第1（105）巻

こんにちは。ジョジョの奇妙な冒険の『第8部』の開幕です。第4部に「杜王町」という架空の町を舞台にしたお話をかつて描かせていただきました。しかし、この『第8部』は、それとはまったくリンクしておりません。舞台は同じ日本の「杜王町」ですが、別の住人たちのお話です。ですので、『第4部』を全然読んでなくても、思い出さなくても、または記憶が無くても大丈夫なのです。
よろしくお願い致します。では、皆様のご健康とご多幸をお祈りしながら。

52歳（2013~）



第2（106）巻

「ジョジョリオン」という題名（タイトル）は、「・・lion」というのが「祝福されるもの」「福音」とか「記念の印」とか意味があるそうで、昔のギリシアとかの古い言葉だそうです。「ジョジョ」との合成語で主人公「定助」が、この世に存在する事の意味としてタイトルにさせていただきました。「ピグマリオン」というギリシア神話の悲劇の王様の名前や「エヴァンゲリオン」という日本のアニメ作品がありますが、関係があるかどうかは知りません。



第3（107）巻

究極の選択とかの話。たとえば「ニワトリが先か？ 卵が先か？」という問題があります。理論で考えていくと答えには、どこへもたどりつかず解決しない感じがします。
こういう時、僕の場合、とりあえず「答え」を自分で決めちゃいます（笑）。絶対に「卵が先」だな。……と。そうすると、物事や生活がスッキリして、うまく行く感じがして良いです。
何が言いたいかというと、ええーと。いったい何が言いたいんでしょう？ スミマセン。



第4（108）巻

「怒」の季節がやって来たのかもしれない。
早朝のテレビの天気予報で、『さて、本日の最高気温はこれから何度くらいになると思いますか？』と予報士が視聴者に質問して来て、そのままCMで引っぱるの！ これから何着て出かけようかと急いでる朝に、フザけるな。バカ。おまえは予報士なのか？ それともエンターティナーなのか⁉ クイズの司会者か⁉ あいまいなヤツは嫌いなのォ！ 最高気温はCM中にネットで検索したからもう必要ないのらァー。

To Be Continued



POSTSCRIPT

ここでは、雑誌掲載時の荒木先生の巻末コメントを一挙に掲載。
第6部「ストーンオーシャン」第1話から『ジョジョリオン』までの
毎回のコメントの他、読切作品巻末コメントも収めている。
なお、2000年以前は画集『JOJO A-GO! GO!』に収録されている。

2000

●大切なのは血筋を作品に残すこと。「彼女(ジョリーン)」は孤独だが先祖の心を受けついでいる。
(2000年「週刊少年ジャンプ」(以下、WJ)1号)

●アシスタントを募集します。詳しくは編集部の東氏に連絡してください。ヨロシク。
(2000年 WJ 2号)

●短編集「死刑執行中 脱獄進行中」が発売中です。スゴクイイ本なのでよろしければ…。
(2000年 WJ 3・4合併号)

●新年おめでとうございます。新千年紀の目標は携帯電話を買って使いこなすことです。
(2000年 WJ 5・6合併号)

●JF(ジャンプフェスタ)に出演した。緊張の連続。漫画家(じぶん)は人前に出るもんじゃないと心から思った。
(2000年 WJ 7号)

●毎年のことなのだけれど、今年もやっぱり1月になってから年賀状をかいた。
(2000年 WJ 8号)

●今度出る(2/25予定)JOJOの単行本がほぼ完成した。ちょっといい値段だけど、奇妙なカッコ良さは保証付きの内容です。
(2000年 WJ 9号)

●今年こそはトマトの栽培を成功させるために、冬の今から「土」を作る。やってやる!
(2000年 WJ 10号)

●桂先生からリトグラフの絵をいただいた。超ラッキー!仕事場にかざらせてもらった。
(2000年 WJ 11号)

●JoJoの単行本 JoJo A-GO!GO!。読者のみんなの驚く顔が見たくてこれを作ってみました(見られないけど)。
(2000年 WJ 12号)

●2月期天下一漫画賞の審査をします。一生懸命読ませていただきますのでヨロシク!
(2000年 WJ 13号)

●最近子供のころみたいによくころぶ。幸いケガはないんだけどちょっとカッコ悪い。
(2000年 WJ 14号)

●知り合いの歯医者は恐いからヤダといって自分の虫歯は治さない。なんだかズルイ。
(2000年 WJ 15号)

●DVDって別にいらないのにさ。これがなきゃ見られないっていうんだから仕方ない。
(2000年 WJ 16号)

●担当が東さんから井上さんに変わりました。東さん、長い間ごくろうさまでした。井上さん、これからよろしくお願いします。
(2000年 WJ 17号)

●最近聴いたCDの中では、メタリカの「S&M(シンフォニーアンドメタリカ)」というライヴアルバムが結構良かった
(2000年 WJ 18号)

●最近不安なことは、警察、自衛隊、…他にも頭の古い組織ってたくさんあると思う。
(2000年 WJ 19号)

●30年前に友達とタイムカプセルを埋めた記憶があるんだけど、どこか忘れてしまった
(2000年 WJ 20号)

●5/1発売のJC(コミックス)「ストーンオーシャン」の巻数は「1(64)」と表記される予定です。
(2000年 WJ 21・22合併号)

●泡がたたないシャンプーだなあと思ったらヒゲ剃り用だった。マジにヤバイ、ボク!?
(2000年 WJ 23号)

●トマトの苗を植えた。3つ植えて東側から「トマちゃん1号・2号・3号」と名付けた。
(2000年 WJ 24号)

●この間、突然植木屋さんがやって来て、「う〜む、このトマトは失敗する」と予告された
(2000年 WJ 25号)

●上野の国立西洋美術館に、フェルメールというオランダの画家の絵を観に行ってきた
（2000年 WJ 40号）

●アシスタントを募集します。希望者は、とりあえず担当編集の井上氏までご連絡を。
（2000年 WJ 41号）

●この夏一番良かった映画は「リプリー」、ずっと映画の中の世界にいたいって感じ。
（2000年 WJ 42号）

●『ジョジョ第6部ストーンオーシャン』第③（66）巻が10月4日（水）に発売されます。
（2000年 WJ 43号）

●「ヒマラヤに謎のピラミッド群が発見された」というニュースは一体どういうこと?
（2000年 WJ 44号）

●まだまだアシスタント募集中。希望者は、とりあえず編集部の井上氏までお電話を!!
（2000年 WJ 45号）

●トマト栽培結果報告。合計21個収穫。かかった費用1万6百円とすると1個いくら?
（2000年 WJ 46号）

●筒井康隆（つついやすたか）著『エンガッツィオ司令塔』。物を書くには、こーゆー「心意気」が必要と思った。
（2000年 WJ 47号）

●久々に幽霊を見た。エレベーターに乗ったら、一緒に乗った男が降りる時いなかった
（2000年 WJ 48号）

●赤い羽根の募金をしたら、赤い羽根はもらえず、代わりになぜか領収書をくれた…。
（2000年 WJ 49号）

●『ジョジョ第 6 部ストーンオーシャン』の単行本第④（67）巻は 12 月 4 日（月）発売です。
（2000 年 WJ 50 号）

●SUGIURUM（スギウラム）というミュージシャンの新作（ニューアルバム）（12/13発売）のCDジャケットを描いた
（2000年 WJ 51号）

●最近DISCO音楽（ミュージック）にはまってしまい、聴いてないと落ちつかない、K（カイリー）・ミノーグとか
（2000年 WJ 52号）

●最近、またなんかF1を観てる。新しいドライバーがどんどん出てきてるので面白い。
（2000年 WJ 26号）

●トマトの身長、現在「トマちゃん1号・2号・3号」ともに約40cm。みんな元気。
（2000年 WJ 27号）

●「魔少年ビーティー」と「バオー来訪者」の文庫コミックスが6月16日（金）に出ます。
（2000年 WJ 28号）

●現在発売中の音楽誌R・O（ロッキング オン）増刊「BUZZ（バズ）」7月号に僕のインタビューが載ってます。
（2000年 WJ 29号）

●またまたトマト情報。このあいだ、父から電話がかかってきて、「トマトの茎は間引かなくちゃあダメだ」とアドバイスされた。
（2000年 WJ 30号）

●植えて1ヵ月の時点で――ト…トマトの体長1m20cm。ついに小さい実をつけた。
（2000年 WJ 31号）

●最近お気に入りの映画監督といえばマイケル・マン。「インサイダー」とか「ヒート」の。
（2000年 WJ 32号）

●「ジョジョ第6部ストーンオーシャン」の第②（65）巻が8月4日（金）に発売されます。
（2000年 WJ 33号）

●だれかに剥いてもらわなきゃあ絶対に食べないものと言えば、「カニ」と「夏みかん」。
（2000年 WJ 34号）

●F1のクルサード、突然どーしちゃったの。速くなって。むかしは弱虫だったのに…
（2000年 WJ 35号）

●長雨と風でトマト1号の茎がボキッと折れた。1号が死んだ。身長175cmだった…。
（2000年 WJ 36・37合併号）

●ジョジョ第3部のフィギュアが出た。とても良い出来で、立ち姿がカッコイイと思う
（2000年 WJ 38号）

●絶対に、年を追うごとに夏が暑くなってきていると思う。本当、暑いのはニガテだ…。
（2000年 WJ 39号）

2001

●「ジェフ・ベック」のNEWアルバムが早くも出たので本当にビックリした。ウレシー
（2001年 WJ 1号）

●パンの袋とかを閉じてるビニールのテープ、あれ取る時ひっついてて何かイラつく。
（2001年 WJ 2号）

●今年最大の私的事件は、フェルメールという画家の絵を新聞で批評させてもらった事
（2001 年 WJ 3・4 合併号）

●テレビを観てたら、スゴイわがままな探検家が大蛇を捕まえに行くの。あいつ超好き
（2001年 WJ 5・6合併号）

●すごい不思議なんだけど、今までまだ一ぺんたりとも二千円札って見たことない…。
（2001年 WJ 7号）

●お陰さまで第6部開始から早1年。皆さん年賀状をどうもありがとう。いま返事を書いています。
（2001年 WJ 8号）

●ＪＣ(コミックス)第⑤（68）巻が2／2に発売されます。ウェザー・リポート&徐倫の表紙が目印!!
（2001年 WJ 9号）

●アシスタントを募集します。ヤル気ある人はとりあえず担当編集井上氏まで電話を!!
（2001年 WJ 10号）

●今年の目標は、モーターボート（4級）の免許を取ること。船酔いする体質だけど…。
（2001年 WJ 11号）

●最近やってるTVゲームはPS2(ピーエスツー)の「鬼武者」。敵を斬るバッサリ感がパワフル過ぎ!!
（2001年 WJ 12号）

●「ウェザー・リポート」の頭部、あれは帽子を被っているのです。髪型ではありません。
（2001年 WJ 13号）

●アシスタントを募集しています。希望者は大至急担当編集井上氏までお電話を下さいッ!!
（2001年 WJ 14号）

●「スネーク・ハンター」ってTV大好き。あーゆーワガママな探検家になってみたい。
（2001年 WJ 15号）

●「アンブレイカブル」って映画結構マニアックで良かったと思う。もう一回観たい。
（2001年 WJ 16号）

●夜中に道路でバットの素振りしてる練習熱心な人がいるんだけど、そば通る時恐い。
（2001年 WJ 17号）

●昨年の話だけど、一番はまったアルバムは、ザ・コアーズの『IN BLUE(インブルー)』。
（2001年 WJ 18号）

●JoJo第5部「ジョルノ」編がノヴェルになる。隠されたエピソードの謎が明らかに
（2001年 WJ 19号）

●モーターボート（4級船舶）の免許をとった。ヤマハの方々には本当にお世話になった
（2001年 WJ 20号）

●マンガオールマン誌に鬼窪浩久(おにくぼひろひさ)氏と10年ぶりのコンビ作。変人偏屈列伝②を描く。
（2001年 WJ 21・22合併号）

●某所の男子ロッカールームでオシリに「しっぽ」のあるオジサンを見た。5cmくらいの
（2001年 WJ 23号）

●親せきの小学3年生が小遣い貯めて買ったもの。“ルイ・ヴィトンのバッグ”……。
（2001年 WJ 24号）

●東京都内での映画の撮影に許可が出るそうだ。生ずる渋滞より芸術の方が大切だ。
（2001年 WJ 25号）

●ＪＣ(コミックス)「ストーンオーシャン」最新第7巻が6月4日（月）に発売。夢のCMにも注目を
（2001年 WJ 26号）

●隣人が家を建築中だったけど、マンガ描くより、早く建ったので帰る時ビックリ。
（2001年 WJ 27号）

●昨晩、自分がスプーンを曲げる夢を見た。別に特別な意味があるとは思えないけど
（2001年 WJ 28号）

●最近好きなファッション・デザイナーは、ロベルト・カヴァーリという人です。
（2001年 WJ 29号）

●斎藤環著「若者のすべて」(PHP) を読む。氏による分析観察力には敬服した。
(2001年 WJ 44号)

●今頃やっと気づいたんだけど『バイオハザード・コードベロニカ』は傑作ゲームだな
(2001年 WJ 45号)

●D・チャイルドとか米国のアイドルってどーみても大人にしかみえない。見た目が。
(2001年 WJ 46号)

●インターネットってさぁー本当調べたいものってないよな。それとも調べ方が悪い?
(2001年 WJ 47号)

●11月2日金曜日JC「ストーンオーシャン」第9(72)巻発売。F・F対ケンゾーから。
(2001年 WJ 48号)

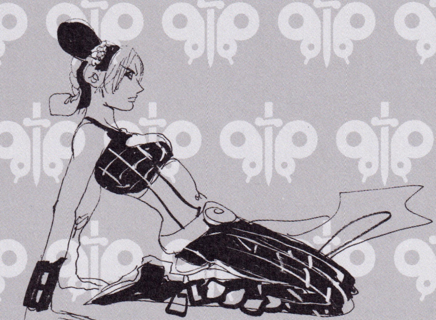
●大臣がTVで牛肉とかかいわれ大根食べたりするのマヌケじゃない?意味あるのかな
(2001年 WJ 49号)

●アシスタントを募集します。詳しくは編集部の担当者宛てに、問い合わせて下さい。
(2001年 WJ 50号)

●やばい。スニーカーのデザイン理解ができるようになった。もう去年のは履けないよ
(2001年 WJ 51号)

●アシスタントを募集します。ジョジョの背景カット数点と履歴書を編集部あてまで。
(2001年 WJ 52号)

●「Q. 日本に生まれて良かった事」A. いい温泉があること。でも懐石料理って、あれ今いち楽しくない。
(2001年 オールマン NO. 11『変人偏屈列伝』)



●この間誕生日だったのだけれど、今年はいつになくプレゼントを沢山もらった。なぜ?
(2001年 WJ 30号)

●最近、和食がちょっと苦手になった。とくに甘い味のお寿司とか。ゲロ吐きそー。
(2001年 WJ 31号)

●ボートの免許とったんだけど、やっちゃったよ浅瀬でスクリュー。ガリガリって。
(2001年 WJ 32号)

●クーラーでノドを痛めてしまった。東京の夏は本当に恐ろしい。無事乗り切れるか…?
(2001年 WJ 33号)

●「ペルソナ」、「女神転生」の金子一馬氏と雑誌「THRILL」誌において対談した。
(2001年 WJ 34号)

●猿の惑星のM・C・ダンカンという俳優のメイクは限りなく素顔に近いメイクでスゴイ。
(2001年 WJ 35号)

●今年も実はトマトの栽培してるんだけど、現在昨年よりスゴクて22コなっている。
(2001年 WJ 36・37合併号)

●昔楳図かずお先生のキャラ「たまみ」ってアダナつけた友人は今もそう呼ばれている
(2001年 WJ 38号)

●映画「A. I.」を観た。とても良かった。手塚先生の「鉄腕アトム」に似てるなとも思った。
(2001年 WJ 39号)

●JC『ストーンオーシャン』第8(71)巻、9月4日発売。バトル中の3人がカバー。
(2001年 WJ 40号)

●CDプレーヤーって「音飛び」たったそれだけでもう、ただのムカつくガラクタになる
(2001年 WJ 41号)

●来週一週休みます。「理由」はあえて教えません。44号からまた連載再開します。
(2001年 WJ 42号)

●休載
(2001年 WJ 43号)

2002

●来年の春にカプコンから出る「ジョジョの奇妙な冒険」のゲームの映像を見た。すばらしいものだ。とても期待している。
（2002年 WJ 1号）

●オールマン誌に『変人偏屈列伝』の新作読切をかいた。鬼窪浩久氏とのコンビ作。2002年初春掲載予定。
（2002年WJ 2号）

●いまさらだけど、映画「グリンチ」がおもしろかった。これは子供に見せてもいいタイプのサイコファンタジー映画だと思う
（2002年 WJ 3号）

●春にCAPCOMから発売される「ジョジョの奇妙な冒険 黄金の旋風」用イラストを2点描いた。5部のIは久し振り。
（2002年 WJ 4・5合併号）

●新年あけましておめでとう。2002年の自分の目標は、小型1級船舶の免許を取得すること。
（2002年 WJ 6・7合併号）

●ＪＣ「ストーンオーシャン」最新第10（73）巻が2月5日（火）発売になります。
（2002年 WJ 8号）

●次号の「ストーンオーシャン」は次の舞台となる場所への取材のため、お休みします。第11号より再開する予定です。
（2002年 WJ 9号）

●休載
（2002年 WJ 10号）

●大好きな映画監督はマイケル・マン。新作の「ALI」（モハメド・アリの伝記）を早く見たいと思っている。
（2002年 WJ 11号）

●ゲーム「ジョジョの奇妙な冒険〔黄金の旋風〕」のパッケージ用イラスト・宣伝ポスター用イラスト計2点を描き下ろした。
（2002年 WJ 12号）

●電気で刺激すると腹筋1000回やったのと同じ効果という、最近宣伝が目立つあの機械、あれ本当なのか?
（2002年 WJ 13号）

●ミニシアター系で多いんだけど入れ替え制の映画館って嫌い。狭くて並んで入るとこで映画が嫌いになる。
（2002年 WJ 14号）

●「世界の美術館」という、週刊で発売されていた本を全100巻ついに集めた。実にいい本だと思う。
（2002年 WJ 15号）

●最近好きなギタリストは、昔のジャズ・ギタリスト。例えば「タル・ファーロウ」代表的な作品として『タル』がある。
（2002年 WJ 16号）

●コミックス『ストーンオーシャン』最新第11（74）巻は4月4日（木）発売。F・Fの最期からミューミューの登場まで。
（2002年 WJ 17号）

●SUGIURUMNのCDジャケットを描いた。（第2弾）発売中。描いただけだけど。
（2002年 WJ 18号）

●テレビでやってたんだけど、FBI超能力捜査ってスゴすぎる。でも、まさかヤラセじゃあないよな。
（2002年 WJ 19号）

●最近、'80年代の音楽を聴いていると泣けてくる。懐かしい時代ということなのだなぁ……
（2002年 WJ 20号）

●文庫コミック版『ジョジョの奇妙な冒険Part2戦闘潮流①②』（④・⑤巻）が先日発売に。各巻定価620円（税込）
（2002年 WJ 21号）

●孤独に闘うヒーローを描かせたら天下一品。マイケル・マン監督作品『ALI』はしびれた。
（2002年 WJ 22・23合併号）

●ワールドカップのファンでは全然ないのだが、一度「フーリガン」というものを見てみたいな。これって不謹慎?
（2002年 WJ 24号）

●たまーに思い出すんだけど、2000円札って本当にあるんだよね?人から一度見せてもらったっきりなんだけど?
（2002年 WJ 25号）

●自画自賛かもしれないけど、文庫本JOJOのカバーデザインはいい。デザイナーさんどうもありがとう。
（2002年 WJ 26号）

●コミックス「ストーンオーシャン」第12巻の発売は7月4日予定です。「ジョジョ」通巻で75巻目になります。
（2002年 WJ 27号）

●ここ最近、近所の工事が続いている。全くいやになっちゃうよ。この騒音には、もう。
（2002年 WJ 28号）

●興味のないワールドカップで、ひとつ引きつけられた事があった。トンマージという名前
（2002年 WJ 29号）

●ボールペンでも耐水の緑色のボールペンって液だれする。何とかしてほしい。
（2002年 WJ 44号）

●自分て引きこもりかな？　ま、なおそうとは思わないけど。斎藤環著『引きこもり救出マニュアル』を読む。
（2002年 WJ 45号）

●最近ショックだった事。ジョージ・クルーニーって俳優いるでしょ…。ぼくより1歳年下だった。
（2002年 WJ 46号）

●作家・乙一氏が復活させた『ジョジョの奇妙な冒険 第4部』新しい「杜王町」の怪事件。よい！
（2002年 WJ 47号）

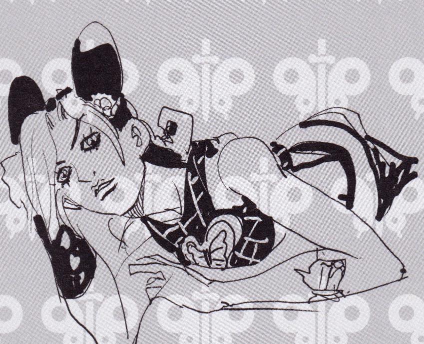
●この秋おもしろかった映画「インソムニア」でも映画の舞台アラスカの家って、遮光カーテンはないのか？
（2002年 WJ 48号）

●ヨーロッパを旅行するとよく写真家アラーキーの一族の方ですか?と質問される。最近はそうですと答えている。
（2002年 WJ 49号）

●今年の仕事場のオレンジの木の収穫は合計16個。よく台風に耐えてくれた。
（2002年 WJ 50号）

●ロイ・スチュアートっていう写真家の下品な「美」には圧倒される。子供は別なの見てな。
（2002年 WJ 51号）

●ジャンプコミックス『ストーンオーシャン』第14（77）巻12月4日（水）発売。「穴」編が主な内容。
（2002年 WJ 52号）



●仕事場にヤモリがいる。嫌いじゃあないんだけど、フンが落ちているんだよね。電話の上とかに。
（2002年 WJ 30号）

●今週4日発売の『ストーンオーシャン』12巻（75巻）の帯には25日発売ゲームの告知もついてます。
（2002年 WJ 31号）

●ちょっとびっくりしたデザインは、プジョーMOONSTERとホンダUNIBOXという車。
（2002年 WJ 32号）

●第35号の『ストーンオーシャン』は、お休みします。理由は秘密。36号には再開します。
（2002年 WJ 33号）

●秋口に、「JUMP j BOOKS」及び「JUMP NOVEL」絡みで、新企画が進行中。近日中に報告予定。
（2002年 WJ 34号）

●休載
（2002年 WJ 35号）

●最近ハマったCDは「NELLY」という、ラップ・ミュージシャン。嫌いな曲がない。
（2002年 WJ 36号）

●クイーン・アミダラは美しすぎた。そこが良かったSWエピソード2は…。
（2002年 WJ 37・38合併号）

●コミックス最新刊第13巻（76）は9月4日（水）発売。徐倫に絡み合うエルメェスとエンポリオが目印。
（2002年 WJ 39号）

●今週遅い夏休みをとっています。でも、その間あれ描くと思う。そう、「変人偏屈列伝」の取材やっています。
（2002年 WJ 40号）

●意外なことだが、暑かった夏にやってけっこう楽しい事。「草ムシリ」。やった人にしかたぶん理解不能の快感。
（2002年 WJ 41号）

●人間ドックにいった。ホテルのような病院で血を採られてバリウム飲むときの炭酸がキモかった。
（2002年 WJ 42号）

●Tシャツは、ほとんど着ない。エリがついたシャツが好み。
（2002年 WJ 43号）

2003

●「ウルトラジャンプ」12月19日（木）発売にイラストを2点描き下ろした。どちらも女性のキャラクター。
（2003年 WJ 1号）

●12月13日（金）に発売。女王陛下の少年スパイ!アレックス<シリーズ第2弾>『ポイントブランク』第1弾同様イラストを描いた。
（2003年 WJ 2号）

●10年くらいぶりに、ごはんのジャーを買い替えた。すごい進化していて、とてもおいしいので、驚いた。
（2003年 WJ 3・4合併号）

●すごい寒がりになってしまった。12月の東京も寒さが厳しかったが、寒さが恐くて実家（仙台）に帰郷できない………
（2003年 WJ 5号）

●新年おめでとう。今年の目標は油絵を描くこと。自分の部屋をかざるために描こうと思う。
（2003年 WJ 6・7合併号）

●今までもしかしてと思いつつ、最近やっと気がついた事。夜コーヒーを飲むとどうも眠れなくなるみたいだ。
（2003年 WJ 8号）

●最近気に入っている女性歌手は「ノラ・ジョーンズ」CDタイトルは『ノラ・ジョーンズ』
（2003年 WJ 9号）

●新年会に数年ぶりに出席。BINGOゲームで空気清浄機が当たった。仕事場に置こうと思う。
（2003年 WJ 10号）

●故高橋俊昌（たかはしとしまさ）編集長のご早世、心からお悔やみ申し上げ、はるかにご冥福をお祈り申し上げます。
（2003年 WJ 11号）

●2月19日（水）発売のウルトラジャンプ3月号にて「変人偏屈列伝エピソード4オリバー君を仕掛けた世紀の興行師」の漫画原作を。
（2003年 WJ 12号）

●おもしろかったTVゲームはプレステ2の「デビル・メイ・クライ2」。ダークなのが好きだな、わたしって。
（2003年 WJ 13号）

●最近凝っている食べ物は、冷凍パックのスパゲティ・ナポリタン。レストランにはない、おいしさ。
（2003年 WJ 14号）

●最近4色原稿は机でなく、「イーゼル」で描くようになった。油絵とか立てかける三脚みたいの。
（2003年 WJ 15号）

●東芝デジタルフロンティアからDVD版「バオー来訪者」が今春再発される。カバーを描き下ろした。
（2003年 WJ 16号）

●ＪＣ（コミックス）「ジョジョの奇妙な冒険Part6ストーンオーシャン」第16巻が4月4日に発売されます。
（2003年 WJ 17号）

●知り合いの子が受験に合格したとか、結婚する他誌の編集者とか、ああ!春が来ると思った。
（2003年 WJ 18号）

●6部「ストーン・オーシャン」愛読どうもありがとう。次作「スティール・ボール・ラン」でお会いしましょう。
（2003年 WJ 19号）



2004

●ジョジョの奇妙な冒険P(パラレル)ワールドに突入した。そしてジョジョでなくなったっていう事でＳＢＲ(スティール・ボール・ラン)
（2004年 WJ 8号）

●2004年の目標はゴルフを始める事。やった事一ペンもないから。
（2004年 WJ 9号）

●生まれて初めて京都に行き、途中新幹線の車内から、生まれて初めて富士山を見た。
（2004年 WJ 10号）

●アメリカ南西部取材旅行で一番おいしかった食べ物は「バーガー・キング」だな。
（2004年 WJ 11号）

●編集担当が、8代目嶋さんから9代目瓶子さんに変わりました。嶋さん感謝。
（2004年 WJ 12号）

●最近よく聴いてるCDはノラ・ジョーンズの新譜と「続・夕陽のガンマン」のサントラ
（2004年 WJ 13号）

●カタログ本を見てると、なぜか心が落ちつく。近頃見てるのはブティクのI(インテリア)だけの写真が載った本
（2004年 WJ 14号）

●料理。スパゲティーカルボナーラ。奥が深い。スゲッ手早くやらないと卵がかたまっちまうんだよね
（2004年 WJ 15号）

●「変人偏屈列伝」が単行本で3月19日（金）発売。10年に1回しか出ない3冊目の短編集。
（2004年 WJ 16号）

●ＳＢＲ(スティール・ボール・ラン)は31P連載です。が、10週位ごとに休むことになりますのでよろしく。２Ｓ(セカンドステージ)再開は6月頃。
（2004年 WJ 17号）

●休載
（2004年 WJ 18号～28号）

●今年はよく漫画家に会う年だ。仕事ではなく、プライベートで。11人に会った。
（2004年 WJ 29号）

●フィンランドの人たちって本当にキシリトールガムばっか噛んでる国民なの?
（2004年 WJ 30号）

●毎年のグチだけど梅雨シーズンは原稿用紙が湿るのでペンが走りにくくて困る。
（2004年 WJ 31号）

●突然、フルーツのマンゴーのアレルギーになった。大好物なのに食べられなくなった。
（2004年 WJ 32号）

●漫画家ジョージ朝倉(あさくら)が誕生日だったので花を贈ったら、倍のお返しが来た。やばいよ。
（2004年 WJ 33号）

●超高級ワインもらったんで、旅行先で飲もうと持ってったら、痛んでしまった。
（2004年 WJ 34号）

●近所を配達してる郵便と宅配は寝てるの知ってるので、午前中ぜったい持って来ない。
（2004年 WJ 35 号）

●本屋で品切れらしいんだけど「ガッツ伝説って本ありますか?」って恥ずかしくて聞けない。
（2004年 WJ 36号）

●仕事場にゴキブリが出た。殺虫剤半分使って始末したんだが、そっからが恐い。復活しそうで。
（2004年 WJ 37・38合併号）

●メカって、そんな好きじゃあないんだけど「サンダーバード」は別。1～5号全部集める。
（2004年 WJ 39号）

●休載
（2004年 WJ 40号～45号）

●ＪＣ(コミックス)「スティール・ボール・ラン」③と④が11月4日（木）同時発売になるので、よろしく。
（2004年 WJ 46号）

●最近の課題はよい散歩コースを探すこと、車の通行などストレスのないコースはなかなかない。
（2004年 WJ 47号）

※ WJ 連載分の巻末コメントはこれにて一旦終了。
2009年「ウルトラジャンプ」1月号より再開。





2008

●藤子Ⓐ先生と同じ雑誌に載せてもらえるなんて夢のよう。3Q!SQ!
（2008年ジャンプSQ. 創刊 2号『岸辺露伴は動かない ー六壁坂ー』）

2009

●コメント、本当久しぶりでマジ緊張します。UJ、これからもよろしく。
（2009年「ウルトラジャンプ」(以下、UJ) 1月号）

●休載
（2009年 UJ 2月号）

●今年に入り望月三起也先生、篠山紀信先生と会えた。あんな風に年をとりたいです。
（2009年 UJ 3月号）

●京都へ行った。「舞妓さんだッ」って言ったら、「あれパチもん（にせ者）や」って地元の人に言われた。
（2009年 UJ 4月号）

●今春は、花見を3回しました。「花鳥風月」全部しみじみ楽しめる良い季節ですなあ。
（2009年 UJ 5月号）

●忘れ物しないようにと8万円もする傘買ったが、甘い考えだった。失くした。
（2009年 UJ 6月号）

●休載
（2009年 UJ 7月号）

●友人が渡辺篤史さんの「建もの探訪」に出演だって。きっと夫婦でギター弾かせられたな。
（2009年 UJ 8月号）

●ネコ、あまり好きじゃあないけど、和歌山の「ネコの駅長」。会いたいです。
（2009年 UJ 9月号）

●映画『96時間』良かったです。スタイリッシュで泣けるという奇跡の傑作、ありがとう。
（2009年 UJ 10月号）

●夏、蝉が怖くて。「死んでる?」と近づくと「ギ!」ってゾンビみたいに甦るところ。
（2009年 UJ 11月号）

●CDの「紙ジャケット」ってのを集めるの趣味にしてるけど、売り切れスゴい多い。
（2009年 UJ 12月号）

2010

●近所にうまいピザ屋が出来て、超幸せです。良い打ち合わせ場所としても。
（2010年 UJ 1月号）

●新年一番最初にした事は「マリオカート」でした。普通はホラー映画だけど…。
（2010年 UJ 2月号）

●買い物行ったら「Perfume（パフューム）」のあ～ちゃんに会った。どんな確率?運命の人?（違うか?）
（2010年 UJ 3月号）

●好きな政治家のキャラクターは伊の「ベルルスコーニ」首相。ハッピーそう。
（2010年 UJ 4月号）

●新しい「三菱一号館美術館」に行きました。赤レンガの明治の建物復刻。凄ッ!
（2010年 UJ 5月号）

●CD。「ジェフ・ベック」のニューアルバム、超良いです。確かで祈りのようなロック。
（2010年 UJ 6月号）

●最近本当、「絵画展」と「ゾンビ映画」を観てます。どちらもずっと浸っていたい。
（2010年 UJ 7月号）

●最近、ラッキー・ランド災難つづき。上の階で漏水。仕事場に水が降って来た。
（2010年 UJ 8月号）

●ちばてつや先生宅へ。まさに、あの名作たちが生まれた歴史的建造物だと思いました。
（2010年 UJ 9月号）

●今年の夏、一番多く使った「ワード」は「暑い」ですね。一日何回?まさか何十回かも。
（2010年 UJ 10月号）

●「お神輿」って元気もらえますね。この秋も担がせていただきました。
（2010年 UJ 11月号）

●インフルエンザの予防接種、「痛くない」と言ってたのに痛かった。泣いた。
（2010年 UJ 12月号）

2011

●映画『トワイライト』シリーズにハマりました。血吸いたいのに吸えないね。
（2011年 UJ 1月号）

●謹賀新年。今年も『ジョジョ』をよろしくね。
（2011年 UJ 2月号）

●NYへ行って来ました。死ぬかって寒さで「ジョニィ」は偉いなと思いました。
（2011年 UJ 3月号）

●地元・仙台をはじめ、全ての被災地の方々に心よりお見舞い申し上げます。
（2011年 UJ 4月号）

●「SBR」心より完結大感謝。第8部「ジョジョリオン」でお会い致しましょう。
（2011年 UJ 5月号）

●前歯が虫歯になったので主人公がすきっ歯になりました。新作よろしくお願いします。
（2011年 UJ 6月号）

●新書の〔奇妙なホラー映画論〕、初代担当・椛島氏との久々のお仕事でした。
（2011年 UJ 7月号）

●暑いの苦手ですけど、今年の夏はどこか好きです。家に風鈴さげたせいかなあ～?
（2011年 UJ 8月号）

●休載
（2011年 UJ 9月号）

●ジョジョの小説が出ます。よろしければ読んでください。おもしろいよ!
（2011年 UJ 10月号）

●最近好きなのは、固いのよりユルユルのスパゲティ。
（2011年 UJ 11月号）

●スーパーカーのカレンダーを買った。運転もしないのに、自分でも「何故?」
（2011年 UJ 12月号）

2013

●藤子Ⓐ先生のところに遊びに行った。優しい先生。ああなりたいなあ。
（2013年 UJ 1月号）

●今年も去年以上に、『ジョジョリオン』力入れて描きます! よろしくね。
（2013年 UJ 2月号）

●休載
（2013年 UJ 3月号）

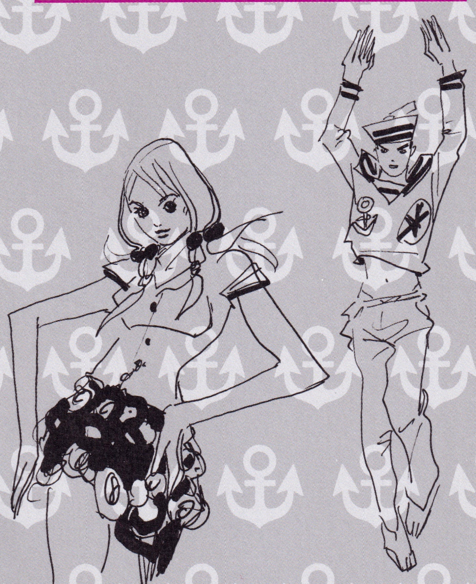
●最近の洋楽CD、盛り上がっていいです。ゴティエとかTマッグロウとか。
（2013年 UJ 4月号）

●ヨガ教室に通っています。ヨガの先生がちょっとポッチャリ目。それで良いなら良いです。
（2013年 UJ 5月号）

●打ち合わせ時の飲物はジンジャーエール氷なし。コーヒーは後で眠れなくなるからなあ。
（2013年 UJ 6月号）

●料理番組をよく見ているけど、土井善晴先生はやっぱりすごい。尊敬してます。
（2013年 UJ 7月号）

●最近の大好物はルッコラだけのサラダ。
（2013年 UJ 8月号）



2012

●近所の「プラネタリウム」行ってみました。早くあるの教えてよ。感動しました。
（2012年 UJ 1月号）

●ジョギングシューズが、走ってる時に左右同時に壊れました。同時ってすごくない?
（2012年 UJ 2月号）

●岐阜旅行に行ってきました。寒かったけど、昔の宿場町の散策はよかったなあ。
（2012年 UJ 3月号）

●人形浄瑠璃の文楽を鑑賞。人形が意外と大きくてびっくりした。
（2012年 UJ 4月号）

●皆既日食用に太陽を見るメガネを買った。晴天を願う!
（2012年 UJ 5月号）

●『テルマエ・ロマエ』を読んだ。あの時代に水道があったローマってすごいね。
（2012年 UJ 6月号）

●休載
（2012年 UJ 7月号）

●近所を歩いていたらカラスに襲われて帽子を奪われた。返してもらったけど。
（2012年 UJ 8月号）

●休載
（2012年 UJ 9月号）

●今年の夏はシュウマイ弁当を本当によく食べたなあ。よく新幹線に乗ったから。
（2012年 UJ 10月号）

●今使っている家の電話機は『ジョジョ』の連載が始まった時に買ったもの。イエデンも25周年。
（2012年 UJ 11月号）

●超人懐っこいドーベルマンが近所を散歩してるんだけど、僕は信用してない。できるわけない。
（2012年 UJ 12月号）

●久しぶりの週刊少年ジャンプ執筆させて頂きお邪魔致しまぁーす。嬉しいなぁ
（2012年 WJ 45号『岸辺露伴は動かない ～エピソード5：富豪村～』）

JOJO JOURNEY

Hirohiko Araki Interview

荒木飛呂彦　インタビュー

★★★
第1部 ファントムブラッド
第2部 戦闘潮流
第3部 スターダストクルセイダース

椛島さんとの対談でも少し話が出ましたけど、第1部はディオを描きたかったんですよ。とにかく彼を描くためのストーリーみたいなところがあって、「ディオをどう動かすか」を常に考えていた気がします。「善と悪」「白と黒」みたいな主人公とライバルの対比を見せる漫画にしようと思っていた。そのためには敵が強力じゃないと絶対面白くないんですよね。だからディオは、「どうやって主人公はコイツに勝つんだ⁉」と読者が思ってくれるような「究極の悪」にしました。ただ、読者がちょっと憧れるような部分も持った悪、「共感できる悪」にしたいとも思ってました。

ディオを究極の悪にした分、その対比としてジョナサンは純粋すぎるくらいのキャラクターになりましたね。ジョナサンは今だったら、もうちょっと違う味付けができるんだけど、当時は僕も若かったから。

主人公のジョナサンという名前に、そんなに深い意味はないですね。外国人が主人公なので名前は「とにかく読者が覚えやすいものにしよう」と思っていました。「スティーブン・スピルバーグ」みたいに、頭で韻を踏んでいると印象が強いように感じたので「ジョナサン・ジョースター」。

今では受け入れられているけど当時は外国人が主人公



の漫画なんて少なかったから、馴染みがないというか違和感がありました。自分でも描いていて「人気は出ないかもな」という意識もありつつ、でも「こういうのも認めてほしい」という気持ちもありました。

ディオは『魔少年ビーティー』の主人公・ビーティーの発展系なんです。嫉妬だとかハングリー精神といった人間の感情の影の部分を、ビーティーよりももっと深くしたキャラクターです。



悪役であるディオを描いていた時は、自分の精神面にも影響はあったかもしれない。イライラするようなことはないんだけど、例えば普段の暮らしの中でも、ふとダークなことを考えてしまったり、ディオと同じ視点になっちゃって人間を昆虫観察するような目で眺めてしまったり、そういうことはあったかもしれないですね。

『魔少年ビーティー』を描いていた頃もそうだったんだけど、第1部や第2部の当時に目指していたのは少年漫画へのアンチっていうか、友情・努力・勝利っていう「週刊少年ジャンプ」（以下、WJ）の世界に挑戦して開拓していこうっていう生意気な気持ちもありました。

第2部の主人公のジョセフという名前は、ジョナサンと同じく「ジョジョ」になればいいってことだけで、これも深い意味はないです。お調子者の性格は、生真面目だったジョナサンと対比させたからですね。

物語で目指したのは「誰がいちばん強いのか」「どういう人間が怖いのか」を描くこと。敵が「究極生命体」という設定は、まさにそこですね、食物連鎖の頂点。

当時は「とにかく自分の作風を作らなきゃ」と思っていました。僕の先輩の方々、1970年代の有名な作家さんは、皆さんご自分の作風を持っているんです。そこには何か大事な意味があるんだろうと思っていました。だから自分の漫画の人気がないからといって、「ホラーを描いていたのに、急にスポーツ漫画やラブコメ漫画を描くようになっちゃダメだろう」と。「そこは突き詰めていかなきゃダメなんだ」「ブレてはいけない」と思うようになったんです。それは自分で自分を追い込むことになるけど、今でも続いていますね。行き詰まったら終わりかもしれない。…でも道は必ず開けると思えばこそです。



第3部は、第1部と第2部の主人公が外国人で続いたので、日本人になったっていうのはあるかな。でも向かう場所はエジプトだし、仲間も外国人が多かったんですが（笑）。

主人公の名前は「承」の字には「受け継ぐ」という意味があって、本当は「しょう」という読み方だけどお寺の名前とかで「じょう」と読ませることもあったので、それに決めました。「空条」の方は、第3部が始まる時に鎌倉に取材に行ったことがあって、鎌倉幕府の執権だった「北条」氏からですね。それで「ジョジョ＝空条承太郎」としました。

第4部 ダイヤモンドは砕けない
第5部 黄金の風
第6部 ストーンオーシャン

第4部の主人公の東方仗助という名前も、それほど深い意味はありません。主人公の名前は、印象に残ればいいという発想があるんですよ。あまりにも外れているものはダメだけど、ファンタジー性があって「ジョジョ」になっていればいいんです。

第4部では、「悪のキャラクター」については色々と考えましたね。第2部ではカーズという究極生命体を描いて、第3部では世界の支配を目指したＤＩＯを描いたんだけど、以前に描いた悪とは違う新しい悪の概念を探して、それで辿り着いたのが吉良というキャラクター。宇宙だとか神の視点から見る人間を想像し、「悪っていったい何だろう?」「善悪とは実は曖昧なものではないか」という考えから生まれました。例えばもし殺人が趣味というヤツがいたら? 殺人が生きるために必要なことで、それが無くなったら存在できないヤツがいるとしたら?

趣味が殺人というのは怖いし、それは街という舞台とも合っていましたから。

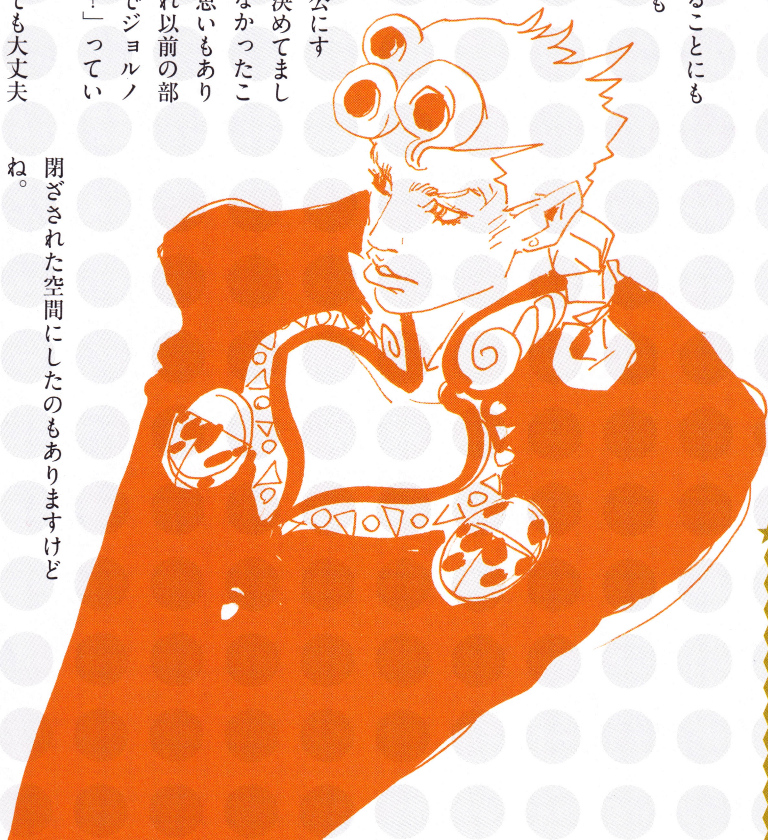
吉良吉影って、自分の「呪われた」人生を恨んでいないヤツなんですよね。美しい手首への執着という「呪い」とも言える性(さが)を認めて、さらに前に行こうというキャラクターで、これはちょっと他の作品の悪役とは違うと思います。

第5部「黄金の風」で、絵の面で難しかったのは、主人公のジョルノの眉毛。それまでの歴代主人公は太い真っ黒な眉毛なんだけど、ジョルノでは細い眉毛に挑戦しようと思ったんですよ。ただ、花京院みたいな脇役なら細くてもいいんだけど、主人公では最初は難しかったですね。かつての少年漫画の文法では眉毛は太かったし、僕もそれに慣れていたから。でも、そこは挑戦だと思って、意識して冷静に描いていきましたけど。

また第5部では中性的な感じを取り入れることにも挑戦しました。ファッションも女性っぽいものを着せたり、ブチャラティなんか女の子の髪型だし（笑）。だけど目指したのは「男の世界」を描くことでした。絵の面での挑戦、そして存分に「男の世界」を描いた第5部があったからこそ、第6部で女性主人公に持って行けたという面はありますね。

第6部「ストーンオーシャン」で女性主人公にすることは、最初の打ち合わせをする前から決めてました。『ゴージャス☆アイリン』の時にできなかったことが、今ならできるんじゃないか、という思いもありました。女の子を主人公に、というのはそれ以前の部でも考えたことがあったのですが、第5部でジョルノを描いていた頃から、「次こそは女の子で！」っていう気持ちが大きかったんですよ。

ただ、鼻血を出したり腕が吹っ飛んだりしても大丈夫なくらいタフでリアルな女の子にしたかった。舞台が刑務所なのもタフさを出したかったからなんです。第5部でイタリア中を旅したから、今度は刑務所という閉ざされた空間にしたのもありますけどね。



徐倫は、戦闘ができるけど、ちょっと女の子の体のラインも出したいと思って、あの服装にしました。もうひとつ、僕はキャラクターのシルエットを重視するん



ですが、前の部の主人公とシルエットがかぶらないようにと、頭にお団子をふたつ付けたデザインにしたんです。

ちなみにサブタイトルがつくことになったのも第6部からです。「ストーンオーシャン」というこのタイトルは、女性が主人公なのを象徴して「オーシャン」を入れたんです。世界中に「母なる海」という言い方があったり、船名に女性の名前を付けたりと、海は女性の象徴なんですよね。「ストーン」のほうは石の牢獄のイメージ。だから「ストーンオーシャン＝石作りの海」は、牢獄でもあり、女性の心でもある。スタンドのストーン・フリーは「牢獄から出て自由になる」、そんなイメージですね。

いい機会だから、その時に残りの第1部～第5部にもサブタイトルをつけました。

第1部の「ファントムブラッド」はジョナサンとディオの血の因縁をイメージしたもので、血筋が生み出すファンタジーや神話性・幻想性を考えて。

第2部の「戦闘潮流」は時代が影響していますね。バブル全盛期で、「次へ、次へ‼」「もっと儲けよう、デカくなろう‼」みたいな社会背景があったから、究極生命体に至るまで戦いの流れが次々と大きくなってい く…そんなイメージがあります。「スターダスト クルセイダース」という第3部のサブタイトルは、「スターダスト」が「ジョースター」家とか「スタープラチナ」から連想される言葉。「DIO」という敵に向かっていく聖戦」のイメージですね。第4部の「ダイヤモンドは砕けない」ってのは何があっても壊れない不屈の闘志。



第5部は4大元素の空気（風）を入れて、ジョルノの爽やかさもイメージして「黄金の風」。歴代主人公のスタンドには、プラチナとかゴールドみたいに鉱物の名前を入れていたんですけど、第3部以降の部のサブタイトルにも鉱物の名前と、加えて空気・火・土・水といった自然界の4大元素を入れたいというのがあったんですよ。それで黄金とかダイヤモンドといった鉱物系の名前を割り当てていったんです。

画集「JOJO A-GO!GO!」を出したのもこの頃ですね。
第6部の連載前にはアメリカにも取材に行きました。刑務所の内部にも特別に入れてもらえて、それは貴重な体験でした。刑務所では凶悪犯がいる棟を見せてもらいました。僕が取材したところでは、凶悪犯は透明な硬質ガラスの牢獄に閉じこめられていて、部屋の外にあるTVを見て1日を過ごすそうです。本当に映画みたいな感じでしたね。
東さんもインタビューで言ってるけど、僕は見学中に気分が悪くなっちゃって（笑）。とにかくセキュリティがすごくて、エレベーターに乗ったり1ブロック進むたびに扉が「ガーン！」って閉まるんですよ。自分がどこをどう進んでいるのかも分からなくなって、「出られなくなるかも!?」って思ったら過呼吸になっちゃった。「これはまずい」と思って廊下のソファで休んでいたんですが、隣に座っていた男の人が、後で聞いたら入獄待ちの犯罪者だったっていう（笑）。ホント、そういうレアな体験をしました。

★★ 第7部 スティール・ボール・ラン 第8部 ジョジョリオン

『スティール・ボール・ラン』は、全てを壊したところからもう一度始める物語にしようというイメージでした。スタンドの物語は第6部で一旦終わったんだけど、もう一回再生するというか、「ルネッサンス」と言ってもいいかな。第6部のラストで一巡した宇宙の続きのような、そうでないような、パラレルワールド的な感じもありますね。
第7部の『スティール・ボール・ラン』は「輪廻、回転、螺旋、無限のエネルギー」といった言葉が作品イメージとしてあって、そこで主人公のひとりであるジャイロの名前は回転ゴマのジャイロ効果から付けました。タイトルは止まらない感じを出したくて、さらにレースを連想しつつ鉄のイメージもあるってことで『スティール・ボール・ラン』。
WJでの連載時は『スティール・ボール・ラン』だけ

で、タイトルに『ジョジョ』が入っていません。これは「新連載」と銘打ったほうが読者の食いつきはいいだろう、という編集部からの要請でした。でも自分の中では『ジョジョ』。「ウルトラジャンプ」（以下、UJ）に移籍した時に『ジョジョ』を復活させたのも、そういうことですね。

絵についてお話しますと、『スティール・ボール・ラン』はウエスタンの雰囲気を出したかったんです。描く線も、砂漠の雰囲気を出すためにちょっとカサカサした感じにしてみようと顔やプロポーションの線を細くしてみたりもしました。

コミックス4巻分まで描いたところで、UJに連載の場を移しました。UJを移籍先に選んだのは井藤さんがいたからというのもあるし、他の青年誌はどれもページ数が少ないから選択肢にあまり入っていなかったのもあります。集英社以外の出版社は最初からないなと思っていましたね。「WJ以外の場所でもいいかな」と思い始めたのは、漫画家としての危機意識というか、「自分がそこにいて将来どうなるか」が見えない時期っていうんですかね…自分の中でそんな迷いがあった頃です。初代担当の椛島さんにも相談したりしましたけど…、そこを決めるのは自分だから。

UJに移ってからは、謎の遺体を登場させたり新しい敵の大統領を出したりと、色々とパワーアップもしました。あと、過去のシリーズと比べ、主人公であるジャイロとジョニィの過去をたくさん描きました。週刊連載だと、現代に戻って「今週は過去の話ですよ」と分かるようなシーンを1週分19ページの中で



描かなきゃいけないからすごく慌ただしくなるんだけど、月刊だとページ数があるからたっぷり描ける。そういうところもいいですね。

UJはWJに比べて印刷がいいので（笑）、絵をリアルに描きたくなりました。テーマを持って変えようと思ったわけじゃなくて「印刷に負けないようにしよう」と思ったら自然に変わったんです。

カラーイラストもね、UJは色味が深くまで印刷に出る感じがあるんです。最初の頃はそれが分からないから、「もう少し色を重ねて塗ればよかった」と思うこともあったんですが、分かってからは塗り方も変わりました。『スティール・ボール・ラン』という物語自体、イメージが「再生」だったけど、移籍を経て漫画の描き方についても再生できた気がしています。

『ジョジョリオン』も一種のパラレルワールドですね。『岸辺露伴は動かない』のシリーズと隣あわせの世界です。主人公の東方定助はセーラー服を着ているけど、あれは遭難した人のイメージなんです。遭難して記憶をなくした、そんな人のイメージです。

タイトルの由来は第2巻のカバーコメントに描いたとおり。「ジョジョ」という言葉を入れたかったのと、記念碑的な意味を込めたかったからです。それでそのままふたつを繋げて『ジョジョリオン』。最初に担当編集の井藤さんに聞かせたら、「え？ なんスか、それ」って言われて、「ちょっとヤバいかな」と思ったけど（笑）。

タイトルは他にも色々と考えましたよ。そのうちのひとつが「ジョジョメノン」。後にムックのタイトルとして活かされてますけど（笑）。杜王町が舞台なんで「ジョジョタウン」ってタイトルもあったかな。割と軽い気持ちですよ。ちょっと時代からずれていたりとか、そういう雰囲気を感じてもらえればいいんであって、意味が分からなくても「『ジョジョ』の新作だ」って分かってくれればそれでよかったんです。

漫画家…いつまで続けるのかなぁ。60歳くらいかなーって昔から考えているけど、どうなるんだろう。年齢を重ねていくと、座っていられる時間も短くなっていくだろうし、疲れが抜けないこともあるだろうから、仕事の時間は短くなるだろうし。それでいながら読者にサービス出来るやり方を模索していくと思いますよ。週刊とか月刊で連載とかではなくて、たっぷりと時間をかけて描きためたものを、描き下ろし単行本で読んでいただくとか。そういう感じの漫画家になっていくかもしれないですね。

To Be Continued

そもそも漫画家になりたいと明確に思ったのは高校生の頃で、僕と同世代の人がデビューしたのがきっかけでした。「先を行かれた！」という焦りが生まれました。小学生の頃から漫画は好きでしたけど、その頃はまだ職業として漫画家を明確に意識してはいませんでした。でも漫画を読んで、分析してカテゴリ分けし、それをノートにつけたりしてましたね。「ホラー漫画と一言で言っても、水木しげる先生と楳図かずお先生はこう違う！」とかね。映画も全体の尺から、「主人公は何分頃に登場して、何分頃に事件が起きて」っていうのを分析してたり…。漫画や映画、絵画などはそうやって観ていましたね。

小学生の頃は友達にも各分野のマニアみたいな人がいました。オーディオの友人だと「あのアンプは真空管がこうだから、出てくる音が柔らかいんだ」とか、自転車の友人だと「ペダルを止めるネジは2種類あって、こっちのネジがカッコいいんだ」とか、美術好きの友達は「ゴーギャンのここがいい。ダ・ヴィンチはここが他と違う！」みたいな話をしたりとか。膨大な数のレコードを持っている友達もいましたねぇ、小学生なのに（笑）。そんな中には僕が描いた漫画を批評してくれる友達もいた。彼がまた的確な批評をくれるんですよ。初代担当の椛島さんみたいなタイプ（笑）。

僕が漫画家になったのはそういう周りの環境も大きかったのかもしれない。今にして思うとちょっと変ですかね（笑）。僕が住んでいたのは仙台市の中でも田舎のほうだと思うんですけど、変わった文化圏だったのかもしれませんね。

漫画家として、常に新しいことに挑戦していくのも大事だと思っていますけど、それはデビューした頃にWJに教えてもらったことなんです。他の作家さんや作品と同じようなものを描いてはいけないんだと教わって、ずっとそれを守り続けて挑戦している感じですね。

雑誌に対してはちょっと不思議な気持ちがあります。僕はWJやUJのために描いているところもあるんですよね。もちろん読者に喜んでほしいというのが最終的にはありますけど、依頼してくれた編集部や担当さんに向けて描いているというか…。例えるならローマ

皇帝の依頼で彫刻を作ったり、法王のために絵画を描いた芸術家。そんな気分です。

『ジョジョ』には「運命を乗り越える」っていうテーマもあります。主人公が追い詰められるストーリー展開になると、作者自身もどうしていいか分からなくなって主人公と同じ気持ちになるんですよ。「作者がどう乗り越えていくのか」という部分と「主人公が危機をどう乗り越えていくのか」という部分は完全に一致します。そうやって漫画を描いていると、「人間の生き方というのは何かを乗り越えていくんだな」という結論になるんですよ。

それはきっと、例えば自然を克服しながら作物を作っていく農業も同じような気持ちなんだと思う。トマトを栽培するのも漫画を描くのも「何かに挑戦して、それを乗り越えていく」ということ。それこそが人間の生き方なんだろうと思います。これからも、『ジョジョ』を通して、そういう「人間の生き方」を描いていきたいですね。



（2013年6月7日、荒木先生の誕生日に収録）

あとがき

画集『JOJO6251』が出版されたのが、一九九三年。第2冊目、『JOJO-A-GO!GO!』が二〇〇〇年。

そして今年、二〇〇三年にこの第3冊目の画集―『JOJOVELLER』を出版させて頂く事になったのは、誠に嬉しい事です。

漫画のカラー原稿というのは、掲載誌の表紙であったり、巻頭のカラーであったり、また、COMICSの表紙の為に描いたりしたものだったり、また、他のアーティストたちの為の広告やCDジャケットとか用に描いたものだったり。

ほぼ必ず誰かからの『依頼する意志』があって描かれ、その枚数が集まって画集になっていきます。

描く時はコツコツ。それが集まって行く事が本ヨに嬉しい。つまり―「自分が画集を出すぞッ!!」って熱い目標を持って絵を描くのではなく、10年くらい描いていたら、なんとなく溜まって集まりました。って言う所がしみじみ、良いなあ〜って思うのです。それってクールじゃあないですか?。原稿が集まって来た事に感謝致します。まさに「画集」。

そしてつまりです。考える事は……『描く行為』ではなく、『原稿を依頼して来る』編集者っていうのが『神』なんだなあ……ってつくづく思うのです。

荒木飛呂彦

この画集―「JOJOVELLER」のコンセプトは"旅"って説明はもう おわかり頂けてますよね?
あとがきでは必要ないね

JOJOVELLER

HISTORY

2014年4月23日　第1刷発行
2023年3月29日　第2刷発行

著者
荒木飛呂彦

発行人
今井孝昭

発行所
株式会社 集英社
〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話 編集部 03-3230-6236 読者係 03-3230-6076

印刷所
図書印刷株式会社

Printed in Japan

編集人
阿相道広

編集
井藤涼　山内智

構成＆編集協力
戸澤好彦
平澤南苗　中村ちな美
(樹想社)

撮影
石川耕三
(P012-P042)
露木聡子
(P125-P127)
中島誠
(P087、P124、P128)

アートディレクション＆本文デザイン
小林満
工藤亜希　黒川智美
(ジェニアロイド)

※この商品は、2013年に発売された『JOJOVELLER 完全限定版』と同内容です。

ISBN978-4-08-782458-2